
Night-mare

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N i g h t - m a r e

【Nコード】

N 6 3 1 5 B

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

ハロウィンパーティーの日、いきなり地球とは違う世界に引きずり込まれた悠真は、長身で美形な男と出逢う。魔界、魔力、魔王、妖怪。男にも女にも何気にモテる彼が訪れたのは既に死んでしまった者がいる世界。魔界と契約してしまった彼は一体どうなる！？お待たせしました、ついに完結！

序章

長い夏が終わり、少し涼しい風が吹き始めたこの頃。この学校はある行事で騒がしかった。誰もが何の日なのか知っている十月三十一日。そう、今日はハロウィンだ。

「それはあつちに持って行けばいいのか？」
「そう、お願いね！」

この学校ではこの日の夜、生徒が学校に集まり普段とは違う服装で交友を深め合うハロウィンパーティーが存在する。修学旅行に並ぶ程の人気のある行事だ。

この行事は少し並の人から外れた考えを持った生徒会長から始まった。お菓子と悪戯いたずらと祭りが大好きな生徒会長は自分の性格にぴったりのハロウィンに憧れた。高校二年にあがったとき、彼は生徒会長に立候補する。そして見事会長の座を取るとすぐさま先生にこう言った。

「先生、僕はこの学校の行事にハロウィンパーティーを加えたいです！」

もちろん、それに賛成できる先生は誰一人としていない。だが、どんなに言ってもどんなに否定しても諦めない彼に先生も心労が溜まっていく。そこで先生はこう言った。

「その行事を加えて得られるものと毎年行なう必要性を原稿用紙十枚分にまとめられてこれなら少しは考えてやってもいいぞ」

と。原稿用紙十枚。この数字は読書感想文三枚以上と聞くだけで文句を言う高校生にとってはかなり大変だ。だが、彼は文句も言わずただ本当に嬉しそうに家に帰ってしまった。その日の翌日、彼はその先生に十枚ではなく三十枚近い原稿用紙の束を差し出した。その量に驚き、だが、ただ同じことの繰り返しだろうと読んだ内容に更に驚愕を示した。

『中間テストが終わったこの時期、僕たち生徒は一番遊びたいときです。緊張やストレスから解放されて
(中略)

です。ですから、このハロウィンは僕たちにとって必要なもので、この行事を行なえば今まで問題になってきたことが全て解決するのです。ねえ？そう思いませんか？
(中略)

そう、今こそ全ての問題を解決すべく毎日でもハロウィンをやるべきなのです！わかりますか？行事にした方がいいではなく、行事にしなければならぬのです！このハロウィンは最早高校から出て自立する際に行なう卒業式と同じくらい重要視するほどのものなのです！そんなんです！ああ、ハロウィン！お前はなぜそんなに影が薄いんだ！もつと自己主張してくれば先生を説得するのにも簡単だったろうに。今、この僕が言ったことを聞いて誰が納得できない人がいようか、いやそんな者はいない。そう、誰もが納得して頷いてくれるに違いない！』

と、熱く、強く、そして明らかに最初と最後では言っている内容が異なる私情挟みまくりの素直過ぎる作文だからだ。

もう、何もかもが面倒になった先生は校長に何とかお願いしてハロウィンパーティという行事をこの学校に入れたのだった。見事、自分の野望を達成した生徒会長の名は柳龍一。彼が生徒会長になったその年の十月三十一日、初めてハロウィンパーティが実施された。だがしかし、生徒の中で一番これを心待ちにしていた龍一はそ

の日から行方不明になった。

「あ、こんにちわ。悠真先輩」

夜のパーティのためにせっせと全員準備に取り掛かる。そんなとき、二年の教室に一人の一年男子が顔を出す。声に反応した茶髪がかった髪の少年は笑顔で応える。

「よ、原松。どうしたんだ？」

「いや、もう用が済んだ帰りなんで先輩に顔を出しておこうかと。今日のパーティ、ぜひバスケットの方にも顔を出してくださいよ。皆で着ぐるみかぶろうって何か張り切ってるんで」

悠真と呼ばれた彼は鷹崎^{たかさき} 悠真^{ゆうま}、高校二年生。帰宅部だが運動神経の良さを買われてバスケット部にしばしば助っ人として現われているのだ。そのバスケット部の後輩がこの原松^{はらまつ} 芳季^{よしき}、高校一年生。先輩を押し退けてレギュラー入りした根っからのバスケットマンだ。

「着ぐるみって……誰がどれに入っているかわからないじゃ」

「それがいいんだ！それが青春だ！それがロマンなんだああ馬鹿野郎おお！って叫んでましたけど」

バスケット部の先輩はかなり精神的にやられてるんじゃないかと少し心配になった。それを普通のことのように話す原松も原松だなあつと悠真は思う。

「そつえば先輩は何を着るんですか？」

「そう、それが問題なんだ。何か俺はクラスの皆に衣装を用意してもらったみたいなんだけどさあ、未だに何の衣装なのか教えてくれないんだよなあ。何だと思う?」

「……………すみません先輩。俺はそんなこと言えません。先輩を傷付けるようなことできないですううう!!」

本当に悲しそうな顔で去り行く芳季の姿を見ながら悠真は頬を掻く。ふと、背後から何からぬ気配を感じて振り返る。だが、そこには変わらずパーティの準備をするクラスメイト。

「……………?何なんだ?」

このとき悠真はクラスメイトから恐怖の衣装を受け取るとは思いもしていなかった。

空は紅く染まり始めて準備もほとんど終わり、悠真はやつと一息ついた。早めに準備が終わったクラスはもう家に帰っていた。悠真たちのクラスもそろそろ一時帰宅するかと帰り支度を始めた。

「悠真!ちよつといいか?」

クラスメイトの一人が悠真を廊下に呼び出した。何の疑いもなく廊下に出るとそこには数人の友人。少し悪い予感を抱きながら真ん中に立っている者が持つ紙袋を見つめた。

「何?」

「ほら、皆で考えたお前のおきのお装だ！あり難く受け取れない！」

変なノリで渡された紙袋を恐る恐る開けた。布の色は少し明るめの青色と透きとおる程綺麗な白。服の形は開けただけではわからず紙袋から取りだした。その瞬間彼の思考は停止する。少し制服と似ているが、制服よりも薄い布で作られた青い上着とその上着とよく会う純白のフリルがついたワンピース。この衣装が仮装のものと考えるなら誰しも理解できるだろう。これが不思議の国のアリスの服だと。

「ちょっと待て！何故俺がアリスの衣装なんだ！」

叫ばずにはいられないこの展開に皆は無を言わせない恐い笑顔で言った。

「だって、悠真君が一番似合うんだもん！」

「皆お前がこれを着るのを楽しみにしてるんだぞ！」

「もちろん、他に着るものがないからつき返さないわよね？」

悠真の顔は少し丸みがあり、瞳も少し大きい。そのためか可愛い男の子としてこの学校では有名だ。女子にも男子にも結構人気があり、隠れファンも存在する。

「お願い！」

必死な様子に悠真は嫌とは言えなかった。

何とも言い難い気持ちで紙袋をさげて悠真は帰宅する。扉を開けるとその場に広がる光景は異様。おそらく悠真の母親だろうと思う女性が家の壁に平手打ちをしている。

見なかったことにして階段を上ろうと顔を背ける。

「お帰りなさい、ユーマお兄ちゃん」

声がしたのは前。のはずなのだが、視界には人はいない。顔を下に向けてそこには柔らかな黒髪をした男の子。

「ああ、ただいま静真」

彼に声をかけたのはこの家の三男、鷹崎たかさき 静真しずま。小学四年生だが、頼りない両親のせいかすっかりした性格をしている。ちなみにあそこで壁に平手打ちをしている女性は悠真の母親、鷹崎たかさき 真澄ますみ。父親は医者の仕事でまだ家に帰っていないが、鷹崎たかさき 真也まやである。

「今日はハロウィンパーティーだね？また出掛けるんでしょう？」

「ああ、悪いな。お土産持って帰るから。兄貴はいるのか？」

静真は可愛らしい笑みで顔を横に振り、母親を指差した。

「トーマお兄ちゃんはね、今日友達と飲みに出掛けちゃったの」

「それとあれはどういう関係が？」

静真はこれ以上ないという程の極上の笑顔で明るく言った。トーマとはこの家の長男で、鷹崎^{たかさき}透真^{とうま}。大学二年生でこの家の中では長男だけあってしっかりとした性格をしている。

「ほら、トーマお兄ちゃんいつも飲みに行くとか酔っ払って帰ってくるでしょ？だからお母さんが『また酔っ払って帰ってくるのねえ！』ってお兄ちゃんを張り飛ばしちゃって。そしたらそのお兄ちゃんの飛びっぷりを見て、『私、お相撲さんの才能があるんじゃない？』ってありえない夢を見ちゃったんだよ！」

無邪気の笑みは何故が邪気をおびているように見えた。

自分の家族もバスケ部と同じでまともではない気がする。と、少し心配になった。息子が帰ったというのに未だに壁と格闘する母親に冷たい視線を投げて、悠真は階段を上る。鞆をベツトに投げつけて髪を掻き回す。ハロウィンパーティーは衣装以外の持ち物は特にはいらない。食べ物も遊びの道具も全て学校に揃っているからである。悠真は今日渡された紙袋を複雑な心情で見つめた。

「何故アリスなんだ？しかもご丁寧にカツラとエプロンつきだし。しかもこの服………作ったのか？」

募る疑問に答えてくれる者はいない。ただ、わかっていることはこれを着る運命を変えられないことだ。

「は、はは。くそお！」

諦めて彼は泣きながら紙袋を片手に玄関に向かう。母親は…気にしないことにした。靴音に顔を出した静真は出迎えに近寄って来る。弟っていいなあっとこのとき心から思う。

「もう行くの？帰ってきたばっかなのに」

「ああ。ご飯は学校で食べるしな」

優しく頭を撫でると静真は少し寂しそうに顔を伏せた。

「トーマお兄ちゃんはいないし、お母さんはアホなことやってるし、お父さんはお仕事だし、本当につまんないよこの家。はっ」

低めの声のためか静真が恐ろしい。悠真は適当に相槌を打ってそそくさと家から出ていった。

既に陽は沈みきり、外は真っ暗だった。明かりは家から漏れる光と街灯だけだった。さすがにこの時期になると夜は冷える。肌寒さを感じながら悠真はため息をついた。

「この格好して俺はバスケット部に会うのか？」

会ったときを考えて悪寒が走った。着ぐるみをロマンと考えるバスケット部。それはやはりおかしな連中が多いからである。女にも男にも妙な人気のある悠真はバスケット部にもかなりの人気がある。その悠真が女装をして彼らに会おうものならかなりの勇気が必要だ。

「やばいやばい！襲われるよ！おそらく多分女言葉を要求され、写真を撮られ、告白遊びが始まり、挙げ句の果てに服の奪い合いが始まるよっ！」

彼の中のバスケット部のイメージは一体。このような調子で様々な妄

想を広げながら彼は歩く。ふと、ある物が視界に入り足を止めた。日本の道路には似合わない大きな外国製の街灯が一本だけ立っていた。

「何だこれ？こんなさつきまで立ってなかったよなあ？」

見たこともない街灯に興味がそそれ近づく。日本製とは違い彫刻などの装飾があり、かなり作りが凝っている。

「すつげえ！かつこいい！」

目を輝かせて街灯に触れる。だが、その瞬間なんとも言えない寒けが背中に走る。鳥肌が立ち、すぐに街灯から手を離れた。

「なんだ？今の……」

『 だあ！』

低く聞き取れない声音が街灯から漏れた。思わず紙袋をその場に落とす。

『 魂 た…ましい！魂だあ！！！！』

「う、うわあああああ！！！！！！」

街灯から人のものではない、黒くごつごつとした手が伸びる。尻もちをついた彼は足が震えて動けない。伸びて尖った爪は指が動く度に合わさり高い音を出し、皮しかない手は徐々に悠真の顔に近づく。

序章（後書き）

序章、いかがでしたか？まだほんの切っ掛けしか書いてないのであまり理解できないと思いますが、気になって続きを見てくれることを祈っております。

三亜野 雪子

第一章 魔界

シンと静まりかえるその場所。冷たい感触が背中から伝わり、悠真は目を開けた。真っ暗で何も見えない。全身にじわじわとくる痛みを感じながら起き上がる。

「……………何処だここ？」

寝ぼけているのかあまり危機感がない。しばらくボーっとしていると、うつすらとその場所が見えてくる。どうやら洞窟の中のように。崖か何かの穴なのか、壁は岩のような物質でできている。天井には氷柱のような突起物が悠真に向かって伸びていた。

「俺、どうしたんだっけ？」

頭痛のせいかこの場所にきた経過が思い出せない。と、いつか全く覚えのない場所なのだ。

「もしかして……………誘拐！俺、誘拐されたの？いつの間に！？はっ、アリスの服がない！そうか、犯人はきつと女装趣味が！あ、いや、待てよ。男とは限らないか。なら、コスプレ趣味が！そうか、そして邪魔な俺をこんな洞窟の中につ！くっ、なんて卑劣な！」

どこからそんな想像が出てくるのか、勝手に一人で盛り上がっている。

ぐるっ

悠真は勝手な想像を止める。かすかに響いてきた獣の唸りのようなものを聞いたからだ。じわりと嫌な汗が滲み出た。

「狼………って、いないか。うさぎ、は唸るのか？犬！洞窟に？じやあ、熊！って、怖いし！」

見えない獣に焦る。目を凝らす、うつすらとしか道の先が見えない。聞こえるのは自分の吐息と心臓の音。感じるものは床から伝わる冷たい温度。五感が何もきかないこの状況が彼に恐怖を与える一番の要因だった。

どのくらい時間がたっただろうか。近づいて来てる………つと、直感で悟る。唾を飲み込んだ。長時間の緊張は悠真には酷だったように、頭痛を覚え始めている。

「だあ！もう嫌だあああ！いるなら出て来いよ！いや、できればどつか違う所に………。だあ！もう！とりあえずこの場を明るくしてくれえええ！！！」

壊れた。

その時だった、悠真の言葉に反応したかのようにその場を紫がかった青い炎が照らした。火の玉のようにそこら中に浮かぶ炎を気にする余裕はない。何故なら目の前には見たこともない生物がいるからだ。

骨と皮しかない赤黒いものだった。ひん曲がった手足はクモのように地につけて、その身体には似合わない大きな顔には骨が突きだしたような角があり、瞳を光らせている。

「な、何だこいつ？」

声が震えていた。残念ながらその怪物は悠真が状況を理解する時

間をくれはしなかった。

突然明るくなったことに驚いたのか、その異様な形状の生物は四本の足を奇妙に動かして悠真に突進して来た。最早、声も出せず悠真は走り出す。追ってくる怪物に気を取られていて、青い炎が彼が向かう場所に狙って出ていることに気付かない。

何だよ！あの怪物！しかもここは何処なんだよ！こんな所日本に存在するのかっ！？そうか！これは夢だ！そうに違いない！っと、思わず現実逃避してしまう程に怖いらしい。

「誰か助けてくれえええ！こんな所で死にたくない！大体何なんだよっ！暗いし怖いし気持ち悪いしっ！俺が一体何したんだよっ！怖くて後ろ振り向けないしいい！あわわわわわわ！」

走りながらここまで叫べると言うことはまだ一応余裕があるらしい。それともこれが彼の全力なのかはわからない。少し頭の血が下がったのか、落ち着きを取りもどしてきた悠真は速度を変えずに状況を把握する。

「さっきの怪物見て思い出した。俺がここにくる前、丁度あいつと似たような手に街灯に引きずり込まれたんだ！」

思い出してスッキリしたのか思わずガッツポーズ。しばらく無言で走り、冷や汗をかいた。これを思い出してもここが何処だかわからないことに気付いたからだ。追われている状態で色々と思考を巡らせるこの男はある意味すごい。

足音を感じさせない怪物は未だに悠真の背後をピタリとついていく。

『魂……………』

「えっ？」

くぐもった声音が悠真の背筋に寒けを走らせた。咄嗟に身を返すと怪物は静止して悠真を睨んでいた。

どくん

どくん

額から浮き出た汗が頬を伝い落ちる。走ったせいで息は上がり、肩は上下する。直視してしまったのが悪いのか、怪物と目があったから彼の落ち着いた心は一瞬で乱れた。がちがちと歯が震えて音を鳴らす。

俺……………死ぬのかな？

その時初めて死の恐怖を味わう。今、彼の頭の中にあるのは死という一文字だけ。

「……………！！」

悠真と怪物の間に割って入ってきたのは身を踊らせる青い炎。近くにあっても熱くないそれは悠真の周りをゆっくりと回り続けている。この時やっと炎の存在に気付いた。不思議そうにそちらに視線を動かして、ついていく。怪物の存在をすっかりと忘れて、ゆらゆらと変則的に、しかしまっすぐと動く青い炎を追っていく。

不思議なことに疲れは一向に感じなかった。何も考えずにただ本能的に走る。

「出口？」

くつきりと丸い形の白い光が漏れるそこが出口だと悟り、悠真は速度を早める。そして、白い世界へと飛びこんだ。そこは見るからに日本とはかけ離れた場所だった。どんよりと暗い空、不気味に生え立つ木々、それを更に不気味にさせるカラスの鳴き声。

その光景に思わず立ち止まった。力尽きた陸上の選手のように肩で息をしながら立ち尽くす。

「……は？」

「へえ、ここまで来たか。でも、外に出たのは吉と出るか凶と出るかはわからないけどな」

真上から声音が聞こえ、振り返る。悠真が出て来た大きな岩の洞窟の上に佇み、彼を見下ろすのは長身の男。腰まで伸びる綺麗な紫がかかった青い髪を三つ編みにし、着物と似た服をまとう不思議な雰囲気を出す男だった。悠真は美男とも呼べる男に思わず見とれてしまっ。

「まあ、ここに来た時点で凶かな？」

「貴方は……？」

風で髪が揺れた。その時、男の髪が悠真の視界に入る。

「あ、炎と同じ色？それに………人じゃ、ない？」

悠真が追って来た炎の色と全く同じ髪の色。そこから出ているの

は真っ黒な毛で覆われた耳。それは彼が人ではない証拠。受け入れ
難いことだが、先程見た怪物を思えば簡単に頷けた。

「あんだ、一体何なんだ？それからここは一体何処なんだ？お願い
だ！教えてくれ！」

少しでも彼に近づいたため洞窟の方に走ろうとしたが、その動きは
すぐに止まった。悠真の後ろをめげずにつけて来たのは先程の怪物。
未だに目を光らせて悠真を睨んでいたのだ。

『「飯………魂………人間………旨い……」』

「来るな」

近づく怪物と同じ歩調で後ろに下がる。その様子を見兼ねて青年
は声をかけた。

「それ以上後ろにも行かない方が身の為だぞ？」

「え？」

後ろを振り返ればそこには異なる人ではない存在がいた。数匹、
数十匹、そんな数ではない。数え切れない程の怪物がご飯とか魂と
かを呟きながら近づいて来る。その場から動けなくなった悠真は不
意に上を向く。だが、そこにはもう謎の男の姿は無かった。

「つ………！！！！」

この状況で何かできる程悠真は強くない。だからこそずっと走っ
て逃げていたのだ。どうしようもない所まで追いつめられ、ついに

彼は諦めた。

嫌だ…

「死ぬのは嫌だああああ！！！」

一瞬悠真の身体から蒼白い光が漏れる。それは悠真に触れそうな程近づいていた怪物を照らし、そして灰にした。その力を自分で見ることなく、気を失ってしまった。

光に照らされなかった怪物は倒れた悠真に近づく。

『魂……………』

「それ以上近づくな燃やすぞ？」

手をかけようとした怪物が青い炎に包まれ消える。いつの間にか悠真の脇に移動していた男は分身を操るように炎を扱い、その場を焼いた。

湿った風が鼻をくすぐる。目を開ければその場には雲に覆われた空。背中がくすぐったいと思ったら、そこには長さがばらばらな草が生えていた。

「俺……………どうしたんだっけ？」

貧血のように頭がフラフラする。上体を起こして、見渡せば硬直。

その場は草原から怪物の海に変わっていた。ぴくりともしないそれに囲まれて寝ていたのかと思うと鳥肌が立った。顔を青くして立ち上がる。めまいが起きて足元が覚束無い。

「何でこいつら丸焦げになって死んでるんだ？」

「それは俺が倒したからだ」

ぴくりと肩を震わせて振り返る。そこには洞窟の上に立っていた長身の美男。

「あんた……………どうして？こいつらの仲間じゃないのか？」

「はん、この世界に仲間という奴はいない。まあ、魔王はいるけどな」

「は？」

魔王という聞き慣れない単語に眉をひそめた。冷たい雰囲気を出すこの男に悠真は怯むことなく話しかけた。

「なあ、助けてくれたのかどうかはわからないけど、ついでに教えてくんない？ここは何処？こいつらは何？魔王って何さ？どうして俺はここに来たのさ？」

遠慮を知らない質問に男は面倒臭そうに顔をしかめた。間近で見ると、耳以外はやはり人そっくりの容姿をしている。だが、人ではないんだよなあっと残念に思う悠真。

「仕方ない。理解できるか知らないが、話してやる」

ここは人ではない生物が後悔して死んだ者が集まる魔界。

猫や犬はもちろん、ある時は心を持ってしまった机や鏡などといった物までもが違う姿になってこの魔界にやって来る。

つまり人で言うならば地獄のような場所だ。

人以外しか来ないこの魔界に何故人である悠真が来てしまったのか。それは彼が魔界と特別波長が合った者だったからだ。

魔界と波長が合ってしまった悠真はたまたま魔界の入口である街灯を見つけて入ってしまった。

ここにいる者は主に妖怪と称せられている。

その者のほとんどが人の魂を好む。

以前にも一回だけ人が魔界に来たことがあった。

その者は悠真と違いかなりこの世界に興味津々だったが、人の魂に魅了された妖怪が互いに殺し合い、壊滅直前まで至った。

「ちょっと待って！え？つまり、俺は偶然にも魔界に好まれ」

「波長が合ったんだ」

「妖怪のおやつとしてここに引きずり込まれて、追われていて、そしてこのまま俺がここにいると俺のために皆殺し合いを？」

「自分が魂を食べたいがために殺し合うんだ！二十年前のあの出来事では魔界の半分の妖怪が死んだ」

死んだ者がここにいるのにここでいなくなることを素直に死んだ

と言っていていいものなのか。とよくわからないことで悩む。

「ん？待てよ。二十年前って貴方一体何歳なの！？」

「忘れた。五十までは覚えてたが面倒になって数えていない」

「五十うううう！！じ、爺さんだったのか」

その反応が気に入らなかったのか、男は悠真の顎を思わず掴んだ。

「待った待った待った！紫ちゃん！」

更に強く握る。紫とはこの男の名前だ。黒ヒヨウの化身らしい。何故他の妖怪と違い人と似た姿でいるのかと言うと、それだけ他の妖怪と比べて能力が高いらしい。

「ちゃん付けなんてするな！」

「何でえ！いいじゃないかあ！だってだって、見た目そんなにかっこいいのに名前までかっこいいなんてずるいし！」

人の姿に似ていると言ってもやはり妖怪。なのだが、悠真は恐怖など微塵もなかった。それは紫からは殺気が感じられないからだ。

「お前……………そんなのきなこと言っていていいのか？こうしているうちにまた妖怪が集まって来るぞ？」

「はっ！それはいけない！って、今思ったら紫ちゃんはどうして俺を襲わないの？」

「人の魂を全員が好むわけじゃない」

甘いものが嫌いなのかあ。っと完全に自分の魂は甘いおやつだと思っっているらしい。

「でもさあ、俺どうすればいいわけ？帰り方なんて知らないぜ？」

「……………仕方ないな。魔王に聞いてみるか」

魔王、それはこの世界の妖怪を一応取り締まる存在。

紫が向いた方に視線を動かせばそこには怪しい森に囲まれた大きな城。この世界にあるのはかなり異様だった。

「あそこに……………魔王が？」

第一章 魔界（後書き）

第一章です。えっと、一応魔界の説明を含めた話です。紫ちゃん出ました。この人は一応重要キャラでもあります。そして唯一の突っ込みキャラでもあります。

二章では惚けキャラ二人増える予定です。どうか、続きもよろしくお願いします。できれば感想もくれると嬉しいです。

三亜野 雪子

第二章 魔王登場

歩けば歩く程不気味な森。悠真は自然と表情を固くした。

「異臭がする」

悠真と紫が歩いている場所は城の周辺に広がる異様な雰囲気をもしだす森。中に入ってみるとその雰囲気は更に濃くなっている。異臭、霧、不気味なカラスの鳴き声と断末魔。悠真は顔をしかめる。聞こえてくるのはカラスの鳴き声と断末魔。今度は青ざめる。しつこいようだがもう一度、聞こえてくるのはカラスの鳴き声と断末魔。ついに彼の顔は青を通りこして紫色となった。

「紫ちゃんなんか聞こえるよ！変な声が！変な叫びが！変な奇声が
ああああああ！！！！！」

「だあ！服を引っ張るな！ただ妖怪が共食いしてるだけだ！騒ぐことじゃないだろう！！！」

服を放してすたすと先に歩く紫の言葉に納得という表情で安堵した。だが、その表情のまままた次第に青みを増していく。

「共食いっ！？何それ！何あれ！何これ！つて骨ええええええ！！！」

「うるさい！！静かに歩けないのかお前は！！！」

悠真が見たものは木の葉に埋まりかけていた人ではない者の骨。太かったり細かったりするバランスの悪い骨はそこら中に姿を見え隠れさせていた。半泣き状態で紫に顔を横に振って見せた。

「無理無理無理！こんな所黙って歩いていたら俺精神もたずに壊れて暴走してどっか走って妖怪に食われて死んじゃうよ」

「やけに具体的なのが気になるが……、ここはこういった所なんだ。力の弱い妖怪が入り込むと理性を保てず暴走し、共食いを始めて互いに死ぬ魔の森」

妖怪に理性があるのかと少し疑問に思い、突っ込もうとした瞬間だった。どくん、と心臓が気持ち悪く動いた。その話を聞いて怖かったからではない。身体に直接かかる違和感に反応したからだ。悠真は辺りを見回すがそこには何も無い。ぶわっと額からは汗がにじみ、身体は震えていた。

「紫ちゃん、ここつてもしかして俺にも何か害あったりする？」

「え？ああ、その線は考えてなかったな」

今度は別の意味で汗がふき出た。硬直しているその様子に嘆息を漏らして紫は容赦なく述べた。

「こんな所で止まっただけでもしょうがないだろ！行く
！！？」

がさがさと草を踏みつける音が聞こえ、紫の顔に緊張が走った。悠真も咄嗟にそちらに身体を向けた。

見ればそこには妖怪。妖怪。妖怪……。色とりどりの妖怪達は調理すればもしかしたら思った以上に美味しいかも。つと悠真は違う世界に意識を飛ばした。だが、すぐにその意識を戻さなければならなかった。

「おい！逃げるぞ！」

「うへえい！！」

襟を紫に掴まれて引きずられ、首が締まらないように踏ん張るとに必死になった。悠真を抱えながら尋常ではないスピードで走る紫について来れる者はあの中ではないらしい。徐々に妖怪達の姿が小さくなっていくのを見ながら悠真は感嘆の声を上げた。

「すっげー！流石黒ヒヨウの化身！足はやーい！」

危機的状況がわかっていないのかかなりお気楽だ。紫は一瞬殺意が芽生えたが、理性を保つ。

ぞわ

摩擦を利用して急停止した。思いがけない行動に悠真は後ろを向く。そこには信じられない、いや信じたくない光景が広がっている。今逃れてきた者達と同じ、人ではない者の群れがこちらを狙って向かって来ていたのだ。

思わず手近にある長い紐みたいのを掴み、ぐいぐいと引っ張った。

「髪を引っ張るなっ！」

「何言っただよ！こんな時は何か持っていないと落ち着かないんだよっ！紫ちゃんならハゲても根性で生えてくるっ！」

「生えるかつ！」

そんなことやっている間に四方から妖怪が迫ってくる。小さく舌打をして紫は戦闘の構えに入った。彼の周りの空気が変わったことに勘づいて悠真は離れた。

「いい撰択だ。もう少し後ろさがってるよ」

一体何をするのはわからない。が、直感で今からやることは恐ろしくヤバいものだろうと思った。その内、紫の身体を取り巻くように周りの空気が青くなっていた。

その空気に鳥肌がたった。身体の中の何かが共鳴するかのようにつれつく。

「はああああああ！！！！！！」

紫が身体を反ると同時にその青い光が分散する。その光は後ろの妖怪までに降り掛かった。殺那、その妖怪から紫がかつた青い炎が上がる。喉が張り裂けるような叫びを上げて妖怪は灰と化した。驚愕で悠真は声も出ない。

肩で息をする紫は未だ何処からか湧き出て来る妖怪に視線を向けて表情を歪ませた。流れた汗を咄嗟に拭ってまた身体に力を溜める。

「紫ちゃん？またあれやるの？」

だけど、あれ辛いんじゃない。自分が何も出来ないことを十分理解している悠真は何も言えない。だが、明らかに無理している紫をそのまま放っておくことも出来ない。近づいて来る妖怪、力を溜める紫。交互に首を動かしていくうちに疲れてきたのか、顔を地面に向ける。

「やるなっ！」

「は？いきなり何言ってるんだ！？何も出来ない奴は下がって黙ってる！」

「いいから力抜けて言ってるんだよっ！！」

打って変わった悠真の様子に動きを止めた。それを確認して怯まない妖怪に顔を向けた。

「これ以上近づくな！うざいんだよてめえ等！！！」

天井まで伸びる大きな窓から外を眺める。大きな部屋とは不釣合に四人掛けの小さなテーブルしか置かれていない殺風景な所だった。壁にはいくつかの価値がわからない不思議な絵画が掛けられ、テーブルには二つ分のティーカップが置かれている。

窓側に立つ者は白い髪を腰まで伸ばし、白い服をまとった男。彼は口元に笑みを浮かべて楽しそうにはずむ口調で言った。

「おやおや、二十年ぶりのお客さんが来たみたいだね。すごい力を出してるよ」

「あらあ、今度のお客さんはなかなか活きのよい人ですわねえそして、とても美味しそう……」

彼の脇から現われたのは少し小柄の女性。淡い緑色のショートヘ

アがとても似合う清楚な雰囲気を出している。にっこりと可愛らしい顔とは裏腹に声音は低くて、据わっていた。

「こらこら、食べちゃ駄目だよ。せっかく紫君が頑張って守ってるんだから」

「わかっていますよお。それに私は人の魂より抜殻茶の方が好きですしい〜」

先ほどとは違い、高く可愛らしい声音で彼女は言った。二人はそのまま赤く光る森へと視線を投げる。森の中心に建つ城の中からその光を眺めた。

気が付けばそこには二人だけしか生きている者はいなかった。呆然と立ち尽くす紫。ぼやける視界でそれを見やり、辺りを見回した。先が見えないほどいた妖怪がもう何処にもいない。あるのは足元に積もる灰だけ。

何が起きたんだ？妙に疲労を感じる。そのためか状況が理解できない。

「どっしたんだ？」

「……………覚えてないのか？」

戸惑いながら問われて、眉をひそめる。覚えている、ということはやはり何か起きたということ。だが、思い出せない。

「俺が、何かしたのか？」

「力を使っただよ。しかも、自分の意志でな」

「は？」

何を言っているのわからなかった。次第にすつきりしてくる頭を振って歩き出す。やはりこの森は悠真にとっても害になるらしい。気持ち悪さが先ほどよりも増している。ふらつく足どりで紫のところまで行くと、手を貸してくれた。

「力って……………何のこと？」

「ここじゃ説明しにくい。とりあえず城まで行くぞ」

無理やり悠真の身体を持ち上げて紫は走る。

俺、何抱かれてるの？ってか、さっきから俺のポジションヒロイン的になってない？うわっ！何か嫌だあああ！だけど、紫ちゃん強過ぎて俺が守るなんて芸当できるわけじゃないし！そうだ！この妖怪が悪い！何でも俺達を襲うんだよ！って、それも俺のせいじゃないか！！っと、妙な思考を繰り返している。

森に入るまでは親指ほどの大きさしかなかった城はいつの間にか山のように大きくなっていった。そして、やっと入口らしき所に辿り着く。

木の高さほどある大きな門は取っ手がなく、引くことができない。開けようとしなない紫を不審に思いつつも、悠真は門を見た感想を呑気に述べた。

「でっけえええ！何か幽霊屋敷みたいだな！ほら、木像の扉あたりがぴったり！これで勝手に開いたりしたら」

きぎぎきぎぎぎ

錆びついた金具が擦れるような音が響いて、触れてもいない門が開く。タイミングのよい開門に悠真の顔は引きつった。その顔はあまりにも情なかったのか、紫ですら失笑を漏らす。

「こんにちわ。お待ちしておりましたわ」

そこから現われたのは小柄な女性。やはり人とはあまり形態が変わらないが、耳が異様にとんがっている。清楚な雰囲気を出す彼女に悠真は笑って近づこうとした。が、紫が腕を押さえてそうさせない。

「何だよ、紫ちゃん」

「不用意に近づくな。言ったたる、人に姿に近い奴はそれだけ力の強い奴だって」

「え？だからって最初から疑ってちゃ何も力を借りることができないよ。俺は疑うなんて簡単なことじゃなくて、信じるっていう難しいことをやり通すって自分に誓ってるんだよ」

あそこまで妖怪に怖い思いをさせられた者の言葉とは思えないものだった。驚きを見せている紫を気にせず悠真はニコニコと笑顔を向けている彼女を見る。着物のようでそうじゃないそんな服を着ていた。鮮やかな朱色の服は袖口にいくほど大きくなっていった。

「初めまして。私、鶴と申しますわ よろしく願います」

「俺、悠真です。こちらこそ願います」

鵜めえと名乗った彼女は二人を城の中へと促した。城内は明かりが少く、足元があまり見えない。足音だけが響くのが更に不気味に感じさせる。

「あ、気を付けて下さいね。気を抜いていると足だけになってしまいますから」

「は？」

「暴走した妖怪が城内に入って来た時用に罾を張ってあるんです」

「えっ？取っというて下さいよ！」

「いやあ、全て取るうとしたんですが、かなり多く張ってあったものですから」

「ふん、どうせお前等には縁のない罾だから」

途中で途切れた言葉を疑問に思い、振り返る。だが、そこにはいたはずの紫の姿がない。

「あれ？紫ちゃん！！消えちゃったあああ！！」

「……………こ、ここだ」

絞りだしたような声が聞こえ、下を見た。そこには何処まで続いているかわからないほど深い落し穴にはまった紫の姿があった。慌てて彼に手を貸した。

「あららあ、情ないですねえ。紫さんという者が落し穴なんかにはまってる」

「うるさい！大体、こんな見え見えの場所の罠、何で取っておかないんだよ！わざとだろ！絶対！」

「人聞きの悪いですわねえ。こんな姿の紫さんが見たかったわけじゃなくて、悠真さんの運を試したかっただけですわ」

鵜はこの城の罠を把握しているためかからないが、この城に初めて来た悠真は罠に簡単にかかるはず。だが、偶然か必然か彼は簡単に罠を避けて不運にも紫がはまってしまった。

「俺の運？何か関係あるの？」

話についていけない悠真は聞くしかないが、二人はなかなか答えてくれない。結局二人には上手くかわされて奥の突き当たりの部屋に着いてしまった。今まで通って来たところにあつた部屋と比べて一回り大きな扉をしていた。扉の両脇にはランプが付付けられていて、扉を明るく照らしていた。鵜は軽くノックをして扉を開ける。

扉に相応しいほど大きな部屋に一人だけ優雅に立つのは白髪の男性。背中に大きな翼を生やしたこの魔界の最高位につく……………。

魔王だった

第二章 魔王登場（後書き）

はい、少しずつキャラも増えてきました。一応第一シリーズ目のキヤラはこの話で出てきた四人だけです。次の話でほとんどの謎が解けると思っています。ってか、謎って言えるのかもわかりませんが。この話の元は一応中学に書いたもので、流れはそれに合わせてあります。なので、第一シリーズは次の次で終わると思います。最後までお付き合いして下さいますと嬉しいと思います。

三亜野雪子

第三章 契約

白い髪が腰まで伸びる紫と同じように美男とも呼べる男。呆然と悠真が見つめるのはその男の背中に生える白い翼。綺麗だと口に出してしまいそうなほどの美しさに言葉を失っていると紫が先に歩き出す。

「おい！お前何こんな所でのんびりとっ

」

だが、また紫の言葉は途中で切れる。壁の穴から飛び出してきた生卵を咄嗟に避けたからだ。その姿に鵜はあっと声を上げて笑った。

「ごめんなさい、紫さん。入る時は要注意 っていうのを言い忘れてましたわ」

見るからにわざとだと思ふような作り物の笑みに紫は額の血管を浮き上がらせる。奇跡的に手に取った卵を鵜に向かって投げるが、それは難なくわかされてしまう。紫、鵜、そして魔王らしき白い翼を持つ男を見て、悠真は小首を傾げる。

「この人が魔王さん？」

「あ？ああ、この魔界を取り締まってるのかわからんが、一応頂点に立つ魔王、伯鳳だ」

白き翼は白ガラスの化身である証。人に近い姿は力が強い証拠。

伯鳳はくおうという男はその翼を器用に背中にたたみ、礼儀正しく悠真に頭を下げた。紫より見た目は大人に見える彼は顔には似合わない陽気な声音で自己紹介をした。

「初めまして悠真君。私は伯凰。この魔界の魔王さ。年は二十八歳でよろしくお願いするよ」

「またまたあ、伯凰様はもう百三十八歳でしょお？嘘はいけませんよお」

慣れない三桁の年に悠真は苦い顔をする。だらだらと汗を流して不機嫌そうな紫に顔を向ける。

「この人達つて一体どれくらい長生きなのっ！？なななな、何でこんなに若そうなのにつ」

「人と一緒にするな！大体既に一回死んでるんだ！長生きをクソもねえ！それに若いとか言うけど俺達にとってはこれが本当の姿じゃないんだ。仮にすぎない」

あ、そっか。とすぐに納得。四人は奥にあるテーブルに腰をかけた。出された紅茶をすすりながら悠真は三人を見回す。紫は黒ヒヨウ、伯凰は白ガラス、では鵜は何なのかが気になるらしい。じっと彼女に視線を送る。

しばらく無言だったその間を悠真は躊躇なく壊した。

「ねえ、伯凰さんが魔王なのにどうして鵜さんの方が強く見えるのかな？」

「はっ？」

唐突に、そして意味がよく理解できない台詞に紫は間の抜けた声しか出せなかった。そういったことに動じない二人は互いに顔を見

合わせる。悠真は自分の中でもわかり難いことを説明しようと手を上下、左右に振った。

「えっと、俺にはここの妖怪達の姿が回りに何だろう、こつ……空気が湯気？あ、オーラか！そういったのが見えるんだよ！で、そこから辺の雑魚の妖怪よりも紫ちゃんの方が濃度が濃いと言っか、はっきり見えるんだよ。もちろん伯鳳さんも同じくらい強く見えるんだけど、鶴さんのはまとっているって言うよりもただ漏れ？妖怪によって色がそれぞれ違うのに鶴さんだけ色んな色が見えるし」

三人顔色を変えた。未だに説明について唸る悠真を凝視して、伯鳳は品定めをするような目つきで微笑んだ。

「どう見る？お鶴？」

「幼稚並の説明でしたけどお」

「幼稚っ!？」

「言っていることはなかなか鋭いですねえ。自分の力をまだ使いこなしていないわりに難しいことを自然とやってみせています。かなりの逸材ですよ」

「はっ？何が？力？」

話についていけないのは当の本人。紫は大袈裟に溜め息をついたらゆっくりと悠真がわかるように説明を始めた。

魔界と波長が合う者は滅多に存在しない。波長とは人でたとえると

ここでは力を示すほど重要なものなのだ。悠真が見たオーラとはその波長が体内で魔界の波長と干渉し合い、体外に出たものだ。魔界ではその力を魔力と名付けた。魔界の波長と同じ波形の波長を持つ者ほど魔力は大きい。

「ちょ、ちょっと待って。ってことはその魔力っての俺にもあるってこと？」

「ああ。さつき妖怪全部灰にしたのはお前だ。力が大き過ぎて記憶がとんでるみたいだけだな」

ぱちくりと瞬きを繰り返し、信じられないという表情を紫に向けた。魔界と波長と共鳴し合いこの魔界にやってきた悠真は少からずそこら辺の妖怪よりも強い魔力を持っていることになる。そして更に難しいと言われているオーラを読み取ることを無意識のうちに簡単にやって見せたのだ。これは三人が驚くわけだ。

「じゃあ、鵜さんが強そうに見えるのは」

「あながち嘘じゃないってことさ」

ことさって貴方、魔王のプライド丸潰れだけどいいのか！？

伯鳳にプライドという文字はない。悠真はそれに気付かず、顔をしかめた。鵜はにこにここと可愛らしい笑みをずっと悠真に向けている。

「でも、何でそんなにいろんな色が見えるんだろう？」

「それはですねえ。力の性質を見ているからですよ」

「力の……………性質？」

またまたよくわからないことを言われて、内心面倒になってきた悠真。伯鳳は妙にかっこつけて声を張り上げる。

「鵺という名前は私がつけたのさ。どういう意味だか知っているかい？」

「えっ？意味なんかあったの？」

「確か国語辞典によりますとお」

国語辞典！？この世界に何故そこにある？ここは魔界。日本もなければ出版社もないはず。それをどうやってこの人達は手に入れたんだ！？

悠真の疑問は他のことで募っていく。ぺらぺらともものすごく早いスピードでめくるのを何とも言えない心情で見つめて、悠真は次の言葉を待った。

「鵺とは伝説上の怪物ですね」

「頭は猿、手足は虎、身体は狸、尾は蛇、声は虎鵺ウツクミと書かれているぞ！」

「何かすごい怪物ですねえ。」

「そうですねえ、とっても可愛らしい怪物ですわあ うっとりし

ちやいますう」

鵜の言葉が理解できなくて思わず表情を歪ませた。可愛い？と言うにしてみはあまり想像力が働かない。そう、この悠真ですら想像できないややこしい形をした妖怪を鵜は可愛いと言っただ。

「で？その怪物とこいつが言った質問とどう関係があるんだ？」

伯鳳は人さし指を立てて左右に振った。ちゅちゅちゅ、と響きのいい音を立てて、にゅと形よい笑みを浮かべた。

「なかなか頭の働きが遅いねえ。つまりだね、この怪物はいろんな所がいろんな動物の形をしていて、鵜はいろんな能力を持っているということ」

だから何なんだ？

未だに伯鳳が言いたいことが理解できない紫は顔をしかめる（常だが）。悠真は微妙に意味が似ているんだなと少しだけ納得しながらも、やはり完全には理解できない。

「でも、それほど関係していない気が……………」

「それは当たり前ですわ 伯鳳様が偶然そのページを見ていて、偶然目に入り、偶然気に入って、偶然本当に微妙に意味が似ていただけですものお」

偶然ばっか！！

話を聞いた意味があったのか、一気に脱力する。

「私の力についてはいつかわかる日がきますわ。今心配することは御自分の身の危険ではないですか？」

首を捻る悠真に紫は思わずどつきを入れた。頭をさすりながら紫に視線を送ると睨まれて身を小さくした。

「えっと、妖怪についてですか？」

「妖怪というよりもお前が元の世界に戻る方法だろ？」

「あ、そっか」

あまりにも危機感のない状態にしばらく置かれたものだから、悠真は本来の目的を忘れていた。悠真がこの魔王に会いにきた理由は元の世界に戻るための方法を聞くため。

この城にきてから帰る方法よりも他のことが気になって仕方なかった悠真は、もう数日間この世界に止まる気満々だった。魔界のこと、魔力のこと、妖怪のこと、紫のこと、魔王のこと、自分の世界とは異なる未知なるこの場所に疑問は尽きない。

「もうちょっとここにすることはできないの？」

「いたら死ぬぞ？」

「すみません、もう言いません」

素直に頭を下げる悠真に伯鳳と鶴は楽しそうに見つめた。ほのぼのした空気を出しているのははっきり言ってこの三人。紫は頭が痛くてしょうがない。

「笑ってないで教える！こいつを元に戻す方法はないのか？」

「一生この世界と関わる勇氣があるならいいことはないよ？」

試すような物言い。紫はこのような言い方をする伯鳳はいつも本気な時だと知っていた。表情を変えて、紫はその話に食いついた。

「どっついうことだ？」

「今の私たちにある力では完全に悠真君をこの魔界から関係無くす芸当はできない。できるとしたら一時的に帰すことだけさ」

「つまり、俺は一回元の世界に帰れるけど、またこの世界にくる時があるってこと？」

伯鳳が言うには悠真を元の世界に戻すためには魔王との契約が必要らしい。契約を結ぶことで悠真は元の世界には戻れるが、今日みたくハロウィンといった魔力が放出される特別な日にまた魔界に戻る可能性があるということだ。

「ふざけるな！それじゃあ、意味がない！」

「だが、その契約を結ばない限り悠真君は元の世界に戻れないよ？」

「それに、この契約をするかどうかは悠真さんが決めることじゃないんですか？」

三人は同時に紅茶をすする悠真に視線を集めた。美青年、美少女の三人に見つめられると嫌でも緊張してしまう。カップを持ったま

ま戸惑っているとお茶が振動でこぼれる。

「あらあ、駄目ですよ。私の特製抜殻茶を無駄にしちゃあ」

「あ、すみません。って、抜殻茶？ってなんですか？」

「私が開発した妖怪の抜殻で作るお茶のことですわ」

妖怪でも脱皮するのかな？

陽気なことを考える悠真に追い討ちを鷲がかける。

「生きている妖怪の血を抜き取って数日間も様々な方法でその皮を血染めさせた抜殻を使用してますのよ」

ぶっ

飲んでいた紅茶を思わず嘔き出して、咳こんだ。

「ぬ、抜殻ってそういう意味なの？ってか、それで何でこんな味するの！？」

悠真が普通に飲んでいたということは元の世界にある紅茶とさほど変わらない味がするからで、決して鉄の味がするわけではない。色も少し赤みのある普通の紅茶と同じ。それなのに、使われているのは葉ではなく、妖怪の血を染みこませた妖怪の皮。想像するだけでも恐ろしい。

また話はずれたことに紫は咳払いをする。

「で、お前はとうするんだ？」

「え？あ、そうだった。でも、それしか方法ないんだろ？なら、俺はそれでいいよ。もっとこの世界のこと知りたいし、紫ちゃん達に会うのもいいしね」

この世界で危険な目にあつた者の言葉ではない。

「あ、でも俺がここに来ると妖怪が全滅の危機に陥るんだっけ？いいの？」

「心配無用さ。次に悠真君が来る時には君の魂の存在を気付かせないように私達で手を打っておくよ」

「でも伯鳳様あ、いくら何でも全ての妖怪達に気付かせないようにするのは無理がありますよあ？」

鵜は計算機を片手に手の動きがわからないほどの速度でボタンを押している。その動きに目を回す悠真。

「そつだね。いくら魔王である私でも全ての妖怪を翻弄はできないね。だけど、今のこの状況よりはかなりマシにはなるだろう？」

最後のボタンを押して、かつこよく決めた鵜は数字を確認した次の瞬間景気よく計算機が音を立てて爆発した。あららあと可愛らしく小首を傾げる鵜だが、もう怖いとしか言いようがない。

「とりあえず、今のこの状況よりも七割は無事な状態になりますわ」

「また計算機を壊したのかい？お鵜は困ったさんだねえ」

「嫌ですわあ〜そんなにお褒めにならないで下さいなあ」

二人の会話についていける者はいない。紫についてはついていこうとも思っていない。

はあっと力ない返事をする悠真に二人は視線を移す。冷たくなつた紅茶の正体を聞いたためかもうお茶に口をつけようとはせず、ただ二人の会話を聞いている悠真。

「にしても、本当にいい性格をしているね？」

「はい。なかなか面白い方ですわ。私の想像では腕が十二本あって、目が一個！身体がぶよぶよの足が三本っていうとても格好のいい人を想像してたんですけどお、少し残念ですう」

「それはなかなかランクが高いねえ」

腕が十三本…、目が一個…、身体がぶよぶよ…、足が三本…。全く想像できない。

いつも鴉は難題な姿を悠真にしている。頭をフル回転させるが、どうしてもスライムみたいのが完成してしまう。だが、これは格好いいと言えるもののだろうか。

「おい！いい加減にしろよ！こうしてる間にも雑魚妖怪はこの城に入ってるんだらう？やるならさっさと契約しろ！」

「でも紫君、わかってるのかい？後三割は危険のままなんだよ」

「そんなの俺達を守ればいい。お前等だって妖怪が絶滅するのは避けたいだろ？なら、協力しろ」

偉そうに言った紫に伯鳳は軽い笑い声を上げて肩をすくめた。悠真は申し訳なさそうに伯鳳と鶴に頭を下げた。

「迷惑かけてすみません。だけど、俺にもどうしようもできないから、もし魔界に来た時はよろしくお願いします」

初めてのクラスに挨拶するようなそんな軽い声で言った。すっかりこの世界に馴染んでいる悠真はある意味で強者と言えるだろう。

「ふむ、可愛い悠真君のお願いならば仕方ない。こちらまでできる限りの力をお貸ししよう！それでは早速契約を」

「あ、待って下さい伯鳳様！悠真さんに抜殻茶の原料をお土産に見せておきたいのです！」

ルンルンと部屋から姿を消した鶴が言い捨てた言葉に悠真は顔を青くした。伯鳳の着物を引っ張って必死にお願いした。

「早く！早くその契約とこののをやって下さい！じゃないと、今にもあの人が得体の知れないものをおおおお！！」

揺れながらも伯鳳は歯切れのよい笑いを立てる。明らかにこの状況を楽しんでいる。あまり関わりたくない紫は言葉すらかけない。

「はっはっは、見とくのもいいかもよ？」

「嫌です！」

きっぱりと拒否すると仕方なく伯鳳は契約の手順を説明し始める。

契約は簡単だ。伯鳳が自分の魔力を使って悠真の身体に契約の印をつけるだけだ。それだけでも他の妖怪が近寄る確率が減り、悠真の身の危険が減る。

「どこがいい？私は目立つところがいいなあ。おでことかはどうだい？」

「わあ！待って待って！そんな所俺が困ります！えっと、せめて首筋は？」

「ううむ、少し地味だけど仕方ないね。じゃあ行くよ」

悠真の首に手をかざして、伯鳳は小さく聞き取れない言葉を呟き始めた。殺那、鋭い痛みを感じて表情を歪ませる。その痛いのは頭はまだ響いて、彼の意識はそこで途切れてしまった。

それと同時に悠真の存在は魔界から無くなった。先ほどまで悠真がいた場所を見つめて、紫は大きく息を吐いた。

「あれれえ、もう帰っちゃいましたか。残念ですう」

元が妖怪とは思えない薄い姿になった変な殻を引きずってきた鶴を一瞥して、紫は頭を抱えた。

あんな物見たらあいつは失神するだろうな。

臆病だが、妙な好奇心がある魔界と波長を合わせる人間。とても強力な魔力を持つとは思えない。だが、紫は目の前でその力を見た。臆病だが、人を助けようとするその良心が魔力と共鳴したのだろう。

「お人好しが。あいつと一緒にだな」

苦しそつに表情をしかめる彼は一体誰を思い浮かべているのか。
それは誰にもわからない。
本当は殺そつと思つたんだがな……。
彼が抱える想いを悠真が知るのはいつのことなのか。

魔界と波長が一番合う人間。それは魔界の妖怪にとって美味しい存在であり、恐ろしい存在。

魔界の者達はその人間のことをこつ呼んだ。

N i g h t - m a r e

ナイトメアと

第三章 契約（後書き）

第一シリーズは次の話で終わります。皆様が読んでくれたお陰でアクセス数が2000人近くになりました！私が投稿した作品の中で一位です！ありがとうございます。

次の終章を讀んでこの話を気に入ってくれたらどうか感想を送って下さると嬉しいですよ。

三亜野雪子

終章

背中から冷たく固い感触がした。目を開けてもあまり変わらないほどその場は漆黒に包まれた空間。悠真は身を起こすと、頭を打つたのか痛みが走ることに気付いた。しばらく馬鹿みたいにその場に座っていた。

暗闇に慣れた瞳に映るものは見慣れた道。ここは悠真が妖怪に引きずり込まれた場所だった。冷たい感触を与えていたのはコンクリート。地球にしかないコンクリート。

「戻ってきた!?!」

何かを考える前に悠真は学校に向かって走っていた。明るくなったり、暗くなったりする道は無我夢中で走る。洞窟、森と妖怪に追われながらも通った道のせいで制服はスタボロ。それは今まで悠真が魔界に行っていた証拠で。

学校に走り込み、自分の教室に向かって何人もの仮装した生徒とすれ違った。そして、やっと自分の教室の扉を開けた。

「先輩!どうしたんですか?」

「へっ?は、原松?」

二年の教室にいたのは頭だけ片手に持った着ぐるみを着た芳季だった。それどころかその教室には悠真が知るクラスメイトが芳季以外誰もいなかった。

「先輩こそ何してたんですか?この一年間行方不明だったじゃないですか?」

「い、一年？一年俺はこの世界にいなかったのか？」

「は？大丈夫ですか？頭」

顔を真っ青にする悠真は芳季の何気に失礼な言葉を聞き流して、また全速で階段を下りる。本来なら悠真の上級生がいるはずの教室の扉を開ければそこには見知った友人。

「悠真！お前、戻ってきたのか？」

「うっそ！鷹崎君！久しぶりい！」

信じられない光景を目の当たりにして悠真の思考は停止する。

魔界に行つて、たった半日しかたつていないはずなのだが、この世界では既に一年後のハロウィン。訳がわからないまま悠真はまた走り出す。今度は学校から出て、家に向かう。

靴とコンクリートがあたり、軽い音を響かせている。考えてみれば悠真が倒れていた所に落としたはずのアリスの衣装が無くなっていた。そんなことに何故気付かなかつたと嘆き、彼はできる限り速く走る。あつという間に家に辿り着き、息を切らしながらも扉を開ける。

廊下には張り手を繰り返していた母親の姿はもうなく、リビングに行くともまだ仕事から帰っていないはずの父親が真澄と一緒にテレビを見ていた。

「父さん、母さん？」

不意に振り返ると二人は悠真の姿に硬直した。死んだ者を見るような引きつった表情で悠真を見て、二人は立ち上がる。

「悠ちゃん！嘘！北朝鮮に拉致られたんじゃないの!？」

ずるっ

真澄の思いがけない言葉に思わず体勢を崩した。まだダメージが抜けきれないうちに今度は真也が彼に一発かます。

「真澄、帰ってきたんだからいいんじゃないか。で？お土産はないのか？」

どっし

今度は頭を床に打ち付けた。じんじんと痛みがでこに響く。すると階段を下りる音が悠真の耳に入った。顔を上げるとすぐに二つの影がリビングに入ってきた。

「母さん、さつきからつるさ………」

「ユーマ兄ちゃん！北朝鮮にいたんじゃないよ……、大丈夫？顔が死んでるよ?。」

誰に会ってもそんなことを言われれば流石の悠真も相当堪える。想定外の出来事が起こり過ぎて悠真は頭痛を起こした。その場に脱力してへたり込むと静真がつんつんと身体をつついた。その度にくすぐったいのか身体をびくびく動かす悠真。

「やめろ、静真。この一年間のことはちゃんと悠真に聞かないとわからないだろ？おい！大丈夫か？」

透真は悠真の腕を掴んで身体を支えてあげる。彼は瞳に涙を溜めて複雑な気持ちで思いきり叫んだ。

「どっつなってるんだあああああああ！……！」

何故、このようなことが起きたのか。それを知るのは次に悠真が魔界に行った時。

とりあえず、お疲れ様です。

終章（後書き）

第一シリーズ終了です。いかがだったでしょうか？ここまでが私と友達で作った卒業小説です。私が文章で友達が挿し絵だったんですが、友達は結局表紙と一ページしか挿し絵を描きませんでした。この先の話は勝手に私一人で進めていったんですが、あまり設定を考えていなかったなので、途中で断念しました。それをこの機会に考え直して完成させたいです！
感想評価を頂けると非常に嬉しいです！よろしくお願いします！

三亜野雪子

序章

短い黒髪を掻き上げて、彼は学校の道のりをジャージ姿で歩いていく。お昼過ぎで陽はかなり高く上がっているも、気温はそれほど高くはない。それは季節が冬だからだ。黒い瞳を空に投げかけて、悠真は目を細める。

あれから一ヶ月。彼の頭の中には三人の人ではないが、人に限りなく近い姿をする者達が浮かび上がる。たった一日しか一緒にいなかったが、悠真の中では今までで一番存在感が強い者達だった。時に夢ではないかと思うこともある。しかし、彼がいなかった一年間はそれなしでは説明できず、彼も夢で終わらせたくはなかった。

「でも、いつあっちに行けるかわからないからなあ」

もう一度会いたいと心から思う。だが、あちらの世界に行く度に一年無意味に過ぎてしまうのは正直困る。何とかならないものかと思案するが、そもそも何故一年たっていたのかもわからないのに、そんな対処方など出てくるわけがない。

道の端に設置されている街灯に視線を向けて悠真は目を細める。あの時見た街灯はあれから一度も見かけることはなく、自分の中に本当にあるのかわからない魔力というものも何も感じない。けれど、首にある契約の印があの子の時のことを証明してくれている。

「早く会いたいなあ」

体育館シューズに履き変えて悠真は中に入る。既に正式バスケット部は練習を始めていた。悠真の姿を認めると、全員が規則正しく挨拶

をしてきた。彼も挨拶を返しながらその中から見知った顔を捜し出す。

「原松！調子はどうだ？」

「先輩！なかなかいいですよ！」

今では同級生となった原松芳季はそれでも敬語を直そうとはしない。同級生なので敬語は直してもらいたいのが彼の本音だが、結局誰もが悠真の存在を知ってしまっているため、直してもらおうのは諦めた。

軽くストレッチを済ませて悠真も練習に参加する。近々ある試合のためにバスケット部一同が頭を下たので練習のコーチをすることになったのだ。

「腰高い！ディフェンス突っ立てるな！ボール取られたらすぐに守りに行け！」

コーチになったら下も上も関係なく強い口調で指導し始める。悠真は一旦全員の動きを止めて自らボールを手にする。ダム、ダムとリズム良くボールについて、止めてみるように促した。

「行くぞ！」

腰を低くして走り出す。一人、二人とボールを奪おうと手を延ばす者がいたが、反対側の手にボールを移して、クルリと身を翻して避ける。すぐさま目の前に三人目が現われたがそれも軽く流した。他の者とは違い、両手を広げて道を塞いできた芳季を前にした時、悠真は一瞬止まって見せる。左手にあるボールを右にドリブルした。左脚に力を入れた所を目敏く^{めく}芳季は見て、ボールと同じ方向に身体

を動かす。

「なっ！」

右に行くと思った悠真の動きはそのまま左に動き、見事に綺麗な動きで芳季を抜かした。残る一人はゴール下に構えていたが、につと軽く笑ってゴール下まで行かず、曲線が描かれた手前でボールを放つ。

スパツ

「スリーポイント……………」

茫然とボールがネットに通るのを眺めた。理想のフォームと言っても過言ではない形で彼はボールを放った。綺麗に入ったのが気持ちよかったのか悠真は思わずガッツポーズする。

「ガムシヤラに突っ込んでくるだけじゃ無理なのはわかっただろ？一番動き良かったのは原松かな？相手の動きをよく見て、ボールを追って、相手の動きを読むことが重要だ。手を使え、足を使え、全身使え！いいな！」

「……………はい……………」

悠真にみっちり指導されたバスケット部員は最後はもう立ち上がれないほど消費しきっていた。片付けは進んで悠真がやり、ボールを体育館倉庫に運ぶ。デイフェンスはかなり使えるようになったから次はオフェンスだな、とぶつぶつ次の練習について考える。ふと、バドミントンのラケットの後ろ側に見慣れない古いボールがあることに気付いて、悠真は身を屈める。

「何だ？」

ボールに穴みたいなのが見えて悠真はそれに手を延ばした。瞬間、ズンと何かに引っ張られる感覚に襲われて視界が真っ暗になる。

そのまま彼の意識は途切れてしまった。

序章（後書き）

久しぶりに更新です。素人の私の話をどうか、広い心で見てください。

第一章 再来

いつから目を開けていたのか、正直覚えていなかった。視界に入るのは風に揺れる木の葉とどんよりと光を遮る雲だった。どこことなく自分が見慣れてきた空ではないと思い、やっとそこで意識がはっきりしてきた悠真は身を起こした。

カラスの鳴き声が木霊する。暗い森に反響するそれは更に不気味さを引き出していた。見たことがある、と悠真は頭をがしと掻いた。まだ頭がボーっとしているのか、思考回路が上手く働いていない。

「ん？ここつてえ、魔界！！」

やっと気付いて、立ち上がる。妙な霧が発ち込んでいるところを見ると、例の妖怪にも人間にも害のある森の中らしい。顔から血の気が引いていくのがわかった。視線を巡らせればすぐに大きな城が視界に入る。まだ自分の存在が妖怪に知られていないと幾分か安堵して、悠真は城に向かって走り出した。所々に人骨とは違う形をした骨が転がっているのを横目で一瞥しながら、彼は自己ベストタイムで森を走り抜ける。

薄暗い部屋のソファに腰かける銀髪の男は口端を吊り上げる。窓の外を見やればそこには決して晴れることのない空と白い霧に紛れる森が広がっている。先程と何ら変わらない風景。だが、明らかに変わったことが起きた。

長い髪を揺らして、彼は腰を浮かせる。何かに反応するかのよう
に背中にしまわれていた翼がゆっくりと広がっていく。赤い絨毯の

上に白い羽根が散らばる。

「あら、伯鳳様。もしかしてまた会えるんですか？」

「そうみたいだ。よかったなお鶴。ユニークな彼にまた会えるよ」

「はい。とつても嬉しいですね。だけど、一番喜ぶのはもちろん、紫さんですわね！」

いつからそこにいたのか。明かりが何も届いていない部屋の隅から小柄な女性が姿を現わす。淡い緑の髪はクルリ、と柔らかい曲線を描いて首もとまで伸びている。その髪から覗くのは拳くらいの尖った耳。

「さあ、早く助けないと美味しいところ私が貰っちゃうよ？紫君」

取れた自分の羽根を口元にあてて、伯鳳は目を細める。彼が見つめる森は妖怪でも人間でも隔てなく正常ではいられなくなる魔の森。悠真が一人でこの城に辿り着くのはかなり無理があるだろう。

鶴は白い手を顎にあてて何かを思案する。いつもとは違い神妙な顔つきをする彼女に伯鳳も気を引き締める。

「どつしたんだい？」

「いえ、今回悠真さんがこの世界にいらしたのは、もしかしたら」

一拍、焦れたい空白が襲う。やっと重い口を開けて彼女が放った言葉はあまりにも残酷で期待外れなものだった。

「抜殻茶が飲みたかったからでしょうか？」

紫がかった青い髪が三つ編みにされて、背中に垂れる。黒い毛が生えた獣のような耳がピクリと揺れる。人の大きさ程の岩が何個もくつついたような崖の上で彼は平然と佇んでいる。視線を巡らせて森の方を睨む。

おそらくそこらにいる原型も止まらない妖怪には気付かない程微かな魂の気配。小さく舌打をして彼、紫はその場から飛び降りた。人間なら誰であつても死んでしまうような高さを楽々着地して、紫は森の中へと姿を消した。

「にしても、相変わらず不気味な所だよなあ」

走り疲れて結局歩いてしまっている悠真。まだ身体が怠くなるところまではいっていないが、気分的には既に参ってしまった。青い顔をしながら、口調は明るく、一人言を長々と述べている。

下に転がる骨はもう何十個と見て、カラスの鳴き声は止むことはない。不思議なことに今回はまだ一匹として妖怪は見えていないが、もし出逢うことがあるならばあの三人のどれかがいい。と心から祈っていた。

男にしては丸く可愛らしい目を不安そうに回して、悠真は先を急ぐ。

「ああ、くそ。こつちに来れる日がわかればいいんだけどなあ。そうすれば色々用意して来れるのに」

よそ見をしていた悠真に木から下がる大きな葉が襲う。びっくり

して妙な叫びが上がる。

「うわぁ！何だ、葉か！びっくりさせんなよ！まったくもう。無意味にこんなにズルズル伸びて、少しは歩く人に身にもなれっの！あ？人は来ないのか？じゃあ、妖怪か？」

思わず葉を引きちぎって無意味に握り締める。悠真は遠足に行つて道端で拾った木を無意味に持つて振り回している小学生の気持ちかわかる気がした。何か手に持つていないと落ち着かないというあの真理だ。

がさがさ

草むらから音がした。おそらく意味もない葉を前に突き出して身構える行動をした。案の定、そこには人でも動物でもない妖怪が一匹いた。まだ悠真の存在に気付いていないのか、妖怪はぎよるぎよるした目玉を左右に動かしている。

悠真は音を立てないように身を低くしながら、ゆっくりとその場から離れる。

危ない危ない。こんなへなへなな葉で太刀打できるわけないしな。

「て！わぁぁぁあぁあー！」

目の前に現われたのはまた違う妖怪。今の叫び声でやり過ぎせうだったもう一匹の妖怪にも存在を気付かれました。襲いかかろうとした目の前の妖怪に葉を投げつけて、悠真は走り出す。

前にここに来た時よりもいくらか落ち着いている。周囲の状況が確認できる程だ。振り返れば二匹が必死になって追いかけて来た。

逃げながらも向かう所はあの城。霧が濃くなってきたのを見ながら、具合が悪くなるのも時間の問題だと感じる。できるだけ足場の悪い場所を選んで、妖怪達との距離を大きくしていく。

「体力二倍使うわ！」

叫んだ瞬間足元がもつれて倒れる。咄嗟に手をついて顔面直撃はまぬがれるが、そんなことしている間に妖怪に挟まれた。すぐさま立ち上がって立ち足はかかる妖怪の顔面を蹴り上げる。しかし、足を捕まれて身動きが取れなくなる。

「だああ！人の足を掴むな！気色悪い！いいか！俺は唐揚でもステーキでもおやつでもないぞ！美味くないからな！絶対に！俺なんか食べたなら腹下して一生トイレから出れなくなるぞ！」

「相変わらずよく喋る奴だな」

悠真の足元が紫色の炎で包まれる。一瞬にして足を掴んでいた妖怪は灰になる。声が出た方に顔を向ければそこには懐かしの人物。青かった顔は一気に輝いた。

「紫ちゃん！」

「ちゃん付けするな！」

始めてこの世界に来た時に悠真の生命を救い、助けてくれた人物。黒ヒョウの化身と言われる彼は世界で一番の足を誇る妖怪、紫。悠真、伯鳳、鶴の四人の中で唯一突っ込みキャラと言えるまともな人物だ。

「よそ見はいけませんよ。紫さん」

振り向けばもう一匹の妖怪を小さなナイフで突き刺し、木にぶら下げていた鶴がいた。血がいくつか顔や服に飛び散り、清楚な彼女の雰囲気は妖しくなる。口元についた血を舌で舐めて、彼女は木にぶら下がってピクピク動く妖怪を睨んだ。

「さあ、美味しい美味しい抜殻茶にしてあげますわ」

ぎいいやあああああ

極悪人が浮かべるような笑みをする彼女の手によって、霧が広がる不気味な森に、負けなくらいの不気味な叫び声が響いた。

「うん、今日もお鶴は元気だねえ」

木の陰に隠れていた伯鳳が身を出して、呑気な言葉を吐いた。残酷な光景に口元を押さえて、青い顔をしていた悠真は紫の方へ顔を向けた。いくら妖怪でもあんなことをしている姿を見たら、誰でもつても気持ち悪くなる。

やば、胸が……………。

三人と懐かしの再会を味わう前に悠真の意識はその場で途切れてしまった。完全に意識がなくなる時に聞こえたのは紫の余裕のない叫び声だった。

窓が何も無い真っ暗闇の部屋の中。少女は透き通った碧い瞳を揺

らして、息をつく。傍目で考えると彼女は十二、三歳といったところだろう。彼女は縮こまって目を閉じる。背中から伯鳳と似た白い翼が生える。身体の大きさと合った小さな翼はそのまま彼女を隠した。

「力が……足りない」

震える声音がその部屋に響く。陰でその姿を見守るのは小さな毛に包まれている妖怪。

誰か、助けて。

力のある人……。

視界に入ってきたのは普通の家ではありえない高い天井だった。西洋の神殿的な様々な模様や文字が刻まれているそれを何も考えずに見つめて、彼は瞬きをする。まだ微かに残る気持ち悪さに気付かないふりして、身を起こす。抵抗の少ないクッションに身が沈む。

「ここは？」

呟いてみて、それが愚問だと気付く。この世界にこれ程立派な建物があるのはあそこしかない。というより、建物自体がここにしかないのだ。悠真はレースがついたフリフリの布団を見やる。これは、鶴の好みなのだろうか。と、思わず思索してしまうくらい少女チツクな部屋だった。

布団から身を出して、立ち上がると足がスースーすることに気付

く。ちらりと下を向けば見事に硬直する。首のところでもぞもぞすると思つていたらそこには胸が小さい人なら喜びそうな純白なフリルが首もとから腰くらいまで縫われて、腰には同じ色の幅の広い布がまかれて、リボンが作られている。そこからふっくらとビラビラにスカートが広がっている。足には何もなく、素足で透明なガラスの靴が履かれていた。

「何だこりゃあああああ!!!」

高校生の男が普通の女性でも着るのを戸惑つてしまうような乙女系服を着ていたら、絶叫しても仕方がないだろう。頭を触つてみたら、ちゃっかりと腰まで伸びる緩いウェーブがかかったエクステが付けられていた。悠真は顔を真つ青にしてそこに自分の服がないか探し始める。だが、自分の服はおるか、他の服でさえも一切存在しなかった。

思わずその部屋から飛び出して走り出す。こんな姿を誰かに見られたら嫌だ、ということよりも早く着替えたいという気持ちの方が強かったからだ。

ガラスの靴を履いているせいでカコカコと妙に高い音が廊下に木霊する。部屋の扉を見つけるとドアノブに一つ一つ手をかけていく。が、どれも鍵が閉まつているせいで何も開かない。

「どうなつてるんだ!? 大体、何で皆俺にこういう女物の服を着せたらがるんだよっ! 普通に女の子が着ている方が可愛いじゃないかよっ! びらっびらのきらっきらのスースーする服なんて俺は興味ない! 興味あつた方がヤバいだろうっ! こんな服着て、『あら、やだ。私可愛い?』なんて言つてたら明らかにオカマじゃないかよ! しかも俺だと相当似合っちゃう? いやいやいや、流石の俺でもそこまで似合わない!」

「そうですかあ？私が思わず『本当はヒーローじゃなくて、ヒロインなの。わ・た・し・し どう？この恰好を見るだけで助ける気になれるでしょう？』という題名を付けたい程似合いますのに。そこまで否定しなくてもよろしいのでは？」

いつの間にか隣りを同じ速度で走っていた鶴は明るい声で言った。だがそれは悠真にとってダメージにしかならず、ちっとも嬉しくない。こんなに輝いた表情をしているということはやはりこの恰好をさせたのは鶴であろう。

「ちよ、お鶴さん！俺の服何処にやったんですか？」

「悠真さんの服はとっても汚れていたのでひっぺ返して洗濯させて頂きましたわ まだ乾いていないので渡すことはできませんわ」

「そんなあ！他に服はないんですか？」

「ありますけど、私はその服が気にいっているので渡したりなんてずえつつつつつたいしませんわ」

虐めを受けている。と今彼は心から思っているだろう。ふらりと一瞬意識を失って彼は壁に手をつく。すると、がこんという軽い音が聞こえると共に触れた所の壁が正方形の切れ目にそってへこんだ。間もなくして微かな地響きが伝わり、床が無くなる。

「うつそおおおおお！！落とし穴ああああ！！！！」

足場を無くした身体は地球とは違うのに万有引力と同じ作用で自由落下していく。暗闇の中に落ちていく悠真をじっと見つめて、鶴は目を細める。いつも浮かべられている笑みはいつの間にか消えて、

いつもよりトーンの低い声音で小さく呟いた。

「やっぱり、悠真さんがこの世界に来たのは……あの方が呼んだから？」

第一章 再来（後書き）

えっと、かなり話の展開が早い気がします。第二シリーズはどこまで進めるかあまり考えていませんが、できる限り話の筋が通っているものを書いていきたいと思っています。頑張ります！

感想、評価、いつでも受けつけているので、よろしくお願いします。

第二章 天使

気付けばそこは真つ暗で何も見えない空間だった。頭を打ったのか、後頭部に激痛が走る。最近よく気を失っている気がして、悠真は何とも自分が情けなく思えてならなかった。

窓も何も無い所を見ると、ここはおそらく地下なのだろう。ひんやりと冷たい空気が滞留している。埃っぽいその場所に眉を寄せて、彼は立ち上がる。

しばらくして、目が次第に暗闇に慣れてくる。ぼんやりと見えてきたのはこの部屋の輪郭。しかし、隅は闇にまぎれてよく見えないため、あまり意味はない。

「何なんだここ？」

部屋ということは明かりの代わりになるものが一つや二つあってもおかしくはない。しかし、それらしい物は見当たらない。仕方なく、少しずつ奥に足を踏み入れてみる。ガラスの靴のせいで、足音が無駄に大きく響く。首元に感じる長い髪に目は半開きになっていく。

「早く着替えたい……………」

そう思うのは当然だろう。普通の男性は女性物の、しかもビラビラとした乙女チックなドレスを好んで着ていたいとは思わない。

突然立ち止まった悠真の目の前は更に深い闇に支配されていた。おそらくここを区切りに空間が広がったのだろう。そう、直感で読み、慎重に一步前に進む。

途端、空間は一気に光を満たす。見えない所に設置されたランプに自然と炎が灯り、部屋が照らされる。闇に慣れた目には眩し過ぎ

るそれは、彼の後ろの道にも延びていく。

「何だあ？今の」

「鵜の仕掛けですよ」

幼い声音に体が震えた。まさかここに生存者（？）がいるとは思わなかった悠真は視界を広くして、声の主を探す。白っぽかった視界は次第に色味を帯びていく。

彼女は部屋の真ん中にいた。純白のワンピースに身を包ませた、天使。汚れ一つ無い白過ぎる翼を持つ少女は金髪の髪を揺らして微笑んでいた。

「えっと、君は……………伯鳳さんの隠し子？」

言って悠真は恐ろしくなる。隠し子と思ったのは、少女の背中に伯鳳と似た白い翼があったからだ。だが、誰に隠す必要があるのだろうか。答えはすぐに出た。紫だ。

悠真の中の伯鳳の性格がかなり曲がっているような気がするの。気のせいではないだろう。

「面白いことを言いますね。違いますよ。私はレイズと言います。貴方は？」

「レイズ？珍しい、カタカナ文字なんだ。俺は鷹崎悠真」

「えっと、女性では……………なさそうですね」

悠真の姿を見て、戸惑いがちに言った。見事に女性に化けた彼の姿を見れば戸惑うのは仕方がないことだろう。乾いた笑みを浮かべ

て、悠真は間違えられる前に名乗ってよかったと心から思った。

「えっと、レイズはここで何してるの？一人？」

「はい。あ、いえ。ここには鵜が好きなのの子がいますよ。悠真さんが来てくれたからきつと喜んでますね」

にっこりと無邪気な笑顔を向けて、レイズはある場所を指差す。そこには牢屋と思われる鉄格子が張られていた。その中で蠢くものを認めて、彼は硬直した。

「何であいつはじつとできないんだ？」

「仕方ありませんよあ。何しろ悠真さんですから」

「そつだよ。悠真君なんだから」

隣でついて来るうざい二人に軽く眉を顰めながらも、紫は城を颯と早足で歩いていく。そんな紫の後を涼しい顔でついていく二人はかなり状況を楽しんでいるようだ。

硬い石畳の上を一定の速度で歩き、階段を下りる。下に行くといんやりとした空気が肌をついた。暗い空間に紫色の明かりを灯して彼は奥に進んだ。

「これじゃあ、まともに落ち着いて話もできない」

その咳きは口の中で放ったもので、二人にはおそらく聞こえていないだろう。悠真の考えなしの行動は面白いが、今は悩みの種でも

あつた。

この物体は何だろう。思わず半目になって彼が見つめているものは毛の塊。ばつさばつとした長い毛がもそもぞと動いている。物体の下には藁わらみたいな物が敷き詰められている。じっとそれを見つめて、悠真は目を細める。

動いているところを見ると、これはおそらく生物なのだろう。

「生物っていうか、妖怪……………」？

「はい。それは」

「ペ・ヨピジュンですわ」

後ろから聞こえた声に振り返る。そこにはいつの間にか紫、伯鳳、鶴の三人が立っていた。紫は何か壮絶なものを見ているかのように顔を青くしている。対して鶴はとても輝かしい顔でこちらを見つめている。

「ペ・ヨピジュン？何だそのある俳優の名前を恐れながらも頂いちやっただ的な名前は！」

「寿命はたったの五年、三歳になってからはその長い毛が一步步ごとに五十本抜けていくという役立たずな妖怪ですの。女好きで、女を鑑賞する以外何もできないんですよ！可愛らしいでしょう？」

「いや、俺にはお鶴さんの好みは理解できません」

よく見てみれば、下に敷かれている藁だと思っていたものはこの大量な抜け毛だった。もぞもぞと身じろぎしてペ・ヨピジュンは毛で隠れかけているつぶらな瞳を悠真に向けた。

「るるる〜」

「は?」

「るるるる〜」

この声はペ・ヨピジュンの鳴き声なのだろうか。か細くて何とも可愛らしい声音だ。幾分かテンションの上がった声に悠真は首を捻る。

「よかったですねえ、悠真さん。ペ・ヨピジュンに気に入られましたよ」

気に入られた。それは光栄……………?なのか?

っていうか、女好きのペ・ヨピジュンが俺を気に入ったということは俺を女と勘違いしているということか?

「って、嬉しくないわ!女好きなら女装も見破れ!」

「ってか、お前は何でそんな恰好してるんだ!そんな趣味があったのか?」

「ちつがあうう!!これはお鷓さんが!!」

「まあまあ、似合っているからそこまで気にしなくてもいいのでは?悠真君の男でも女でも何でもOK的なその顔は私は好きだよ」

「何おぞましいことを口走っているんだてめえは！」

はっはっはと高らかな笑い声を上げて伯鳳は悠真を手で差す。ふつくらとした輪郭と、柔らかな髪、少し骨ぼつたいか細い体にふつくらとしたドレス。女でも感嘆を上げてしまうほど似合っている。ペ・ヨピジョンが女と間違えてしまっても仕方が無い。

「こんなに美しいのに、妄想しないなんて損だよ紫君！」

「気色悪いこと言わないで下さい！」

「何を言うか！君はこんなにも美しいのに、それを口にしたら気色悪いということになってしまふのかね？」

自分の台詞に酔っている伯鳳は無意味なポーズをする。悠真は顔を青くしてふらついた。それを咄嗟とつさに紫が支える。

その様子を黙って見つめていたレイズは目を細めて俯むついた。

「おやおや、これは禁断の愛ですかねえ？」

「見た目的には別に禁断でも何でもないんだがねえ」

「ちょっと待った！それは俺と悠真のことを言ってるんじゃないだろっな」

「え！？」

「他に誰がいるんだね！」

「そうですね、紫さん」

どいつもこいつもからかいやがって!!

紫の額に青筋が浮かび上がる。二人がおちよくるのも無理はない。紫はいつも悠真の心配ばかりしているし、悠真はいつも紫を頼っている。しかも彼は今女の姿をしているのでお似合いのカップルと言えるかもしれない。

「ちょっと、お鶴さんも伯鳳さんも変なこと言わないで下さいよ！俺は男です！っていうか服返してください！」

ムキになって否定してもあまり様にならない。
おずおずと忘れられし存在のレイズが口を挟む。

「あの、悠真さん？」

「あ、ごめんレイズ！忘れてた！そういえば君はどうしてこんな所にいるの？」

四人の視線が彼女に注がれる。この部屋にこんなにも人が集まることはない。だからなのか、少し落ち着かない様子でレイズは顔を伏せた。

「悠真さん、その人はこの魔界の支持力ですよ」

「支持力？」

聞きなれない言葉に悠真は眉間に皺みけん しわを寄せる。

三人を順序良く見回せば、意味深な表情をしていた。特に紫だ。

レイズに視線を向けたまま苦い顔をしている。

「私は、この魔界の安定を司る者です」

純白の翼をはためかせて、レイズは澄んだ声音で述べた。エメラルドグリーンの彼女の瞳が深まる。見れば見るほど人に近い存在。けれどもどこか皆人とは違うところがあつて。

「君は何処の誰？この世界の人じゃないよね？」

「……!?」「……」

恐らくただの直感から出た言葉だろう。それとも鶴と同じ時の原理か。

レイズは一瞬息をするのも忘れて、驚愕きょうおつがくに満ちた表情をしていた。悠真は首を傾げて、じっと彼女だけを見つめる。

白い、そして綺麗な光。

鶴さんのような禍々しさは微塵みじんもない。

「君は何処から来たの？」

「私、は」

「そいつは魔界ではなくて天界から来た者だ」

今まで妖怪、魔界、魔王と聞きなれない言葉に仰天してきた悠真だが、案の定この言葉にも硬直した。

天の世界。人間が極楽浄土や神がいる世界などと考えてきたあの夢の世界。彼女はそこから来たという。

「天界？つて、やっぱりレイズつて天使？へ？じゃあ、俺天国に行く？」

かなり混乱している。紫は面倒臭そうに頭を掻き回して、伯鳳と鵜を順に見やる。もちろん二人はム力つくほど綺麗な笑みを紫に向けていた。つまり、紫に説明を願っているのだ。

いや、願っているのではなく、命令しているの域に近い。

「はあ。悠真、よく聞け」

紫は男なのか疑いたくなるような恰好をしている悠真と向かい合つて、天界と支持力について説明し始めた。

魔界には後悔をして死んだ人以外の者が違う形になって現れる地獄みたいなもの。

天界はその逆。後悔もなく、快く逝った人以外の者が違う形で現れる天国のようなものだ。

死ぬ時に違う気持ちを抱いて違う世界に行った者はそれぞれ違う力を手にする。

負の世界、魔界に行った者は魔力。

正の世界、天界に行った者は天力。

天力は正の気持ちか力として具現化したもの。

それに比べて魔力は負の気持ちが力として具現化したものだ。

負の力、それは互いに互いを飲み込む打ち消し合う力だ。

妖怪になった者は誰もがそれを使う。そのため、この世界にはその負の力が充満してしまう。

世界と同じ負の力が充満すれば、世界の安定は無くなり、崩れる。

「ちょっと待って！じゃあ、レイズがここにいる理由って………
天力でその魔力を相殺するため？」

「お、今回は飲み込み早いな。魔力が一定以上にならないために天界から一人だけ住人を呼んで、消してもらった。だから、魔界の安定を司る者」

あつさりと述べられたそれは考えてみればかなり残酷なこと。悔いなく死んだ彼等に自分達とは次元が違う世界で生きると言っているのだ。しかも、こんな真つ暗で何も無い所に閉じ込めて。

「話は理解できたけど、レイズがここにいた理由にはなっていないよ？どうしてこんなに暗くて淋しい所に閉じ込めておくんだ？」

「淋しくくないですよお。だって、この子がいますものお」

鵜の能天気な声が響く。この子とはもちろん先ほどから毛をふさふさと揺り動かしているペ・ヨピジュンのことだ。一瞬、口元を引きつらせながらも、鵜の反応が怖くて文句は言えない。

悠真はレイズに視線を移して、優しい笑みを作る。

「ねえ、レイズはここで淋しくくないの？怖くないの？」

「それは………」

不安な表情で悠真の後ろにいる三人を見つめる。彼女はこの世界の住人ではない。だから、自分自身が外に出ることはいけないこと

だと思っているのだ。

「気にしなくていいんだ。本音を言ってる？」

「　　っ、出たいです。こんな所、もう」

泣き出してしまったレイズの頭を優しく撫でて、悠真は微笑んだ。見た目は十二、三歳くらいの女の子。けれど、この姿は死ぬ前の姿とは違う。

一体彼女が何だったかは悠真は気にしない。今、ここにいる者がどう思っているのが、彼にとって重要なのだ。

「いいよね？伯鳳さん、お鶴さん、紫ちゃん」

だからなんで俺だけちゃん付けなんだ……………

「悠真君のお願いなら私は断れないよ」

「この子が淋しがりますけどお、仕方ありませんねえ。その代わりに悠真さん時々その恰好で会ってあげてくださいよお」

鶴の言葉で自分の恰好を思い出す。だあああ、とまた訳のわからない叫び声を上げる。落ち着きのない悠真の行動に微笑して、レイズは涙を止めた。

目を細めて、瞳を揺らす。この世界の妖怪と同じだが、違う力を持つ人間。正でも負でもない特殊な力を。

「無意識に呼んでしまったのですね……………」

天界と魔界を結ぶ

天力と魔力を持つ者を

第二章 天使（後書き）

えっと、ちょっと悪い癖が出てきてますね。実はこの第二シリーズ、設定なしで書いてます。ですから、矛盾が生じてくる場合があるので、もし気付いた方は突っ込んで下さるとありがたいです（；・・・）
すみません。出来る限り話が矛盾しないよう、かつわかりやすくなるよう頑張ります。

第三章 過去の訪問者

レイズを空き室に移した後、悠真は何故か廊下を駆け回っていた。やっと制服を返してもらい、着替えたのでちゃんと男に戻っていた。

「ねえ、紫ちゃんは？」

「さあ、先ほどから姿を見てませんねえ」

二人でのんびりとお茶をすすっていた鵜がとぼけた口調で言う。レイズを地下から移した後くらいから彼の姿を見なくなったのだ。悠真はこの世界に再来してからのんびりと紫と話を交わしていない。やっとできると思った矢先に喪失。

「何なんだよ、もう」

バツが悪そうに顔を顰めて、悠真は溜め息をついたのだった。

一方、悠真が捜している紫は城の屋根の上にいた。霧に包まれた怪しい雰囲気の森を見渡して目を細める。カラスの鳴き声は昼も夜も関係なく響いて、空にはいつも雲が広がる。

「あんだ、人じゃないのかっ!？」

昔に聞いた言葉、聞いた声音を思い出して、目を瞑る。
思い浮かべるのは悠真と同じ黒髪と黒い瞳をした人間。紫が初めて魔界で会った人間。

「龍一……………」

辛そうに呟かれたそれは彼の名前。悠真と似ている雰囲気を出した、悠真よりもすっかりとした意見を持った人物だったことを紫は覚えている。

魔界に興味を持って、イキイキとした顔でこの世界のことを紫に聞いてくる無邪気な性格をしていた。

『俺、ここにいとヤバいんだろ？』

儂く笑った彼の顔が昨日ことのように思い出される。この二十年間、思い出そうともしなかったそれを何故今になって浮かんでくるのか。

おそらくそれは悠真のせいだ。

「何でだか。似てないのに、似てるのが……………不思議だ」

悠真は城を隅から隅まで紫を捜すと共に探検していた。大広間、客間、仕事部屋、調理室、鶴の部屋（ここは流石に入る勇氣は無か

った)、そして書斎。

沢山の本が保管されたその場所を興味深げに覗いて、悠真は一冊、本を手取る。

「世界の成り立ち？」

表紙に書かれた達筆な文字を目に止めて、表紙をめくる。

「世界征服のやり方？」

中に書かれた題名に眉を^{ひそ}顰める。ページを開いてみると中には何故か地層について長々と述べられていた。

ここの本は題名はあまり意味のない物だとこの一冊で彼は悟った。

「ってか、まずこんなにある本は一体誰が読んでいるんだか」

本を押し戻して、悠真は息をつく。もしここにこの魔界について記されたものがあるのなら、いつも本を読まない自分でも、頑張つて読んでみようと考えていたのだ。

魔界、天界、魔力、天力……………

俺が知らないことが次第に増えていく。

メルヘンチックな言葉に頭が痛くなる。つといても彼にとつては勉強も同じ対象だが。

そもそも、本当に俺に魔力なんてあるのか？

不思議に思うが、それを否定することはできない。何故ならその力が主となる能力を常に使っているからだ。それは妖怪達の能力を

見極めること。

魔力が無ければ決して見る事が無かった彼らの力の色。これが無かったらレイズのことわからなかつただろう。

そして、初めてこの世界に来た時に使ったあの強大な力。妖怪が一瞬にして灰となり、風に舞った。あれを見てしまえばいくら否定したい気持ちがいっぱいでも、認めるしかない。

「魔力かぁ。天力と基本的どう違うのかな？つてか、天力の本質的力がよく理解できない。魔力は魔界と波長の合った力だから、天力は天界と波長が合った力か？」

正の気持ち、つまり純粋な気持ちが力になったってことだよな？

頭を掻き回して、その場に座り込む。考えを巡らしたことで、紫を捜すのが面倒になったようだ。その場に大の字になって寝っ転がりは、悠真は天井を見上げる。一体誰がこんな立派な建物を造ったのかは不明だが、かなり手先が器用なのだろう、天井にも細かい装飾が施されていた。

妖怪と天使、死ぬ時に感じたものが違うだけでどうしてこんなにも立場や力が異なるのか。悠真には理解できなかった。

「何やってんだ？こいつは」

考え事をしたまま眠ってしまったのか、悠真は書斎で寝息を立てていた。屋根から下りてきた紫は呆れながらも、その寝顔に苦笑した。

自分の世界とは違う、襲われるかもしれないというこの魔界で、こんなにも安らかな顔で眠れるものだろうか。悠真を見ていると、

気を張っている自分が馬鹿らしく感じてしまう。

「本当、甘ちゃんだな。魔界にいてもマイペースなのは似てるよな」
俺達に振り回されながらも、文句も言わず。

レイズのことなど考える心の余裕など無いはずなのに、何故ここまで必死になれるのか。

「俺にはわからない。お前等の事は」

悠真の髪に触れて、紫は目を細める。人は簡単に殺^やられてしまうほど脆くて、弱い生物。確かに悠真には魔力があるが、それでもそれを自由に使いこなせるわけではない。紫がその気になればいつでも彼を殺すことができる。

だが、それをしなかった。正直、できなかったのだ。彼を殺すことなど。

「龍一にはできたのにな……何でだろうな」

「んー」

身じろぎして、悠真は目をゆっくりと開ける。ぼんやりとした視界の中に紫がかった青いものが揺れ動く。はっきりと見える前に悠真にはそれが何なのかすぐに理解した。

がばりと勢いよく起き上がり、茫然と紫を一瞥する。

「何だ？」

「ど、何処行つてたんだよ！物凄く探したんだぞ！」

「……………何か、互いに擦れ違っているな」

最初は紫が悠真の所に行こうとしたら、穴に落ちて。次は悠真が紫と話をしようとして、紫を捜して。

そして結局先に見つけたのは紫。

一番会って話をしたい人に互いに会えないなど、口オとジユリツトくらいだと悠真は思っていた。

「お前、身体は大丈夫なのか？」

「え？あ、あの霧の影響のこと？大丈夫。こつ見えても身体は頑丈だから」

「それ、あいつ等に不用意に言わない方が身のためだぞ？実験台にされて殺されるからな」

この中で一番まともな感性をした紫の言葉は、時に残酷だ。しかもそれが本当にありそうなことなので更に恐ろしい。

思わず身震いをして、悠真は話を変えることにした。

「ねえ、ついでだからさあ。この世界のこと詳しく教えてよ」

「あ？何だいきなり」

「だって、何も知らないままここに居るのって、何か駄目な気がするさあ」

契約を交わしたこの世界で唯一の人間である悠真。いつこの世界に来て、いつ向こうの世界に戻るかはわからないこの状況で、いつまでも無知のままではいられるほど余裕ではられない。

少しでも知識を身につけて、紫や鶴等がいなくてもある程度生き延びられるようにしなければいつか本当に彼はぼっくりと死んでしまっただろう。

こいつ、直感で理解しているのか

悠真には残念ながらそこまで考えられる知能は無く、動物的直感とも言えるもので本能的に理解しているだけなのだ。
馬鹿なのか凄いのかわからない。

「そうだな。ここの書齋の本でも読んだらわかるんじゃないのか？」
そこら辺に転がっている本を手に取り捲る。彼が顔を顰めた時を見計らって悠真は悟った声を出す。

「あの二人が住むこの城にある本がまともなものだと思う？」

「すまん、無意味な提案をしたみたいだな」
力なく本を放って、立ち上がる。手を差し出しながら彼はいつもの低い声で言った。

「ここじゃあ、話し難いし、部屋でも行くか」

「あ、ああ」

あまり乗る気ではない彼に歯切れ悪い返事を返して、悠真は紫の手を掴んで立ち上がる。

魔界のこと。妖怪のこと。天界のこと。レイズのこと。少しでも知識が増えれば紫のことが理解できるだろうか。と、淡い期待を胸

に秘めた。

場所を悠真に渡された部屋に移動して、二人はベットに腰掛けた。

「で？何から聞きたい？」

説明できない重苦しさが部屋を包む。悠真は突然の緊張に唾を飲み込む。

何から聞けばいいのが正直わからなかった。けれど、一番聞きたいことははっきりしていた。

「紫ちゃんは、死ぬ前は何処にいたの？」

「は？」

一番聞きたいのは自分を心配してくれる紫のこと。にっこりと深い笑みを作つて、悠真は立ち上がる。大きく伸びをして、そのままの視線で話を続ける。

「俺さ、身近の人のことから知りたいんだ。些ちか細なことでいい。教えてくれない？」

「何を馬鹿なことを」

失笑されて、目を細める。

おそらく今上手く笑えないだろう。そう思いながら声だけは平静を装って言葉を繋げる。

「冗談だよ。俺が一番気になってたのはそうだなあ、俺と同じ立場だった、昔この魔界に来たっていう人間かな？」

意外な言葉に紫は一瞬息を止めた。悠真はそんな彼の様子に気付かず、意気揚々と話し始めた。

「二十年以上前の人なんだよね？俺と似てた？男？女？歳は？やっぱり魔力とか強かったのかなあ？」

イキイキとした横顔は紫にある人物を連想させた。瞳を曇らせて、視線を外した。

暫く沈黙を守っていた紫だが、やっと決意して、口を開いた。

「あいつは……、本当にこの世界が好きで、人間以外の者がいるこの世界に興味津々で、凄くはしゃいでた」

悠真は穏やかな顔をして語り出した紫に驚いて、目を睜みはった。彼が人のことをこういう顔で話すことは無い。と思っていたからだ。もちろん、長い付き合いではないし、理解しているはず無いのだが、伯鳳や鶴の言い方でそういう人なのだと仮定していた。

「初めて俺を見た時も怖がるどころかこの世界のこと、俺のことを質問攻めにしてきたな」

信じられない言葉に悠真は目を丸くした。

人とは違う、動物とも言いがたい形状をした妖怪、それが人に似ているが、力も身体能力を持つ彼等に恐れもせず、目を輝かせていたというのだから、驚きもするだろう。

どんな人でも妖怪を恐れ、自分の身を守ることを最優先にするのが通常だ。

「凄いなあ。何だか俺の学校の伝説の生徒会長みたいだ」

生徒会長という聞きなれない単語に顔を顰める。自分の世界の人に興味を示してくれたことが嬉しかったのか、悠真はにっこりと無邪気な笑顔を向けた。

「俺の学校にさあ、ハロウィンパーティーって行事があるんだ。それはある生徒会長が悪戯好きで、皆で騒ぎたいという願望だけで作り上げたんだ。不思議な力や不思議な生物を信じてて、いつもそれを追い求めているたっていう噂なんだ」

「やっぱりそういう奴が一人や二人いるもんなんだな」

紫の顔が柔らかい。ピリピリとした雰囲気や和らいだのにほっとして、悠真は微笑む。

良かった

まだ関係は崩れない

悠真が一番信頼できる紫との絆が一番脆くて、薄いもののような気がした。

第三章 過去の訪問者（後書き）

何となく気付いている人は少しにやけた顔で読んでくれたかもしれませんがね。

久しぶりの更新です。もう少しペースを上げられればよいのですが。待たせてすみません。

第四章 力の仕組み

地下の部屋とは違い、明るく開放感のある部屋へ移されたレイズは窓の外を見やる。晴れることの無い空、不気味に広がる霧の森、鳴き止むことのないカラスの声。

「本当に天界とは全く違う空間です」

淋しそうに顔を歪める彼女の頬に温かい滴が零れた。

この世界で感じるものは全て魔力。いがみ合い、憎しみ合う感情で構成された力。それが溢れないようにレイズはここにいる。

「私の力だけでは……足りない」

熱い吐息を吐き出して、レイズは蹲すくまる。拍子で純白の翼が広がる。

「そういえばさあ、紫ちゃん魔力が負の力だと言ってたけど、それは俺の力もそうなの？」

魔界が持つ波長と近い波長を持つ者ほど魔力の力は強い。そう、彼は以前に説明をした。そして、今回の説明で紫は魔力は負の感情が作用したものだと言っている。

悠真がこの世界、魔界に飛ばされたのは彼が人間の身でありながらも魔界との波長と合ってしまったからである。つまり高い魔力を保持していたからなのだ。それなら、負の力の波長が魔界と同じということになる。

「それは……………」

何かを戸惑いながら説明しようとして口を開いた。

「… っ何だ?!」

身体の芯が微かに痺れる。一体それが何なのかは悠真自身にもわからない。けれど、何か危険を知らせていた。

突然立ち上がった悠真に驚いて、紫は言葉を切った。

「何かが、消えそうになっている」

呟いて走り出す。不意を突かれて、紫は一拍置いて後を追った。

全身が誰かの何かの危険を察知している。寒気とも恐怖とも言えない感覚はそう言うしか説明できなかった。

「ここだ!」

「ここって……………」

そこが何の部屋だか理解する前に悠真は中へ飛び込んでしまった。

魔力とは違う澄んだ力がその部屋に充満していた。純白の羽が部屋にばら撒かれ、中央に金髪の天使が蹲っていた。

「レイズ!」

一瞬、怯んだものの、悠真は彼女に駆け寄る。

彼女の身体に触れた瞬間、張り詰めていた空気が一気に解かれた。清涼な空気は徐々に薄れていき、顔を見なくてもわかるレイズの青い顔は少しずつ赤みを帯びていった。

ゆっくりと顔を上げる。涙でくしゃくしゃになった顔を辛うじて笑顔にする。

「ありがとう」

「え？俺何もしてないけど……。大丈夫か？」

よく見てみれば、全身汗でびっしょりと濡れて、息も荒い。発作でも起きたような状態だった。悠真はポケットに入ったハンカチを取り出して、顔の汗を拭ってやる。

難しい顔でその状況を見ていた紫は重そうな口を開いた。

「天力がなくなりつつあるのか？」

表情を固くして、ゆっくりと頷く。

彼女自身の力が無くなりつつあると、紫は言った。ということは天力と魔力で均衡を保っていたこの世界の安定が崩れ始めていうこと。

「へ？どういうこと？力って無くなるもん」

一人また話についていけない悠真はきよきよと二人の顔を交互に見つめる。レイズは悠真の手を軽く握って、澄んだ瞳を向けた。今まで女と免疫が無かった悠真は小さなレイズでも思わずドキッとした。

「助けてくれて、ありがとう。貴方の力のお陰で落ち着くことができました」

「へ？俺の力って魔力だろ？逆に辛いんじゃない」

レイズは首を横に振り、苦笑する。何を否定されたのか悠真にはわからなくて、ただ顔を顰めることしかできなかった。

一回、紫が口を挟もうとしたが、視線で彼女に止められてしまう。

「確かに悠真さんの力は魔力です。しかし、天力も含まれているのです」

「へ？」

「魔力が負の力が作用していることはさつき知りましたよね？天力は正の力が作用していることも。悠真さんのように生きた者はどちらの力も常に持っているのが普通なのです」

負の気持ち力が力となったのが魔力。その魔力の波長が魔界の持つ波長と近いほど力は強大に。

正の気持ちが力となったのが天力。その天力の波長が天界の持つ波長と近いほど力は強大に。

二つの相違点は正か負かの違いしかない。生物は正だけ、負だけと片方の感情しか持たないことなど、無いに等しい。そのため、悠真にも両方の力があつたとしてなんら不思議も無い。

「だけどそれを言うなら紫ちゃんとかは？」

「それはありえない」

「何で？」

「死んだ者は死んだ瞬間にどちらかの感情を手放してしまうからだ」

天界にいる者。魔界にいる者。全ては人ではない魂。彼等のように本能で動く者は死んだ瞬間、その時の想いや怨み^{うらみ}を忘れることがないように他の感情を消し去ってしまうのだ。

そのため魔界に来た者は負の力、魔力を使うことが基本なのだ。

「そんなのおかしいよ」

「え？」

「……………何故だ？」

「だって、紫ちゃんやお鶴さん、伯鳳さんは魔界の人だけど優しいじゃないか！紫ちゃんが俺のこと心配している時の感情は正の感情じゃないの？」

何も知らないはずの悠真。その無知さと純粹さ故に時に核心を突く。戸惑いで一瞬息を止める紫にレイズは目を細める。彼が悠真に対する行動や発言を見ていれば、どれほど大切な存在かよくわかった。

「悠真さん、それは違います」

「何がだよ？」

「確かにそれは正の気持ちにカウントされるものですが、魔界に来てから手に入れたその感情はもう力にはなり得ないのです」

死んでからこの世界に来た者は死んだ瞬間、正の力を手放した者達。だが、魔界に来てから正の気持ちを手に入れることは少なくともない。しかし、それは自分の中にある魔力に押し潰されて正の力には

なり得ないのだ。それは天界に行った者にも言えることだ。

魔界に来て両方の力を扱えるのは死んでもいない人間、悠真一人だ。

「そう、なんだ」

やっと理解できて、少し力が抜けた。難しい話は本来得意ではない悠真は今までの説明のせいもあって、ヒート寸前だ。

普通の世界とは違う。魔界も天界も不思議な力を扱えるが、それはいいことばかりでなくて。

「私の身体は日々、弱くなってきました。一度死んでしまったといつても、この世界にも死はありません。恐らく私はその瞬間が近づいているのです。私が死んでしまつたら、この世界の安定は崩れてしまいます」

「何言ってるんだよ！あんたそんな時に何心配してるんだ？自分の身のことを一番に考えろよ！それが普通だろ！」

「　　っ！！」

「確かに世界がどうかなくなっちゃうのは良くないけど、その前に自分の身を案じるよな！大きいことは後でいいからさ！」

いつも彼は他の者とは違う言葉を言う。そう紫は目を細める。普通なら小さなことより大きな方を優先するべきだと偽善でもなく言うだろう。しかし、彼ははっきりと言った。大きな方、つまり世界のこととはほつといて身近な方を気にしろと。

「悠真さん……………？」

「天力がなくなってきたきているのはその身体が弱まっているせいなのか？それとも力を使い過ぎていてるせいで身体が弱っているのか？」

「どちらかといえば後の方です」

それを聞いてにつこりと悠真は笑う。レイズの頭を優しく撫でて、紫の方へ顔を向ける。

何となく言われる言葉を覚悟して、紫は息を吸った。

「じゃあさ、レイズに休暇を与えれば解決じゃん！」

「何馬鹿なことを言っている！一日でもこいつを休ませればこの世界の魔力は増幅して、安定を崩し、暴走が始まるんだ」

「そんな！でも、このままレイズを酷使しても、そのうちに天力を扱える者はいなくなってしまうんだろ？それなら一か八か一日くらい休ませてみるもんじゃないのか？」

彼の言葉に冷たい瞳を向けて、紫は嘆息した。ゆっくりと口が開かれる。そこから何か哀しい言葉が放たれることを予想して、悠真は眉を顰めた。

「そいつが」

「レイズが死んだらまた新しい奴を呼べばいいなんてこと、言うなよ。俺はそんな生きている者を使い捨てるような奴、嫌いだ」

「！？」

言おうとした言葉を先に言われ、更に追い討ちをかけられた。

真つ直ぐに向けられる強い瞳、紫はそれを以前もどこかで見ただ気がした。はつきりと彼は言った。嫌い、と。今までどんなことがあっても紫や伯鳳などにそんな言葉をかけたこと無かった彼が。

「人の命を何だと思ってるんだ？あ？人じゃないか。えつと、生物？生きてもない？ああ、面倒だ！とにかく、命を大事にしない奴は嫌いだ！人の命でも、自分の命でもだ！」

「　　っ。だが、どうするんだ？このままだとどちらも失うぞ？」

悠真は隣にいるレイズをチラリ見る。確かに彼女を休ませてもその後の処理でまた無理をしなければならぬし、だからといって休ませなかったらその分彼女の身が危険だ。

「そんなのわからない。でも、自分達の世界を守るのに、他人に負担をかけてちゃいけないと俺は思う」

「確かにその通りだね」

「当たり前過ぎて気付かないことってありますけど、まさか悠真さんに言われるとはあゝ」

突然の声音に三人共振り返る。いつからそこにいたのか、伯鳳と鶴がいつもと変わらぬ笑顔をこちらに向けていた。はつきり言っただけでそんな笑顔を向けられても苛つくだけだと悠真は思った。

悠真は二人に近づき、必死な声で頼んだ。

「お願いだよ！一緒に方法探してくれよ！」

「うーん、愛しの悠真君にそう言われては仕方が無いなあ」

「といっても何か心当たりあるんですかあ？」

「いや、全くと言ってない！」

思わせぶりの彼の言葉に期待していた悠真はがっくりと肩を落とした。この世界の魔王である彼が知らないのなら一体誰が知っているのだろうか。

半ば絶望的になりながらも、しかし彼は挫けない。

「いや、絶対手はあるはずだ！」

「探すのか？」

「それなら書齋を調べてみるといいですわ あそこの本はお茶目な本ばかりですけど、しらみつぶし風潰しに探せばかなり有力な情報が詰まっていますからあ」

「あ、あそこを調べるのかあ」

やる気はあるが、脱力してしまう。そういうことは誰にでもあることだろう。

悠真、紫、伯鳳、鶴、レイズという何気に違和感のあるメンバーで書齋の手がかり探索開始。

第四章 力の仕組み（後書き）

何かいろいろと設定が増えている気がします。

皆さん、理解していただけたでしょうか？わからないことがあったら是非、感想として送ってください。できる限り答えていきたいと思えます。

第五章 脱走

「うーん……………」

一体既に何百冊の本を捲ったのか。それらしき文章は見当たらない。皆、気力を使い切ってしまった。特に悠真と紫はこの素直じゃない本に未だに慣れず目と精神に多大な負荷をかけていく。

「どうしよう……。見つからない！」

「おやおやあ、もうギブアップですかあ？根性ないですねえ」

「まあまあ、皆お鶴みたいに読む度にお肌つやつやあというわけにはいかないのだよ」

確かに鶴は一冊一冊読む度に肌の艶が増していく。それだけではない。声のトーンが上がっていくのだ。それとは対照的に紫は一冊読む度に顔が憔悴こわじやうしていく。

レイズは日本語が読めないので応援するしかなかった。

「ってか何でこの世界の本は全て日本語なんだ？」

それは小説の都合上。っと言ってはいけないだろうか。

ともかく、謎は解かれることなく、更に彼らの搜索作業は続く。

作業は三日三晩続き、彼らの体力は限界に近づいてきた。

そして、ついに最後の一冊を読みきった。

「どうなってるんだあ！！なあんにも出てこないぞあ！！」

全部で何千冊あったのかわからないが、悠真の頭は既に爆発していた。レイズは冷たい水を彼に渡して、うちわで風を送る。

「もういいですよ。私はこの世界に来て、仕事をしながら命尽きるのが宿命となっっているんです。だから、そこまで貴方が頑張らなくても」

「命を簡単に捨てる奴は俺、嫌いって言っただろ？」

聞きなれない彼の低い声音にレイズは息を飲む。本に埋もれかけていた紫は、身を起こして隈のついた目を悠真に向ける。

今、微かに彼の周りの空気が揺れ動いた気がした。ふと、隣りに視線を向ければ伯鳳の不敵な笑みが覗く。

やはり

しかし、彼はその顔を規則的に揺らしていた。紫は額に青筋を浮かべて彼の頭を驚掴^{わしづか}みする。ミシ、っと嫌な音が聞こえた気がしたが、そこはあえてスルー。

「無駄ですよあ。伯鳳様は一度寝てしまったら気が済むまで起きませんからあ」

「知っているからやっているんだ！寝ている間に逝け！！」

流石^{さすが}の悠真も止める体力と気力が残っていなかった。

とりあえず今日は疲れを癒すために睡眠を取ることにした。レイズが言うにはまだ少し時間があるらしい。その間に何とか方法を見つければいい、と紫が悠真を説得したのだ。

ぼーっとした頭で考えても仕方なかったので、悠真も納得するしかなかった。

辺りは真っ白だった。身体が浮くような感覚に襲われて、悠真は首を傾げる。

白い霧もやの中に浮いているようだった。目を凝らしてみれば、奥に人影が見えた。ゆっくりと近づく。一步、歩く度に足に地面とは違う感覚が走る。

「紫ちゃん？」

そこにいたのは見たことのある三つ編みの青年。悠真が呼びかけても何の反応も示さない。

突然景色は一変して、霧は消えて暗闇に包まれた。真っ暗になるはずなのに悠真と紫の身体だけ綺麗に見える。

「ねえ、紫ちゃん？」

何故か妙な不安に襲われた。紫の手を掴んで、叫ぶ。しかし、彼の手は簡単に抜けていき、そのまま遠ざかって行く。一度も悠真の方へ顔を向けずに。

「ちよ、待って!！」

追いかけてやうとしたが、何故か足が氷のように冷たくなり、動け

なかった。手だけを懸命に延ばし、呼び止める。

「待って！何で行っちゃうんだよ！」

不安が押し寄せる。小さくなる彼の背中を凝視して、声を震わせる。

置いてかれる、捨てられてしまう、そんな味わったこともない未知なる恐怖に背筋が凍る。

「行くなっ！紫！！」

彼の名を張り叫んだその時、紫は突然足を止める。やっと振り返って、見せた顔は冷たく感情もない顔。心臓が大きく鳴った。思わず言葉を失って、茫然としてしまう。

「お前には力がある。……………それを忘れるな」

「え？」

「それって、どういっ……………」

突然、感覚が戻る。視界に入る景色も変わり、紫の姿はなくなつた。見覚えのある天井は悠真に与えられた寝室のもの。しばらくそれをぼんやりと見やって、息をついた。

「夢、か」

起き上がってベットから腰を浮かせる。意味深な夢に思わず苦笑

する。あれが夢でよかったと心から安堵したのと、紫が言った意味が理解できないもどかしさが入り混じって。

たかが夢にそこまで気にしていても仕方ないので悠真はすぐに考えるのをやめた。

「レイズ、大丈夫かあ？」

レイズの部屋の扉をノックして、悠真は部屋に入る。レイズはベッドに寝ていた。彼の声に何の反応も示さず、静かに横たわっていた。

「レイズ？」

小声で呼びかけて彼女の顔を覗く。彼女は真っ青な顔で苦しそうに胸を押さえつけていた。

「レイズ!!!」

すぐに彼女の身体を起こして、悠真は呼びかける。この前と同じように悠真が触れた途端、すぐに顔色はよくなった。しばらくして彼女はゆっくりと目を開ける。

「悠真さん？」

「もう、無理だよ。いくら俺に触れば少しだけ楽になったって、それはほんの一時にしか過ぎないんだろ？そんなの、何にも意味ない！」

荒い息を整えながらも、彼女は必死に笑顔を作る。声はまだ辛く出せない代わりにその顔で悠真に訴えた。まだ、大丈夫と。

「駄目だ。一日でもいい。力を一切使わないようにしろ！」

「…………でも、そんなことしたら」

「その間、俺がレイズを抱えて妖怪から、他の人達から逃げてやるから」

それはそこらにいる妖怪だけではなく、それを反対している紫達からも逃げるとのこと。強く握られている手の痛みより、その方が衝撃的で目を見開いた。

今まで信じてきた者を裏切ってまでも、レイズのために逃げると彼は言い張るのだ。

「どうして、そこまで？」

「そんなの、ほっとけないからに決まってるのだろ？」

悠真は無言を言わずにレイズを背負う。全く音がない、それは皆がまだ寝ていると判断して悠真は自分の部屋に連れて行く。

どうしてこの人は……………こんなに優しいの？

この世界に来て初めて味わう優しさに、レイズは彼の小さな肩で涙する。

鶴は今カップに注いだばかりの抜殻茶を口にして、動きを止めた。可愛らしい大きな目を細めて、耳を澄ますように気を集中させてい

た。その様子に伯鳳も視線だけ彼女に向ける。

「何だ？どうかしたのか？」

寝起きで機嫌が悪いのか、寝癖の残る頭を掻き^{むし}ながら紫は問う。鶴は一つ盛大な溜め息をついて、珍しく真剣な面持ちで答える。

「悠真さんとレイズがこの城から気配を消しました。同時にこの世界の魔力を中和させていた天力の気配もなくなりました」

「なっ！！」

「やれやれ、いつかやるとは思っていたが、こんなにも行動が早いとは思わなかったな」

妙にお気楽に呟く伯鳳に苛つきながらも、紫はそれどころではない。鶴に向かって声を荒げる。

「おい！何処だ？あいつ等は何処に行った？」

普通なら彼の怖い顔に臆するところだが、相手は鶴。彼女は何故か頬を染めて、身体をしならせる。そして、演技臭い言い方で高い声を出した。

「紫さんにこんなに積極的に近付かれるなんて初めてですわ」

「むむ！ずるいぞお鶴！私だってまだそんなドキドキな経験は味わったことがないのだ！」

「ふうざあけえてるうばああいいかあ！！」

伯鳳相手なら飛び掛った紫も、相手が鵠だと叫ぶだけで終わる。彼の怒りは最もなのだが、鵠はふざけた顔のまま彼を説得する。

「落ち着いて下さいな。今、紫さんが向かってても悠真さんの気持ちは変わりませんよ。逆に悪い結果にしかならないと思いますう」

「だが、どうするんだ？」

「ここはあちらから助けを求めに来るまで待つしかないのでは？」

諦めて紫も椅子に腰掛ける。軋む音を聞きながら、深く息を吐いた。

誰よりも悠真を心配している紫はいつも置いてきぼりになっている気がした。

わかってるのか？この城から出るということは、自分の身を危険に晒すということなんだぞ？

一方、そんな紫の気持ちは知らない悠真はレイズを抱えて、必死に走っていた。やはり彼女の身体はやばかったらしく、外に出た瞬間、ぐったりと気を失ってしまった。

そうだった。この森には瘴気が漂ってるんだ。とりあえずこの付近を抜け出さないと。

途中現れる妖怪などまるっきり無視をして、彼はそのまま森を突っ走る。徐々に気持ち悪さが薄れていることに気付いて、安堵した。

しかし、違う理由で不安が過ぎつた。

このまま森を出てしまつたら、もしかして俺妖怪の餌食になるのか？

今頃気付いた彼。やはり馬鹿なのだろう。さーっと顔が青くなる。だが、今更引き返すわけにも行かず、足はそのまま森の外に向かつている。

後ろを振り返れば城は初めて見た時と同じくらいに遠のいていた。

「あ、抜けた！」

瘴気からも、薄暗い森からも抜け出した瞬間、彼の身体に感じたこともない負荷がかかった。その力の大きさに膝が碎けて、地面につく。

「何だ………、これ!？」

彼の視界に入ったものは、いろんな色の空気が入り混じつた異様な光景だった。

「いけませんわ。悠真さんが森を抜けました」

「それがどういけないんだい？お鶴」

「この城の周りには妖怪が少ないからあまり気がつきませんでしたけど、森の外の妖怪から漏れた魔力があそこには充満しているはずです」

つまり、レイズが力を失い始めた影響は既に森の外の妖怪には出始めていて、更に彼女が気を失ったことで更に魔力の濃度が増しているのだ。そんな所に悠真が飛び込んだ。

「やばいな。あいつが食われる」

魔力が充満した世界にいる妖怪はその力に酔って、力が倍增する。そんな中に餌が飛び込んだのだ、悠真がどんな運命を辿るか容易に想像できる。

「仕方ないなあ。行くとするかお鶴」

「はい、伯鳳様」

二人が立ち上がった瞬間、紫は一足先に城から飛び出してしまった。予想通りの行動に二人は驚くわけもない。

「行っちゃいましたねえ」

「悠真君も紫君も本当に鈍感だよねえ。あの子を生かして、この世界の安定も保てる方法が一つだけあることに気付かないんだからね」

二人は紫が向かったことに安心したのか、それともあまりやる気がしないのかはわからないが、ゆっくりとした足取りで部屋を出て行った。

悠真はレイズを抱き締めたまま後退りする。しかし、後ろから感じる気配を察して、その足を止める。辺りは魔力が充満して、心な

しか気持ちが悪くなっていく。

内心で舌打ちしながら今の状況を呪う。すっかり二人は魔力に酔った妖怪達に囲まれていた。

「来るな」

いつもと様子が違う。変な言葉も言わないし、すぐに襲ってこない。フラフラと覚束ない足取りで……………。

ことの異変に気付いて、悠真は冷静に考えようと努力する。だが、彼に打つ手など存在しない。

「でも、これは自分で招いたことだ。他の奴を巻き込むわけにはいかない」

魔力がこんなに充滿してるなんて。もしかして、こいつ等、これのせいで変になってるのか？

『ぐ、わ……………あぎゃあああああ！！！！』

「……………！！！！」

突然一匹の妖怪がもがき出す。地面をのた打ち回り、ぴくぴくと痙攣けいれんを始めた。そして連鎖のように他の妖怪達にそれが移っていく。

「何だ！？」

「魔力が多すぎてそいつ等の容量をオーバーしてんだな」

上から悠真の前に紫が着地した。風に靡くその姿が恰好いいと茫

然と考えてしまった。紫は何も怪我をしていない二人を見て、ほつと胸を撫で下ろしていた。

「ま、これなら悠真を襲うこともないだろう」

「だけど、このままじゃこいつ等全員死んじゃうよ!!」

紫の裾を引つ張って、必死に訴える。だが、彼は冷たい瞳を向けて、低い声音を言い放つ。

「お前、何言つてんだ？こいつ等はお前を殺そうとした奴だぞ？それに、俺にこいつ等を助ける義理なんてない」

「っ!!じゃあ、紫は俺を義理があつて助けたのかよ！」

その言葉に一瞬彼は怯んだ。悠真はもがき苦しむ妖怪に近寄って、片膝をつく。目を細めて、拳を作る。

「ゆ、うま…さん？」

「レイズ!!」

いつの間にか起きていたレイズは酷く苦しそうに胸を押さえて、見えない彼を呼ぶ。悠真は慌てて彼女の傍に行つて、身体を起してあげた。

「…………っ、ここは、駄目です」

「レイズ？」

「魔力があり過ぎるな。そいつには毒そのものでしかないだろう。純粋な天族だから。やっぱりこれ以上生かすのは無理じゃないか？」

息も切れ切れで、苦しむ彼女に悠真は齒噛みする。

その瞬間、彼の中で何かがぶち切れた。

「いくら負の感情を持ってこの世界に来た者だからって、人の命を大事にしない。人が苦しんでるのに、義理はないとか言う理由でほつとく」

「悠真？」

「そんな腐った根性、俺は認めない！！」

薄暗いこの世界をこの瞬間、眩い光が照らし出した。

「あ、伯鳳様、どうやら魔力の充満の件は解決したみたいですよお」

「ああ、見事にやって見せたね」

まだ森の中をのんびりと歩いていた二人は森の外側かわ天に延びる光を見つめて、微笑する。全てを見透かしたように、怪しく。

第五章 脱走（後書き）

最初の方と最近の悠真の台詞を見ていくと、明らかに変な台詞が少なくなってきたですね。それを楽しみにしていた方、すみません。少しずつ元に戻していこうと思います。

第六章 慌しく

頭がくらくらした。自ら出した光に目が眩みそうになって、悠真はふらついた身体でその様子を一瞥した。妖怪達はその場に倒れ伏して、レイズも気を失っていた。ただ一人意識のある紫は茫然と悠真を見つめていた。

肩で息をしている彼はじつと紫を見返して、流れ出た汗を拭う。充滿していた魔力は紫でも感じられなくなるほど薄れて、辺りには清々しい空気が満ちていた。

「これで、いいんだろう？」

既に自分の力に驚くこともなく、当然とばかりに呟いた。力を使い果たして、悠真はふらりとその場に倒れた。地面につく直前に紫がその身体を支える。それとほぼ同時に森から伯鳳と鶴が姿を現した。

「やりましたわね。これで当分は魔力の充滿に悩むことはなくなりましたわ」

「悠真君の優しい心に火がついたんだろうね」

わかりきったような口が気に入らなかったのか、紫は怪訝な顔を二人に向けた。内心舌打ちしたいのを我慢して、紫は一つ息をついた。

「お前等こいつがいつかこれをやるってわかっていたな？」

「わかっていたわけではないぞ。望んでいただけさ」

元々、正義感の強い悠真だった。レイズの純粹さに触れて何の罪もない彼女を守りたいという気持ちに駆^かられ、更には自分の気持ちとは別なことを言う紫に腹を立てた。

それには紫が悠真に行^{おこな}ったことを否定したと思ったことも関係しているが、一番の理由は自分が掲げている信念を否定されたからだ。その時の悠真の気持ちは貶^{けな}された怒りよりも、嫌なことを考えさせないようにしようという正の気持ちだった。

「悠真さんは言うてできるような人ではないですからね」

「そうだと、単純だが、難しい扱いだよ。彼は」

「だけど、こいつ自分がこの力使えたことに驚いてなかったぞ？」

紫も伯鳳も鶴も、誰一人として今の事実には驚きはしない。しかし、彼が自分の力に疑問に思わなかったそれだけは少し興味深げに目を瞠^もった。彼はどこか抜けているため、事態をいつも読めない傾向があった。それなのに、今回はその反応が見られなかったのが不思議なのだ。

「とりあえずお二人を城に運びましょう」

「そうだな」

「あ、紫君！ちゃんと悠真君は横抱きで抱いていくんだよ」

「何でだよー！」

「そっいいながらも既に横抱きですよ、紫さん」

茶々しながらも三人は二人を抱えて城に戻る。悠真が放出した天力のせいで、森の霧さえも少し晴れていた。珍しい現象をまじまじと見つめながら、紫は思案する。

命の大切さか……………

理解できない悠真の言葉を悶々と考える。負の感情を持ってこの世界に来た紫は未だに正の感情を掴み損ねていた。

「わあ！！俺が暴走して力を使ったら、紫ちゃんが乙女になっちゃった！！」

「何っー夢見てんだテメー」

彼が普通に突っ込んだのに安心したのか、悠真はほっと息をついた。いつの間にか与えられた部屋で寝かされて、しかも何故かその部屋に全員集合していた。

窓の側に設置された小さめのテーブルでお茶を楽しむ伯鳳と鶴。ベット脇に座っている紫にその隣でフヨフヨと浮いているレイズ。未だにこれだけの城にこの四人しかいないことに疑問に思いながら悠真は頬を搔いてその様子を見つめていた。

「ん？」

「覚えてないとか言うなよ？」

「えっとー、俺が天力を使ってえ、死んだ？」

「悠真さんはここにいないじゃないですか」

あ、そっかと苦笑して紫を見る。いつもよりも何か怒りを含んだ瞳にたじろいだ。身構えていると紫は少し視線を落として小さな声で呟いた。

「悪かったな」

「へ？」

「お前を怒らせるようなこと言って」

度肝を抜かれた悠真は口をあんぐりと開けたまま動けなくなった。珍しく伯鳳と鶴も目を真ん丸くして紫を見つめる。その間抜けな顔に苛ついて、彼の顔は怒り顔に変わっていく。

「そんな顔するならもう言わないぞ」

「いや、別にただ驚いていたただだから！別に、わかってくれたならいいよ。誰も傷つかなかったわけだし」

明るい笑顔で答えて悠真は簡単に許す。その笑顔に何かを感じて、紫は息を詰めた。

顔を伏せて、拳を作る。彼の様子を訝り、悠真は顔を傾げた。

「俺はやっぱり正の気持ちなんか持ってない」

「そんなことないだろ！紫は俺を助けた。そして今も守ってくれている。それは立派な正の気持ちのお陰だろ！……」

きつぱりと言われて紫は言葉を飲み込んだ。まっすぐと向けられた黒い瞳が彼を捕える。悠真は先ほどから黙って様子を見ていたレイズに向き直って、声をかける。

「もう、苦しくないのか？」

「はい。悠真さんのお陰で」

嬉しそうに微笑んだ。そして、安堵した瞬間、他のことを考える余裕ができたせいか、悠真はあることに気付いた。次第に顔を青くして、恐る恐る疑問に思っていることを口にした。

「なあ、そういえば俺元の世界に戻る時、また一年も時間経って帰るのか？」

以前彼が魔界に訪れて、契約を行ってから帰れば、そこは引き込まれた時とは違い、一年も時間が経った後の地球だった。今回もそのようなことになるんじゃないかと不安になり、悠真はうるたえているのだ。

レイズはぱつと顔を輝かせて首を振った。

「大丈夫ですよ。今回悠真さんがこの世界に来たのは前回とは違い特殊な日ではないですから」

「へ？どういうこと？」

「つまりだね、普通なら悠真君がこの魔界に来るには特殊な力を放出している日でなければいけないのだよ！」

自信満々に話し出す伯鳳に苦笑しながら聞く。だが、続きは彼ではなく隣にいる鵜が引き継いで、同じように陽気な声で説明をする。

「悠真さんが最初にこの世界に来た日はハロウィンの日ですわよね？そういつた迷信で騒ぎ立てられる日でも人々の思いで魔力が放出されることが多いんです」

「だから、その日はかなりの魔力が放出されていて、だからこそお前がこの魔界に来れたんだ」

つまり、悠真みたいな人間がこの魔界に訪れるには地球側の方で魔力が放出される限られた日しかないのだ。例えばお盆といった死者のための日や何千人もの人が死んだとされる命日などだ。

しかし、今回彼はそういった特別な日にこの魔界に訪れてはいない。

「今回は私が天力を欲するあまりに悠真さんをこの世界に連れてきてしまったのです。ですから、この前のようになることはありません」

「だけど、それってつまり今度俺が普通に特別な日にこの魔界に来たら、その時こそ一年後にまた戻ることになるってこと？」

悠真がそう思うのは仕方が無い。しかし、紫は軽く首を振ってその意見を否定する。彼の代わりにまた伯鳳が口を開いた。

「考え方は惜しいけどねえ、ちょっと違うんだよ悠真君。その特別な日に君がここに訪れる。そしてここから元の世界に戻る時は来た時と同じ種類の魔力が放出している日に戻るんだよ」

「？」

「つまりはお盆に来たら次のお盆の時に。誰かの命日に来てしまったのならその次のその人の命日に。とそういうわけですわ」

最初に悠真がここに来たのはハロウィンの日。そのため、戻る日は同じ魔力を放出している一年後のハロウィンの日になったというわけだ。

なるほどと納得しているのも束の間、ふと悠真はもう一つの疑問を口にした。

「じゃあ、今回俺はいつ帰れるんだ？」

「地球側の方でなら、この魔界に来た時間とさほど変わらない時間に帰ってきますよ」

「いや、そうじゃなくて。帰るにはどうするんだってこと。前みたいに伯鳳さんがやってくれるの？」

魔界から地球に帰る時、前の時は伯鳳の力を借りて帰った。今回もその方法で帰れるのかどうかを聞いていたのだ。

「いや、今回は時間がくれば勝手に戻ると思うよ」

「時間って、それっていつ頃？」

「さあ？明日か明後日か……早ければ今日中ですね いやあ、大変ですねえ悠真さん」

完全に他人事の物言いに思わず苦い表情を作ってしまう。ふと視

線を紫に戻すと彼はじつと悠真を見据えていた。首を傾げて微笑む。

「自分に自信を持つとは俺言わないぜ。俺は自分に自信なんてないし。だけど、俺が紫ちゃんを信用していることは信じてほしい。今は、それだけでいいから」

「ちゃん付けするな」

いつも通りの無愛想な彼の声音に嬉しそうに笑って、悠真は自分の手を眺めて、目を細める。あれだけの魔力を自分が浄化させたなど本当は信じられるものではない。

だが、今回はすんなりと受け入れることができた。それはあの夢があったお陰かもしれないと微かに思う。

「……あ……」

「ん？」

四人の声が重なると同時に彼の身体が淡く光り始める。それは彼に帰る時を表していた。突然のことに驚いて悠真は戸惑いを隠せない。

「あ？何だ何だこんな最後のお別れの光り方！俺死ぬの？え？天界に？それとも魔界に戻ってくるだけ？あれ？地球帰る前に俺また魔界に戻りますみたいなの？」

「落ち着け！帰るだけだろ。じゃあ、またな」

軽く言われたことが少し寂しい気もするが、悠真は落ち着いて四人に笑顔を向ける。ふと今回紫と距離が離れてしまいかもと不安に

思った時のことを思い出す。

今はこうして笑ってくれている彼が自分から離れていくかと思うだけで不安で堪らなかった。今この瞬間、まだ繋がっているこの関係に感謝して、悠真は手を振った。

「ああ、またな。皆」

彼らしく来る時も帰る時も慌しく、そして元気よく去って行った。

第六章 慌しく(後書き)

はい、っというわけで次の一話で第二シリーズ終了です。学校が始まったことで更に更新が遅れています。すみません。

終章

「うん」

固い床の感触に身じろいで悠真は唸り声を上げる。埃っぽい空気が充滿した場所にいることに気付いて、うつすらと目を開ける。

冷たさを伝えていたのはコンクリートの床だった。目をこすってそこを見渡せば、久しぶりに見る体育館の倉庫の中だった。

「そっか、戻ってきたんだな」

「先輩！何してるんですか？もう体育館閉めるみたいですよ」

様子を見にきたのは同級生だが、年下の原松芳季だった。魔界へ行ってしまった時と変わらない時間帯にいることに感動を覚えて、しばらく芳季の言葉に答えずにその場に立ち尽くしていた。

「先輩？」

「あ、わりいわりい、今行くよ」

倉庫から出て自分の荷物を担いだ瞬間、悠真の懐から何かが軽い音を出して落ちた。

それを芳季が拾い上げると二人とも同時に目を剥いた。落ちたものは女物の髪飾りだった。

「せ、先輩？もしかして彼女でもできたんですか？」

「ち、違うぞ原松！別に俺はそんなものつけて喜んでるわけじゃない

いぞ！本当だぞ！決して女装趣味があるわけじゃないからな」

「へ？」

思った言葉とは全く違うものを口走る悠真に芳樹の目は点になった。しまったというように悠真は額から冷たい汗を流した。

いつまでも体育館から出てこない二人を訝って他の生徒も顔を覗かせた。

「皆、聞いて聞いて！先輩は実は女で好きで女装でわっほいだった！」

意味不明だ。それは彼の混乱をストレートに表していたが、もう少し日本語を話してほしかった。しかし、部活の皆は目を見開いて信じられないものでも見るかのように悠真を凝視した。

「本当ですか！女装は実は好きで、男じゃなくて女に生まれたかっ
たって」

「何で今のでそこまでわかるんだよ！」

「先輩！大丈夫です！先輩ならそのままでも充分女としてやってい
けます」

「嬉しくないわっ……！」

くそお！お鶴さんのせいだあ……！！

彼は魔界へ訪れる度に何かを失っているようではなかった。

そして、また一つ魔界への秘密が彼、ナイトメアに暴かれた。

終章（後書き）

第二シリーズ終了です。

考えてみればこれはいつが終わりなんだろうかねえ？

ま、とりあえず今回は天力を主題とした話でした。

第三シリーズはおそらく紫の過去に迫ります。

ここまでの感想を送ってくださいますとても嬉しいです。これからもよろしくお願いします。

序章

うつそうと、暗い森。クモの巣だらけのその道を歩きながら、彼は深く溜め息をついた。皆様お馴染みの彼、鷹崎悠真は今、何故か樹海に来ていた。

何故この暗い森に来ることになったのか、それは今日の朝の出来事から始まった。

『最近、お出かけしてなあああああい!!』

久々の登場である彼女、鷹崎真澄はいきなり狂ったように叫び声を上げた。いつものことなので誰もさほど気にしはしないが、この言葉の内容には気にせざるをおえない。

この家族の主導権は彼女が握っている。大体の戯言は皆無視をするのだが、仕事の鬱憤^{うつぶん}が溜まり、苛つき始めた時の言葉は逆らうと後でどんな目に遭うのかわからない。すぐにお出かけの支度が始まった。

『何処に行きたいの？お母さん』

言いだしつぺの人の意見を一番に聞かなければならないと思った静真が首を傾げながら聞いた。真澄は頬を赤くして静真を抱き締める。

『可愛い！静ちゃん！あのね、私白糸の滝を見たいわ』

『じゃあついでに氷穴洞や風穴洞にでも行くか』

そうして家族はテキパキと用意をし始めた。

そんなこんなで今は樹海の遊歩道を家族で歩いている。落ち葉でふわふわした道をふらふらとした足取りで歩く悠真はこの状況に溜め息を漏らしてしまったのだ。

何が哀しくてこんな大人数でこんな暗い森を歩かねばならないのか。高校生の男がそう思うのも仕方がない。

「ユーマ兄ちゃん大丈夫？」

「あ？何が？」

「変なところに足がハマってるよ？」

静真に言われて足元を見てみれば確かに落ち葉と木の根っこの間に足を突っ込んでいた。考え事をしていたからと言ってもこの状況はかなり恥ずかしい。

悠真は足を引っ張って取ろうとするが抜けない。

「こいつ！俺に恨みがあるのか？俺は馬鹿だけどそれなりに大人しくこの世界を生きてるんだ！それとも何か？お前はもしかして魔界の住人か！？前世で俺の魔力で燃やされたから復讐ふくしゅうしているのか！」

森の暗さに当てられたのか、悠真は意味のわからぬものを口走る。静真は密かに心配そうな目つきで自分の兄を見ていた。

「ってあー！こらあー！勝手に俺を置いていくなあ！それでも家族かあ

！静真、呼んで来てくれ！」

「えー、仕方ないなあ。じゃあもう少し頑張って自分の足を引っ張ってよ」

静真の後ろ姿を見送りながら悠真は自分の足を引っ張る。こういつた薄暗い森にいると彼はすぐにあの場所を思い浮かべてしまう。常に曇り空で、カラスが鳴き止まない暗黒の世界。妖怪がいる、彼等がいる特別な世界。足の力を緩めて悠真は一つ小さな溜め息をついた。

「元気かな？紫ちゃん」

ぼつりと呟いた瞬間だった。挟まっていた足がいきなり地面側に引っ張られる感覚に襲われた。悠真は突然のことに顔を引きつらせて、身体に力を入れる。しかし、それは意味のないことで。

「おいおいおいおい！！まさかまさかまさかああ！！魔界へドビューンですかああああああ……」

成す術なく彼は再びあの世界へと向かったのだった。

序章（後書き）

第三シリーズです！予定通り今回は紫の過去についてのみ触れさせて頂きます。

そのためそんなに長くはないです。

第一章 柳籠一

薄暗い部屋の中。埋もれそうなほどの本が綺麗に整頓されて棚に並べられた部屋に彼女はいた。綺麗な金髪を揺らして床から天井まである大きな窓に近付いて森を覗いた。

いつまでも晴れることのない空の下、不気味なほど色の濃い木々が生い茂っている。そこに住むカラスが絶え間なく掠れた泣き声を発していた。

「来る」

彼女の背中が淡く光を発した。それは何かを形取り、次第に実体化していく。瞬く間に光は純白の翼へと姿を変えた。

「ゲートを見つけたんですね。悠真さん」

形良い顔が微笑んで、澄んだ声音で呟いた。

一方、同じ建物の地下では人とは違う者の悲鳴が木霊していた。

「うふふ、とおっても美味しそうですわあ」

全身に返り血を浴びた彼女は清楚な顔を綺麗に笑みに変えた。しかし、綺麗過ぎるその顔は逆に恐ろしく、誰も近寄りたくはない。彼女にとって大切な作業の途中、不意に動きを止めた。

息絶えた者から悲鳴は既に聞こえず、その場に響くのは彼女の持つ長いナイフのような赤い爪から滴り落ちる赤い水滴の音だけだった。

た。

「来ましたわ。しかもゲートを通って」

霧の深い森の中、紫がかかった髪を三つ編みにした男は何もせず突っ立っていた。ただ、ある場所をじっと見つめながら。無表情である彼の顔は少し哀しみの感情を醸し出していた。

「あの時お前はどんな気持ちで俺に頼んだんだろうな」

低く、苦い声音で呟いた。強く握られた拳からは紅い滴が零れ、地面に落ちる。淋しそうに向けられた瞳は微かに揺れていた。

「なあ、りゅうい つつ!!」

何かを感じて振り返る。周囲に視線を流して彼は神経を研ぎ澄ましていく。感じるものは少し懐かしい気配。見逃してはいけない存在。

来る、悠真が！

そう思い、走り出そうとした瞬間だった。上から思いがけない荷重がかかり体勢を崩した。無様にも顔から地面に突っ込んだ彼はしばらく何が起こったのか理解できなかった。

だが、あるものを聞いてすぐに察しがついた。

「いたたたた。うわっ！やっぱり魔界へドビューン？！あ、今回初めて来た時に気絶してない！奇跡だ！ってか下が柔らかい……………」

……ぎゃー！！紫ちゃん！！大丈夫？」

不気味な森には似合わない陽気な声が響く。紫は口を引きつらせながら起き上がり、悠真の顔を確認した。

自分のいる場所とは異なる世界に平然として来る彼、そこらは彼が思うものとよく似ている。

「久々！紫ちゃん！」

「ちゃん付けするなって何度言ったらわかるんだ」

久々の再会にそれぞれ挨拶を済ませて二人は魔王のいる城に向かった。途中形状のわからない妖怪に襲われたが紫が燃えつくしてしまった。

「やっぱりここは変わらないなあ」

「そんなに簡単に変わるかつ！ここはあくまでも負の感情を持って死んでいった者達が来る世界だ」

魔界、それは人以外の者が負の感情を持って最期を迎えた人達の世界。そんな世界に人間であり、生きているはずの悠真が来れるのはそれなりの事情がある。

それは彼がナイトメアだということ。
彼の魔力が魔界の波長と同じこと。

「なあ、紫ちゃん、俺どうして今回こっちに来たんだ？」

「さあな。そのことについては伯鳳とかに聞いた方がいいな」

いつものように罫だらけの廊下を渡り、暗い中無言で進んでいく。城というだけあってかなり目的の部屋まで距離がある。

「うーん、よくこんな所に三人で暮らせるよなあ。淋しくないのか？」

「そんな感情あいつ等にあると思うか？」

一瞬悩んでしまった悠真。しかし、すぐに思い直して口を開こうとした瞬間、地下に通じる階段から短い緑色の髪をした女性が姿を現した。

「あらあゝ結構お早いお着きでしたわね 久しぶりですう」

「お、お鶴さん！そ、そ、それはつつー！！」

悠真が震える手で指差すのは点々と彼女の服についている赤い染み。鶴はにっこりと無邪気な笑顔を向けて明るい声で言った。

「何って返り血に決まってるじゃないですかあ！安心してください、私の血ではありませんからあゝ」

陽気な声でそんなことを言う彼女。おそらくここに伯鳳がいたらお茶目だと言っただろう。想像しただけで貧血を起こし、悠真はふらつく。一步、足を踏み入れたその場所は不自然に傾き、彼の目の前に矢が飛んできた。

「あ、あつぶねー！」

「そろそろ学習しろ。この城で迂闊な行動は命取りだぞ」

悠真は肝をすっかり冷やして二人と一緒に二階へ上がる。暫く歩くとパタパタと可愛らしい足音を響かせて金髪の天使は彼等に笑顔を向けた。

「悠真さん」

「レイズ！久しぶり！」

抱きつかれて悠真は倒れそうになるのを必死に堪えた。瞬間、周囲の空気が浄化されたような気がして悠真は目を丸くする。流石天族というだけあって正の力が強い。

悠真はゆっくりとレイズを下に降ろす。見た目はほとんど変わらない彼女だが、一つだけ変わったことがあった。

「羽しまったのか？」

「うん。出している意味はなかったから。それよりも悠真さん、ゲートを見つけたんですね」

聞き慣れない言葉に悠真は首を捻った。ゲート、つまり門を彼は見つけたのだと彼女は言った。それは一体何の門なのか。

悩んでいる間にやっと理解した紫が目を瞞ってレイズに食いついた。

「そうか、今回はゲートを通ってきたのか！」

「はい。悠真さんは今日、ここに通じるゲートを見つけたんです」

「ここって、魔界の？」

「そうですね、悠真さん！これでその気になればいつでもここに来れますわぁ」

思いがけない言葉に悠真は口をあんぐりと開けて、顔を真っ青にした。ゲートとは、この魔界と悠真の世界を唯一常に結ぶ限られた門のこと。

「うそおおおおお！！！」

魔界に行く。

それができるのは悠真みtainな特殊な存在だけ。

その存在がこの世界に行く方法は三つある。

- 一つ、魔の力が作用する特別な日、特別な門を通る。
- 一つ、魔界を支持する者が呼び寄せる。
- 一つ、ゲートを見つける。

ゲートとは魔界に行くための門の事。

今まで悠真みたいに契約までこじつけたナイトメアの存在は無かったため、定かではないが、そのゲートはよっぽどの理由がない限り場所を動くことはないという。

門と言ってもやはりナイトメアしか通すことはない。

「はぁ、そんな迷惑な物が俺の世界にあるなんて」

うんざりした表情で悠真は入れられた紅茶をすすする。既にそれが抜殻茶ということは頭の中から消し去っている。

「その代わり、ゲートから来たら時間の経過はなく元の場所に戻る
ことができますよ」

「ああ、そこだけいいことね。何かこんなにファンタジー的な世界
に何度も行くと伝説の生徒会長に申し訳ない気がしてきた」

生徒会長という名前に紫が珍しく反応を見せて、身を浮かした。
きよとんとしているレイズを見て、悠真は素早く説明を付け足す。

「ああ、生徒会長つてのは俺の学校のハロウィンパーティーを無理
やりに作らせたことで有名な人のことだよ」

「へえ、すごいことですねえ。なかなかその人は見込みのある人な
んですね」

そうだなあ、本当に俺よりもその人がここに来た方が良かったんじ
やないのかなあ？

そう思ってしまうところが何だか切ない。レイズは未だに首を傾
げて聞いている。何かに違和感を感じているのかと思い、悠真を同
じく首を傾げた。

「その人の名前つてなんていうんですか？」

「ああ、生徒会長？えーと、確か……………柳…龍一だっけかな
？」

聞き覚えのある名前に紫が目を瞞った。三人がその龍一の話に花
を咲かせている間、紫は思わず部屋の扉に向かう。しかし、その行

く手は新たに現れた者に塞がれてしまった。

「それは一番最初にこの魔界へ現れた人間だね！」

「伯鳳さん！」

「あ、伯鳳さまあ、一体どちらに行かれてたんですかあ？」

「ん？ちよつと野暮用でね。それにしても一番最初にこの魔界へ訪れた人間と悠真君が関係していたとは驚きだね」

ふと、その言葉の意味を理解して、悠真は目を丸くした。

一番最初に来た人間が会長。

自分に似ていて、似ていない存在が自分の知る人物。

はつと何かを思い出して悠真は紫の姿を探す。しかし既に部屋には姿はなく、レイズ、鶴、伯鳳の三人しかいなかった。

「紫ちゃん！！」

他の皆のことは一切無視して、悠真は部屋から出て行った。既に影のない紫を追って走り続ける。

「あーあ、行っちゃった」

「わかってるんでしょうかねえ？」

「何がですか？」

二人の言葉の意味が良く理解できないレイズは不思議そうに問う。伯鳳はにっこりと紳士的な笑顔を向けてあっさりと答えた。

「この城には沢山の罠があることをだよ」

「ゆうかありいちゃあんなんんんん！！」

森の果てまでも聞こえそうなほど大きな声で人の名前を呼ぶ。しかし、何の反応も返ってこない。高速で足を動かしていたため、自分の足に引っかけり、廊下に転がった。

刹那、重い音と共に床が動く。床は壁に吸い込まれていく。

「待て待て待てええええ！！何だこのエスカレーターで転んで吸い込まれそうになっている状況！！！」

立とうにも床の動きが急激過ぎて、バランスがとれない。そろそろ本気でやばく感じ始めて、悠真は青い顔でさらに大きな声で叫んだ。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待ってええええええ！！こんな展開は嫌だああ！俺はなあ、できる限り長生きして、隠居して畳の上で後悔はなかったと笑って死ぬのが夢なんだあ！！！」

「何でお前は毎回毎回よくわからないことに巻き込まれてるんだ！」

間一髪のところまで紫が登場し、悠真の襟を掴んで動く床から逃げ切った。茫然とそれを見やりながら悠真は苦笑いをする。

「どつやったらあんな罠ができるんだ」

「そんなこと追求してもいいことは何も無いぞ」

そうだなと納得して頷き、また何処かに行こうとした紫の服を掴んで止めた。紫は無理やりに逃げることはしないが、悠真を見る目は何かを訴えていた。

「柳、龍一」

「……………」

「変なところで接点あったんだね。ねえ、聞いちゃ…駄目なの？その人と何があったのか」

暫く無言の見つめ合い。

人の過去を追求することはあまりしてはいけないと悠真も理解している。だけど、紫に対してはそう割り切れるものではなかった。

「何で、お前に」

「俺は、紫ちゃんにとって……………紫にとってただの荷物？紫が俺を助けるのはその人と何かあったからじゃないの？」

意外な言葉に紫は驚いた。

何もわかっていなそうで、肝心な部分は的確についてくる。こういうところが似てるのかもな。

一回、目を閉じて考える。ここまできて逃げ切れるとは思わなかったのか、紫は一回深く息を吐いた。

「仕方ないな。教えてやるよ」

「俺の闇を」

第一章 柳籠一（後書き）

少し文章的な間違いが多いかもしれませんが。

生徒会長「最初のナイトメア。皆さんの頭の中ではこの公式が描かれていたでしょうか？」

次はやっとな紫の過去に迫ります。

第二章 二十年前

霧が濃い森の中、紫がかった青い髪をした彼は眠りについていた。少し癖のあるその髪は首元まで伸び、鼻の辺りまである前髪の間隙から覗く目は眠っていてもわかるほど切れ長で男らしいものだった。年中季節など関係なく、常温で曇りのこの世界。しかし、この日は珍しくいつもとは違う風が流れた。

前髪がその風で揺れて、彼を起こした。

「何だ？」

起き上がると、地面に散らばっていた落ち葉が彼の体にくっついて落ちる。そんなこと気にする様子はなく、彼はそのまま立ち上がった。見るからに普通の人間に見える彼だが、髪の間から覗くのは黒い毛に覆われた獣のような耳。

「この世界の空気が変わった」

彼は二十年以上前の紫。

気付けば、ここにいた。

ズキズキする頭を押さえて、彼は起き上がる。そこには見たこともない森が目の前に広がっていた。カラスの鳴き声がすぐく耳障りで、雲が空に広がり、暗いのも含めてすっきりしない所だった。

しかし、彼は逆にテンションを上げていた。

「何だ、ここ！やべー、すげー！」

何がすごいのか分からないが、彼は目を輝かせてその場所を見渡した。

彼は学校で行われるハロウィンパーティーに向かう途中、外国製の街灯を見つけて、それに触れたことによりこの世界に訪れた。気絶して気がつけば見たこともない場所。

それは不思議現象が好きな彼には堪らないくらい興味深いことだった。

「まさかここが伝説の異世界！」

拳を作って熱く語る。一体何処で伝説になったのか、おそらくそれは彼にしかわからない。

彼はまず真っ先に目に入った森へ入ってみようと足を動かした。本当にここが自分の世界とは異なっていることに気付いているのか定かではないが、その足取りに迷いは感じられない。森へ足を踏み込もうとした瞬間、彼の足は不意に止まった。

視界には霧に包まれた森だけでなく、見たこともない大きな建物、つまり城が見えた。

「城っ！マジで？そんなもんあるのか、この世界は！やっべー、見ちゃったから探検しないとっ！！」

一体どういう理屈で動いているのか、彼は更にテンションを上げて森の中へ突き進んだ。

薄暗い森の中には見たこともない生物の死骸が転がっている。流石の彼もそれには無言で見つめることしかできなかった。いや、何かを口にしようとしても、言葉が出てこないのかもしれない。

はわあ、本当に俺異世界に来たんだ。
こんなに早くそんな実感ができるようなもの見ちまったぜ

ある意味で言葉が出なかつたようだ。とにかく彼は怯えることは一切なく、順調に足を進めていた。次第に霧は濃くなり、死骸の数も減ってきた頃、彼の身体に異変が起きる。

急に足の力がなくなり、膝が折れた。

「何だ？」

先ほどまでは全然元気だった身体は、いつの間にか体力の限界を感じ始めていた。息は上がり、全身に寒気が走る。明らかに身体に異常が起きていた。

「何だ、これ」

一体何が原因なのか彼は知らない。酷い風邪をひいたような悪寒は消える気配は全くなって、逆にだんだんと酷くなっていく。眩暈まで起きてきた瞬間、周囲から異様な叫び声が聞こえた。素早く視線をそちらに向ければ肉が溶けたような皮膚をした化け物がそこに佇んでいた。ひしゃげた口からよだれを垂らしてじっと彼を見つめている。そのギョロギョロした目に初めて彼は恐怖を覚えた。

「……………、こいつ」

何だ？

初めて見る生物に身体が動かない。徐々に距離を縮めてきていることは理解できるが、身体が本調子でないことと、恐怖が重なって彼から動きを奪ってしまっていた。

「魂……………、人間……………」

「？」

苦しそうに呟いたその内容に眉をひそめて、彼はやっと足を動かした。しかし、歩いていく方向は化け物の所。肩を上下させながら妖怪を見やる。

「俺の魂が欲しいのか？」

「人間、魂、旨い」

「そうか。なら、やるよ」

そつと手を出して彼は微笑む。普通なら逃げ出してしまっほほど恐ろしい姿をした相手に、素性も知らない相手に、自分の魂を差し出した。

しかし、その瞬間目の前にいる化け物が一瞬にして青い炎に包まれた。びっくりしてそのまま尻餅をついたが、かなり近くにいた彼の所には何も熱さなど感じなかった。

「お前、馬鹿か？何いきなり妖怪に自分の魂投げ出してんだよ」

「！？」

背後から聞こえた新たな声に反応して彼は振り返る。そこには先ほどの炎と同じ色をした髪を風に揺らした青年が立っていた。瞳は何も映さない漆黑。しかし、それを向けられているのは間違いない。彼だった。

「あなた、誰？」

「……………俺は紫。この世界の住人、妖怪だ」

「あなた、人じゃないのかっ!？」

驚いているが、やはり彼の手は拳を作ってガッツポーズだ。紫は少し眉を寄せておかしな反応をする彼を凝視した。

「俺、柳龍一。よろしく!」

陽気に差し出された手を握ることはなく、紫は視線を動かさないまま呟いた。

「お前がナイトメア?それにしては全く力を感じないな」

「?」

言われていることが理解できず、龍一は首を傾げる。紫はさらさら説明する気などないらしく、無視してその場の状況を把握する。

「お前、今体力なくなってるな」

「あ、うん。何?この現象はやっぱりこの世界に関係あるのか?人間ではこの世界生きられないとか!俺の心はこの世界に合わないとか?ってか、ここって何の世界?妖怪とか言ってたから、妖界?あれ、すげー安易な名前だっ!」

息つく暇も無いくらいのマシガントークに紫は口を引きつらせ

た。人間とは皆こんなのかと、間違った認識を後一步でされそうだが、黒い髪を揺らして楽しそうな顔を向ける龍一が紫は不思議でならなかった。

「この世界のことを知っても、意味のないことだ」

どうせ、お前はすぐに死ぬからな。

この森に長くいることなどできない。いつか、妖怪に喰われて死ぬだけだから。龍一は一瞬遠い目をしたが、すぐに気を取り直してにっこりと無邪気な顔を作る。

吸い込まれそうなほど綺麗な黒い瞳を見て、一瞬紫はやはりこの世界の住人とは違うことを悟る。

「なあ、この先に城あるだろ？そこ行ってみたいんだけど」

「何しに？」

「そんなの決まってるだろ！探検さ！探検！」

いつまでもお気楽な考えの持つ彼に苛つきを覚えながらも、紫は目を細めて思案する。妖怪に追い込まれても力を使えなかった彼はおそらく思ったよりも強い力を持っているわけではない。それならば、力尽きるのもそんなに遅くないだろう、と考える。

「別に案内してやってもいいけど」

「マジで？よし、行こう行こう！」

紫を急かして彼は城に向かって歩き出す。ただの遊び心でしかこ

の世界を見ていない龍一に紫は失笑する。

「ただ、真実が見れていなかったのは龍一ではなくて…。」

「あいつは最初から怖いもの知らずで何事にも動じなく、逆に興味を持って自分から突き進んでいた」

屋根の上で紫は静かに語る。微風を感じながら悠真はその話に耳を傾ける。

柳龍一とは学校の伝説でしか聞いたことのない人物だから、実際にどんなことをしていたのかは初めて聞くことになる。想像以上に不思議なものが好きだったんだな、と苦笑交じりで聞く。

「一緒にいる間、ずっと馬鹿な奴だと思った」

森の霧が人間の身体に害になることは当時紫にも把握していなかった情報。しかし、人が魔界にいる時点で既に命がないことに等しい。そんなことも知らないで龍一ははしゃぎ、楽しんでた。それが紫には愚かなことにしか見えなかった。

悠真は曇った空に視線を向けて目を細める。その下には霧に包まれた暗い森。龍一と紫が始めて出会った思い出の地。

「俺さ、何か会長は…何も知らなかったんじゃないかって、何も気にしなかったんじゃないかと思うんだけど」

その場の状況など何も知らない悠真。今、紫から話を聞いただけ

の悠真。だけど何故か彼は核心に近い答えを導き出す。紫は目を見開いて悠真を見つめる。その反応の意味を掴めなかったのか、悠真は首を傾げた。

「やっぱり、何処かお前等似てるな」

「え？そう？俺、あんなにこの世界にはしゃがなかったぜ！」

そう、あいつは気付いていなかったじゃなくて。

「なあ、紫ちゃんって生きてるの？」

「……………」

いきなりちゃん付けで呼ばれていることに紫は顔をしかめた。しかも軽いノリのところが更に質が悪い。ぎつと鋭い睨みを彼に向けてるが、龍一は気にする様子もなく懲りずにもう一度言った。

「ねえ、紫ちゃん！」

「ちゃん付けするなっ！ここに居る者は皆死んでる」

「あ、やっぱり？じゃあ、ここは魔界とか言う所？」

「そっだ」

うーん、じゃあここにいるのは皆悪い人？つと、ぼんやりと呟く様を見て、頭が悪いわけではないと少し思い直した。チラリと隣り

を盗み見れば彼の顔は少し青くなり始めていた。

魂がこの世界に合っていないのか？いや、そんなはずないよな。

ナイトメア、それは魂の波長がこの魔界に合っている者のこと。

魔界との相性が悪くて具合が悪くなることはない。

「なあ、紫ちゃん」

「……っ」

「何か聞こえないか？」

未だにちゃん付けする龍一に怒ろうと口を開けたが、その後には発せられた言葉にはつととする。気がつけばそこには既に数体の妖怪がいた。かなりの奥まで入っていたので妖怪の状態は見たものではなかった。形状などわからないくらいどろどろとなり、異臭を発している彼等はそれでも何かを必死に求めて龍一に近づく。

紫は舌打ちをして龍一を抱えて思い切り地を蹴った。あつという間に今の妖怪は見えなくなり、更に城からも離れていった。

「凄い凄い！はえー！紫ちゃんて人間じゃないとしたら動物？その耳からじゃ何も思いつかないけど、俺的に猫ならいいな」

「はあ？俺は黒ヒョウの化身だ」

「じゃあ、似たようなもんだね」

容易な考えに調子を崩しながら、紫はそのまま森から抜ける。あまり妖怪が近寄らないとされているある湖の脇にある大木で龍一を

降ろし、一息ついた。

「へえ、魔界にもこんな綺麗な場所があるんだね」

「そうだな。だからここにはあまり妖怪は近寄らない」

透き通った水を眺めながら龍一は笑う。紫は森の中にある妖怪達の気配を探りながら、少し難しい顔をした。人間の魂は妖怪達にとって極上のおやつ。それを追い求めて魔界中の妖怪達が暴走を起こしている。

このままじゃ…。

「……………魔界が危ない？」

いきなり言われた内容に紫の思考は停止した。湖を見ていた龍一はゆっくりと紫の方へ顔を向けた。何も知らない好奇心旺盛な彼。そう思っていた彼の顔は何もよりも強く、全てを見透かしたような瞳をしていた。

「紫が俺を助けたのは、俺の魂が欲しかったからだろ？」

第二章 二十年前（後書き）

一気に話が進みました！柳龍一さんです！あれ、一話で終わらなかつた（汗）まあ、いや。

次はちよつとだけいい話？になります。つてか哀しい話？どつちでしよう？

まあ、いや。楽しみにしてくださいね！

第三章 会長の想い

陽気な性格をして、お人好しの彼。自分とは異なる世界に来て、驚くことも無い、怯えることもない。それは鈍感じゃなく、揺るがぬ心を持っているから。

「お前」

「俺の魂があんたら妖怪にとってどういったものかは知らないけど、そうなんだろ？」

儂く笑う。その顔は決して愚か者の表情かおではなく、全てを悟った顔。紫は目を睨ってその姿を見ることしかできなかった。

「どうして」

そんなことがわかる？

問いかける言葉は途中で途切れる。それは彼が笑みを深くしたからだ。

言葉を投げかけることも躊躇ためらってしまふ、その穏やかな表情。正直、紫は恐ろしくなった。全てを知りつつも、全てを悟りつつも、それでも妖怪を恨まず、それでも紫に笑いかける龍一が不思議でならない。

「なあ、紫。はっきり言ってくれ」

ふざけた口調もない彼のその言葉に何故だか身を震わせた。にっこりと未だに笑ったまま龍一は言葉を繋げた。

「俺、ここにいるとヤバいんだろ？」

人間なんて、ただの餌だ。そう思っていたはずの紫は、餌であるはずの彼に心を揺らしていた。その様子に龍一は初めて表情を無にした。視線を落として湖の方に顔を向ける。

風が彼の黒髪を揺らす。

「何で俺がここに来れたんだろうな。まあ、嬉しかったけど」

「それは……………」

「紫。お願いがあるんだ」

振り返って龍一はまた元の笑顔を紫に向けた。びくり、と肩が震える。

この世界では見たことのないその表情。しかし、昔どこかで…。彼の記憶の中でこの顔と同じようなものを見たことがあった。

「な、んだ？」

「俺の魂、お前が喰ってくれないか？」

残酷な言葉。被害に遭う人が決して言わない言葉に紫は息が止まりそうになった。何もかも悟ったその微笑みは、死を受け入れた時の顔。愕然と立ち尽くして紫は龍一を凝視する。

その間にも森の方では妖怪達が我を忘れて共食いを始めている気が配が感じられる。このまま龍一がここにいればおそらく人の姿を保てる妖怪以外は全てこの世界から消えてしまっただろう。

「俺がここにいるとこの世界の安定が崩れるんだろ？なら、俺は紫に殺されたい」

たとえ自分の魂を食べようとして助けたのだとしても、この世界で初めて会話をした、彼に。言葉が見つからない紫は口をただ開閉している。

「早くしないとっ、なあ紫！」

そう叫んだ瞬間、森の方から物音が響いた。そちらに顔を向ければ緑色をしたスライム状態の妖怪が龍一に向かってきていた。

紫は咄嗟に右腕に炎を宿し、妖怪を燃やした。

「ここまで、妖怪が？」

「ほら、皆苦しんでる。紫、お願いだ。このままじゃここが危ない」
真っ直ぐな瞳が紫を射抜く。

「い、嫌だ」

はっとして口を塞いだ。自分でも思いがけない言葉に紫も驚愕を隠せない。龍一は最初目を見開いていたが、すぐに笑みを戻して龍一は紫に近づく。

「ありがとう。紫は、優しいな」

「　　っ！おい！」

「紫」

真剣な話をしている時、彼は紫をちゃん付けするのをやめている。それが紫の口を開かなくさせていた。笑みを消して彼の顔は本当に強いものになる。

「お願いだ。お前しかいないんだ」

彼は今、この世界の妖怪のために命を絶とうとしている。やっぱりそれが不思議でならなくて…。

紫は初めて彼から視線を外して覚悟を決める。

「それで、本当にいいのか？」

「ああ」

紫は右手に青い炎を宿す。真っ黒な龍一の瞳にその炎が綺麗に映っている。力を入れて一際大きくした炎を紫は思い切って龍一にぶつけた。

「ありがとう」

「そして俺は残った龍一の魂を喰って、力を強くした」

「……………」

「最期にあいつは何を思ったのか初めて力を使ってその場所、湖の場所を消滅させた」

「え？」

思いがけない言葉に悠真は少し驚いた。確かにこの魔界に訪れてから湖などという場所を一度も見たことがない。

紫は目を閉じて言葉を切った。まるで昔の傷の痛みに耐えているかのように。その姿に悠真は表情を暗くして龍一という人物について思案する。

初めて紫ちゃんが心を揺らした相手。

一体彼が何を思い、何を考えて、その決断をしたのか。彼がいなくなった今となっては何もわからない。しかし、何故か悠真はわかるような気がして、思考を深いところまで落としていく。

「やっぱりわからないな。会長が何を思ってたかなんて」

「何を馬鹿なこと考えてるんだ」

「でも、幸せだったんだろうな」

思いがけない言葉に紫は目を剥いた。悠真はそんな紫に気付かず、言葉を繋げた。

「自分が望む死を、それでも送ることができたから」

「どうしてそんなことがわかる？」

「……多分会長はこの魔界に来た時点で自分がもう生きられないことは理解してたんだと思う。だから妖怪に自分の魂をあげようとした。だけど、そんな時に紫に救われた。たとえそれが魂を手に入れるためだったとしても、他の誰かに殺されるくらいなら魔界に来て初めて会話した紫に、殺されたかつたんじゃないかな？」

魔界にいた時間は一時間弱。魔界のことも、自分のことも、何も理解しないうちに死だけを悟り、彼は紫に殺されることを選んだ。理不尽に得体の知れない妖怪に殺されるよりも、自分が選んだ人物に殺される方が幾分かマシだろう。

悠真は笑う。その顔がああの時の龍一の表情にそっくりで紫は息を飲んだ。

「でも、一番の誤算は、紫が会長に心を許してしまったこと」

「……………!?!」

「会長は紫に餌として見られているから、頼もうと思ったんだと思う」

「だけど、紫は拒否をした。龍一にとってそれが一番の誤算で、一番辛いこと。それでも彼はもう時間がないことを察して、必死に紫に頼んだ。」

「本当は少しでも自分の存在を覚えてってくれる人を作りたかったんだと思う。だけど、予想以上に紫に悲しみを与えてしまったから、だから……………その場所を、哀しい過去を残さないように消滅させ

た
」

まるで全てを見てきたかのように、答えを知ってるかのように的を得たことを述べる悠真。ふと、何も考えずに適当なことを述べていたことに気付き、悠真は顔を赤くして必死に言い訳を شدした。

「だけど、まあ、俺何にもわかんないからそうとは限ら………」

悠真は紫を見つめて硬直した。あの紫が今の悠真の言葉で涙を流していたからだ。悠真は驚いて慌てた。最初、自分が泣いていることに気が付いてなかったのか、紫は頬を濡らすそれに眉を寄せた。

「俺、泣いてるのか？」

「……」

ああ、そうか。

やっぱりこの人は魔界にいるのはおかしいくらい、心が優しい人なんだ。

「伯鳳様、今日の抜殻茶のお味はいかがですかあ？」

「うーん、とつてもコクがあっといういいねえ。あ、もしかして今回の死にかけの妖怪かい？」

「はい、とっておきですよ」

お茶を飲みながら二人は呑気な会話を繰り返す。鶴は一口お茶を口に含んで、皿の上に置いた。綺麗な流れで顔を窓の方に向けて、そつと呟いた。

「伯鳳様、今日の野暮用ってもしかして」

「ああ、^{ゲート}門をちょっとね」

意味深な言葉に暗黙の了承をして、彼女は目を細めた。綺麗に刻まれた笑みは少し薄れて、何かを思い出したかのように空を見上げる。

その視線の先には屋根の上にある二つの影。

「少しずつ、悠真さんは紫さんにとって特別な存在になりますね」

「……………ああ、それが逆に哀しい結末になることを知らずにね」

その部屋に流れる空気は何とも重く、冷たいものだった。

「あーあ、俺もその会長に会ってみたかったな」

「生きてたとしてもあいつはおじんだぞ？」

「そんな現実言っちゃ駄目だよ」

苦笑しながら悠真は紫から視線を外している。無様にも泣いてし

まった彼への心遣いだろう。それを心の奥で感謝しながら、紫はチラリと悠真を盗み見る。

黒い髪、黒い瞳、それは同じ国に住む特徴。しかし、悠真と龍一は見た目だけでなく、雰囲気も似たようなものを持っている。

「お前、もしかして龍一の生まれ変わりじゃないのか？」

「いやいやいや、どういう考えだよ？大体生まれ変わりは魂がないと出来ないだろ？」

「そうだな。魂は俺が喰ったしな」

本当、馬鹿なことを口走ったな。と思わず自嘲する。

「にしても、紫ちゃんの話の聞いてると、妙に会長の方が妖怪達への影響が強かったよね？俺の時はもう少し時間があったのに」

「!？」

確かに、と紫は難しい顔をして思案する。悠真はまあ、でもそんなもんかな？と適当に自分の中で決着をつけて落ち着いてしまった。人間の魂を好み、奪い合う妖怪。彼等にとってそれは人間の薬物と似たような存在。

「もしかして、力の差か？」

「ん？ああ、そうか！会長の方が俺よりも魔力が強かったのか！なるほどね」

いや。

すつきりしている悠真の考えを心の中で軽く否定をして、紫は悠真を見つめた。初めてこの魔界と契約を交わした人間。波長が魔界と同じ、魔力も天力も合わせ持つ特別な存在。

龍一よりも、悠真の方が力が強いんだ。

魔力を持っているから、無意識に自分の力を内に秘めて、隠していた。今まで彼は自分の感情に反応して、咄嗟に力を出していた。それなら、自分の命の危険を本能的に察して、力を使っていたとしても不思議ではない。

おそらく、龍一とは比べ物にならないくらい、強く………確実な力。

計り知れない悠真の力に紫は少しだけ不安を持った。

強すぎる力はいつか、予想だにしない不幸を呼ぶ可能性があるから。

話が済んで二人はやっと屋根から降りてきた。窓から入るとそこにはレイズがちょこんと待っていた。

二人の顔を見てぱつと顔を輝かせた彼女に胸キュンして、悠真は思い切りレイズを抱き締めた。その姿を少し呆れながらも、紫は何も言わないことにした。

「あー、俺こんなにも女の子に触れるの初めてだあ」

「お前、それちょっと問題発言だぞ」

悠真の変体発言には容赦なく突っ込みを入れて、紫は先にスタスタと伯鳳達がいると思われる方へ歩き出した。遅れながらも二人も紫の後へ付いていく。

「悠真さんが来た日ってハロウィンだったんですよね？その日って何をする日なんですか？」

「うん？ああ、それぞれ仮装をしてお菓子をくれなきやイタズラするぞって言っただけでお菓子パーティーみたいなものだよ」

「そうなんですか」

「じゃあ、もしかして悠真さんがするはずだった仮装って女装ですかあ？」

的を得た問いにぎくりと顔を硬直させて、悠真は声がした方へ視線を向ける。そこには鶴がにこにこ可愛らしい笑みを作っていた。

「そ、そ、そんなわけないじゃないですかあ！嫌だなあ、お鶴さん！」

「悠真、それ逆に肯定しているようなもんだぞ？」

動揺し過ぎた彼を心配して、紫は溜め息をつきながら小声で言った。やっぱりと乾いた笑みを作って悠真は少し泣きたい気分になった。

「何？悠真君は女装がやっぱり好きだったのか！安心したまえ！お鶴に頼めばいつでも出来るぞ！さあ、早速」

「いいやあでえすう！だから、俺は好んでこんな顔に生まれたわけじゃない！俳優並みとは言わないけど、せめて紫ちゃん並みに男らしい顔つきに生まれたかつ　あれ？それじゃあ結局俳優並みか？とりあえず女装がしたくてこの顔に生まれたわけじゃない！そんなに女装が好きなら自分の身体でやって下さいよ！」

一息で全てを言った悠真の肺活量に思わず感心して、紫は溜め息をついた。しかし、やはり二人は引き下がるわけではなく、じりじりと悠真の方へ距離を縮めていく。

一步、二歩、悠真は後退りして何とか二人との距離を保つが、捕まるのは時間の問題だろう。その様子を見やって紫はふと悟る。

この様子ならおそろく。

そう思った矢先、悠真の方へ一気に差を縮めようと動き出した二人を見て、悠真は身体を硬直させた。すると、彼の身体は光だし、色素が薄くなっていく。

「あ！！」

つと言つ間に悠真はその場から姿を消した。

「残念ですう。もう少しだったのに」

「仕方ないよお鶴。門を通った時は彼の意志で戻れるんだから。今度来た時のお楽しみとして取って置こうではないか！」

「そうですねえ。そうしましょう！悠真さんに似合いそうな服をたあつくさん探しておきますう」

二人の浮かれた会話を呆れながら聞いて、紫はそつと息をついた。自分の秘めた過去を話したことで、悠真が仮にも答えを出してくれたお陰で、紫の心にあった重みは少しだけ軽くなった気がした。

またな。

穏やかな笑みを空に向けて、紫は彼に言葉を送った。

第三章 会長の想い（後書き）

一気に書いたので間違いがあるかもしれません。

第三章です。ちよつと長めの一話です。会長の話なのでシリアス気味です。あまりギャグが入れられなかったことを深くお詫びします。

終章

気がつけば彼は草にまみれていた。少し湿っぽい空気と魔界に行ったというのに抜けていない自分の足、おまけに家族全員にその無様な姿を見られて笑われていたことにより気持ちはかなり沈んでいた。

足が挟まれた状態で寝ていたと言われるはめになった悠真は内心で溜め息をつきながら、救出を求めた。

「大丈夫、ユーマ兄ちゃん」

「ああ、ありがとな。静真」

家族を呼びに言ってくれた弟の頭を撫でて、悠真は笑う。改めて目的地に向かって遊歩道を歩き出した皆の後をついていきながら、ふと悠真は空を見上げた。何処からか紫の穏やかな声が聞こえた気がして微笑する。

「ああ、また今度な。紫」

「ん？何か言ったか悠真」

「いや、何でもないよ兄貴。それよりあとどのくらいだよ？」

小走りで追いついて、悠真は魔界とは違う世界に意識を戻した。自分が育ってきた、生活の中心であるこの地球に。

こういった場所を見ると、魔界とこの世界が違うなんてあんまり思えないよなあ。

だから、門ゲートなのかな？

魔界の謎は尽きなくて、彼を悩ませる。

そして今更ほんの数時間しか今回は魔界にいなかったことに気付いて、悠真は頬を掻いた。一番魔界にいた時間が短く、一番重要な話を聞いた。そう思いながら、彼は一つ、ある決意をした。

もう少し、積極的に関わろう。

流されるままではなく、自ら魔界に関わることをこの日、彼は誓ったのだった。

終章（後書き）

最後はとても少ないですが、一応第三シリーズ終わりました。初め
での訪問者、皆様いかがだったでしょうか？
次は門について書きたいと思います。

序章

季節は冬、冷え切った空気に身を晒して、彼は息を吐き出した。

こんな寒い、休日の日に彼、鷹崎悠真は何故か軽井沢にいた。避暑地である軽井沢に、冬に来るものではないと思いつながら、悠真はひたすらに外を散歩する。

「なあ、原松。呼んでくれたわいいけど、暇だぞ」

「そんなこと言わないで下さいよ、先輩。こんな所に家族連れで来る俺の身にもなって」

この軽井沢に来た理由は原松芳樹に誘われたからだ。彼の祖父達はこの軽井沢に別荘を持ち、夏休みなどよく借りて遊びに来るらしい。しかし、何故冬に来たのか。

何でも、ちょうど両親の休みと、学校の試験休みが重なったから、芳樹の両親が行く気満々になってしまったらしい。

そんな時、家族だけできても何もすることがないと考えたのか、芳樹は悠真を思わず誘った。あまり軽井沢という洒落た場所に縁のない悠真はその話に乗ったのだが、やはり何もすることがなく、二人は途方に暮れていた。

「まあ、でも…空気は美味いから許してやるよ」

「よかった。あ、先輩！何なら軽井沢になら何処にでもある教会でも見学してみますか？」

「お、いいなそれ！」

二人は散歩がてら近くの教会まで足を進める。自然を大切に
この軽井沢は他の場所とは違い、自然という環境をかなり重要視
している。土地を持って、その場所の規定により建物自体は敷地の
限られた範囲でしか建ててはいけない、などという規則を作っ
てるほどだ。

そのため、木々が多く、野生の鳥などが多く生息している。

避暑地もあり、多くの人々が癒しを求めてこの場所に別荘を
作るのだ。

「軽井沢って本当山みたいだよな」

「ってというか、森ですよ。こういった所を好んで結婚式を挙げる
人も多いみたいですよ」

自然や動物達に囲まれた結婚式、それは確かに神秘的で理想な
ものかもしれない。と思わず想像して思う。確か、前にこういう所
で式を挙げたかったと、母さんが言っていたな。あ。思い出してしま
った。

「軽井沢になんで教会が広まったんだろうな」

「さあ、外国の人からじゃないですか？」

そんな他愛の無い話を繰り返しながら、二人は近くの教会へ辿り
着いた。森に囲まれた建物。

自然の景色を崩さない、木造。だけど、普通の家とはやはり違う
デザインに、シンプルに十字架だけが飾られて、どことなく神秘的
な雰囲気醸し出していた。

二人は感嘆し、おずおずと教会に近づいた。空気の違うその領域
は正直入りにくい場所であったが、吸い込まれるように足が動いた。

普通に考えたら教会内でも、同じ空気のはずなのに、何故かそこはとても澄んでいるように思う。天井が高く、手の届かない場所にある窓から差し込まれる光はとても神秘的で、輝いていた。

「すげー！」

「ここで祈れば何かいいことがありますかね？」

おそらく間違った考えを二人は信じ込み、祭壇に向かって祈る。

初詣の時よりも熱心に目を瞑りながら。

ふと、悠真の身体が何かに引き寄せられる感覚に襲われた。眉を顰めて目を開ければ、そこには白い靄みみたいなものが彼の身体を引き寄せていた。

「へっっっ?」

っと、言っている間に彼はまた違う世界へと旅立って行った。

序章（後書き）

第四シリーズ、やっと始まります！
何となくですけど、終わりを考えつつあります。

第一章 天界

鳥の囁ささやりが耳に届く。優しい風が頬をかすめ、揺れた髪が鼻をくすぐる。ほんのりと暖かい空気に目覚めを鈍くする。けれど、そういうわけにもいかず、彼は目を開けた。うつすらと徐々に見えてくる景色は光を阻む木々だった。

通りで寝心地がいいわけだよな。

木の葉で少し暑い日差しは遮られ、時に吹く風が優しく彼に快適な環境を提供していた。彼は鼻をくすぐっている髪を払ってまた眠りにつこうとする。が、重大なある事実気づいてしまった。

「そうだ！ここって魔界じゃないのか！」

彼、鷹崎悠真はやっと気づいて飛び起きたのだった。

一方、その魔界に住む彼等は。

「伯鳳さまあ、お気づきになられましたか？」

「ああ、お鶴。気づいたとも！とうとう悠真君はあの場所に着いたのだね！」

「はい！あ、今回のお茶はどうですかあ？ちよつと木の根っこと同化しそうになっていた妖怪から取ってみたんですけどあ」

「うーん、少し甘味が出てるね！」

ゆっくりとお茶を飲んでいた。未だにこの二人のペースにはついていけず、脇でレイズが困っていた。そんな時、彼女の横にある扉が勢いよく開かれた。

「おい！どういうことだ！一瞬あいつの気配がしたのにこの世界には来てないぞ！」

「あれえ？もしかして紫さんずっと捜してたんですか？」

「それはそれは御苦労だな！さあ、一緒にお茶でも！」

「いるか！そんな胃が溶けそうな茶なんて！それよりもあいつは今どこにいるんだ！」

紫の言葉など耳も貸さず、二人は未だにお茶を楽しむ。そろそろ限界が近付いてきた紫は掌に炎を灯し始めた。

その様子を見かねて、レイズが紫の傍に駆け寄った。

「悠真さんは多分、あそこにいます」

流石の紫も彼女には手荒なことはできず、無言で続きを促した。

「魔界ではなく」

一瞬息を止めて彼女は空を見上げる。常に曇っているその空の向こうには、何も無いはずなのだが。そこに彼女の大切な何かがあるかのように、目を細めて。

「天界です」

晴れ渡った空。綺麗な鳥の音。道の端に見える色とりどりの花。何かがいつもと違う。そう訝しりながら悠真は歩き続けた。

何だここ。魔界、じゃない？すつごく雰囲気がつふふと走り出したくなるような夢の国を演出してるんだけど、やっちゃいけないかなあ。

つてか、ここにある花なんてずっと見てればそのうち影から綺麗な妖精さん達が舞い上がってきて踊りだしそうな……………つて！

「妖精だあ！！」

『きゃあ！何なの？いきなり大きな声出さないでよ！』

彼の目の前にいるのは掌程度の小さな人間のような生物。姿は人だが、背中には鳥のような羽が生えている。悠真が驚いて硬直していると小さな姿をした彼女は大きな瞳を更に大きくした。

『真っ黒な髪と真っ黒な瞳……………。しかも、羽がないわ！』

おそらく彼が人だということに気がついたのだろう。彼女は真っ青な顔をして徐々に悠真から離れていく。

「えっと、こついつ時どうすれば！あ、そうだ！あの、お茶でもどうですか？」

『貴方、それ間違ってると思うわよ』

混乱して口走った悠真に思わず突っ込み、彼女は更に彼から離れていく。それに気付かず悠真は未だにどう話しをしようかと悩む。ふと、視線を下に向けた瞬間を見計らい、彼女は振り向いて逃げる。

『きゃあ！』

しかし、振り向いて飛んだ先には木の幹が立ちはだかる。勢いをつけ過ぎたため、今更止まることはできない。痛みを覚悟した瞬間、温かい何かに包まれる。

「大丈夫？」

間一髪で悠真によって助け出された彼女は呆然と彼を見上げる。

悠真は足元の大きな草に彼女を降ろしてあげて、微笑んだ。

「ごめんね、怖がらせて」

『あ、え』

「ほら、逃げていいから」

悠真は彼女が怖くて何処にも行けないのだと判断して、自らその場から離れた。その後ろ姿を彼女はじっと見つめていた。

一体、ここは何なんだろう。

悠真は今までにないこの場所をじっくりと観察して思案する。見るからにここは魔界ではないだろう。しかし、魔界以外に行ける場所などあるのか、そこがわからない。

晴れ渡った空、綺麗な鳥の声、時に吹く暖かい風。全てが魔界とは正反対の印象を持つ。

「もしかして」

悠真は足を止めて悩み出す。

正反対の姿をした世界。先程出会った妖精。彼の頭の中にはそれを領かせる世界は一つしかない。

「天界？」

「天界って、どういうことだ！」

「どうもこうもないですよ、紫さん。悠真さんは天界への門を通じて、天界に行ってしまったわけだけです」

「……………っ、じゃあどうするんだ！あそこではあいつが悪者だぞ」

シンと、静寂が広がる。誰も、何も言わない時間が暫く続いた。天界、それは魔界に住む者が行ける場所ではない。迎えに行きたくても、誰も行けないのだ。今回ばかりは伯鳳でさえも何の手もない。

「あの」

そんな静けさを壊したのは、この中で一番小さな身体をする彼女。レイズは強い瞳を三人に向けて凜とした声で話し始めた。

「私に考えがあります」

気がつけば広い空間へと辿り着いていた。花が所々に色づくその場所には見たことのある姿をした人達が何人かいた。向こうは悠真の存在に気付いていないらしく、お互いに会話を楽しんでいた。

全員白く、綺麗な翼を背中から生やし、多少色が異なるが、金色の髪をしていた。

「やっぱり、レイズが元いた……天界」

その様子に仮定だったものは確信へと変化する。悠真はとりあえず何故自分がこの場所にいるのか、その疑問を晴らすために天族の人達に歩み寄った。

「すみません、ちょっとお茶でもしながら状況説明をしてほしいのですがあ」

やはり間違っている。声をかけられた者達は悠真の姿を見たその瞬間、笑顔だった表情が消え去り、恐怖に満ちた瞳を彼に向けた。

「ニンゲン！ニンゲンでえす！」

「こっちに、来るなでえす！」

「え、外人？つてか、外人は皆そんな発音だなんて何か間違ってるし！」

人のことは言えない立場で悠真は思わず突っ込む。そんなことをしている間にその場にいた天族はすぐにいなくなつた。少し淋しく思いながら悠真はその場に座り込む。

「どうしようかなあ」

また、時間がたてば元に戻るかなあ？

天界に来たきつかけがわからないため、どうしてもいいかわからない。悠真はその場に大の字に寝た。

「ニンゲンが何故こんな所にいる！」

「！！」

突然声をかけられ悠真は飛び起きた。見れば、そこにはいなくなつたと思つた天族が震えながらいた。

つて、遠っ！

彼等と悠真の距離は裕に十メートルもある。苦い表情を漏らして、悠真は声を張り上げた。

「それが、わからないんです！」

声が大き過ぎたのか、更に彼等は距離を置いた。次第に心の距離

が開いていくのが目に見えてわかるといのはかなり辛い。悠真は泣きたくなった。

「早く帰りなさい！」

「それができれば苦労しません！」

「早くきええろお！」

「だあかあらあ！」

もどかしい距離に次第に苛つき始める。必死に説明しようとしたその時、彼等の中から少し違う雰囲気为天族が現れる。金よりも銀に近い髪をした男性だ。彼はしまっていた翼を広げて悠真に近づいてくる。

「……………、話をしてくれるのか？」

「……」

彼は冷たい銀の瞳を向けていきなり悠真に向かって掌をかざした。その状況が理解できず、首を傾げていると突然鋭い痛みが頭に走る。それと同時に視界は暗くなり、意識が消えていった。

気がつけばそこは見知らぬ建物の前だった。その建物は何処かあのパルテノン神殿を思わせるような構造をしている。何本も立つ柱の間に白い衣をまとったブロンドヘアの女性がじっと悠真を見据えていた。

ふと、両手が結ばれていることに気付く。同じく足も。状況が理解できずにそれを意味もなく見つめる。

「貴方は、人間ですね」

あ、この人は普通の喋り方だ。

この状況でそんな呑気ことを考える。

とりあえず声を出すのもだるかったので、頷いた。すると、周囲からざわざわと雑音が広がる。視界を広げて見ればそこには何十人もの天族が集まっていた。

「静かにしなさい」

「……………貴方は、魔王じゃなくて、えーと」

天界の王なら何て言うんだ？

「天王？ですか？」

彼の頭ではそれしか思いつかなかった。そんな彼に彼女はにっこりと微笑んだ。まさに女神のような。

「私はそのような者ではありません。魔界では魔王という者がいるらしいですが、天界にはトップは必要ありません。しかし、いざという時判断を任される族長という者ではあります」

「どうして、俺はここにいるんでしょうか？」

「おそらく、天界の波長に貴方の波長が一致してしまったからだし

よう

魔界の時と全く変わらない説明をされて悠真は首を振った。否定する意味がわからず、彼女は続きの言葉を待った。

「俺は、天界じゃなくて、魔界に波長が合った者です」

「　　っ！それは、何とも珍しい」

これには彼女も大きく目を開けて、驚きを表す。同様に周囲の天族達も更にざわめく。一体何が問題なのか、まだ悠真にはわからない。

「レミ様！早く制裁を！」

「そんなニンゲン、もう見たくありません！」

次々と悠真を批難する声が広がる。彼等をゆっくりと眺めて、悠真は表情を苦くする。

彼等の今の心情が、彼等の周りに色となって悠真に見えるからだ。

「これじゃあ、妖怪と同じだ」

一体何が怖いのか、一体何がいけないのか、悠真には理解できない。

彼が小さく呟いたそれにレミは微かに反応を示した。

「残念ながら、私の力ではこの方を元の世界に戻すことはできません」

「なら、私が神力で」

脇に控えていた銀髪の男が頭を低くしながら申し出た。それにレミは酷く慌てた様子で首を振った。

「それは」

『その人を殺さないで!』

悠真の前に小さな影が現れる。顔を上げてその姿を見ると、それは森の中で出会った妖精だった。綺麗な翡翠の髪が足元まで伸び、その間から覗く白い肌の顔。

ここにいる人は、本当に綺麗な人ばかりなんだな。

また、呑気なことを考える。

「ルフィア」

『お願いレミ様!この人は私を助けてくれたの!怖い人なんかじゃないわ!』

彼女の言葉に、静まりかけていたその場はまた騒ぎ出した。

第一章 天界（後書き）

お待たせしました、第四シリーズ第一章です！

今回は天界です。天使です 皆ブロンドヘア（笑）

ちょっと可愛い女の子をいっぱい出したいと思います！

第二章 鍵を握る者

騒然とした周囲に悠真はどうすべきか判断を迷っていた。庇ってくれている妖精らしき彼女は微かだが肩を震わせている。

多分、相当な勇気が必要だったんだろうな。

彼女の心情を察して、悠真は心を痛める。ふと、気がついてみれば、彼女は周りにいる天族とは違い、すごく澄んだ空気を醸し出していた。

「レミ様、お願いします。貴女様ならわかりでしょう？この人が濁った心を持っていないことに」

「そうですね。おそらく、この世界に来れた時点でその方は天界に似合わぬ心を持ってはいないでしょう」

まっすぐに悠真を見つめて、レミは言う。悠真はその視線をすんなりと外して、ルフィアに声をかけた。

「こんなことして、君の立場は大丈夫なの？」

「人の心配より自分の心配したら？この世界では人は悪魔と同じ扱いなんだから」

「うーん、魔界での食べ物扱いも結構哀しかったけど、これはこれで苦しいものだな。でも、そこまで気にしてないよ。重要な人には伝わってるみたいだし」

につこりと笑う悠真にルフィアは内心で呆れた。こんな時にそんな呑気なことを考えられるのはおそらくそんなに多くはないだろう。彼がこんな性格なのは先ほどのやり取りで何となく理解できていたが、実際に目のあたりにすると溜息をつきたくなる。

「ってか、貴方もしかして私の時みたいに他の人までナンパ的な挨拶をしたわけじゃないでしょうね？」

「ぎく、何故それを知っている！ってか、俺のことは悠真でいいよ。貴方なんて呼ばれたらなんか首筋がかゆいから」

「……………」

やはり事の重大さに気づいていない悠真に一瞬言葉を失う。一から説明しようと口を開いた瞬間、その言葉は後ろから放たれた言葉によって切られる。

「ルフィア、まだレミ様との話は済んでいないだろう？」

「……も、申し訳ございません！」

弾かれたように振り返り、ルフィアは頭を低くした。未だに冷たい視線を送り続ける銀髪の男に悠真は眉をひそめた。

他の者とは雰囲気異なるからか、何処か意味深な存在に見える。悠真は彼から視線を動かさず、レミの方を見る。

「あの、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「何でしょっ？」

悠真が口を開く度に周囲の天族が騒ぐ。天然危険物のような扱いに舌打ちしそうになるが、それは止めて、目の前にいるレミにだけに集中した。

「魔界とも天界とも波長が合う人なんているんでしょうか？」

悠真は魔界との波長を合致して魔界へ訪れた。その波長が天界とも合致するという話は聞かない。そもそも魔界と天界の性質は真逆である。そんな世界を行き来できる人間など普通はいないと思うだろう。

だからこそ、先ほどレミも驚いたのだと悠真は思っていた。しかし、珍しいと言っただけで彼女は何もおかしいとは言わない。

「悠真さん、と仰いましたね」

「はい」

「貴方はとても素直な心を持っていらっしやいます。それは時に純粹で時に残酷なほど」

「?」

言っている内容が掴めず、悠真は顔を顰めた。けれど、純粹で残酷、その二つのキーワードが気になって先を視線で促した。

彼女はうっすらと優しい笑みを彼に向けて静かな口調で説明を始める。

「魔界に行ける者、天界に行ける者、それぞれその世界の波長と合った者にしか訪れることはできません」

既に理解している内容を復唱され、思わず口を開きかけたが、レミはしかし、と重い声音でその言葉を遮る。咄嗟に口を閉じて身を引いた。

「それは正の力と負の力の波長のことです」

「はい？」

説明されても理解できない。そんなもどかしい状況が魔界に来てから幾度となくある。最近はそのこともないだろうと思っていた矢先にまたこれだ。そろそろ悠真も頭の引き出しがパンクしそうだ。

「魔界に訪れるには、負の力の波長が魔界と一致しなければなりません。逆に天界に訪れるには正の力の波長が天界と一致しなければなりません。正と負、それらの力の性質は逆で、波長も違います」

「じゃあ、俺はその両方の波長を偶然までも持ってしまったってこと？」

「その通りです」

一種の超常現象だと言えるだろう。魔界と天界、それらに波長が合った者が現れることすらほとんど有り得ないことだというのに、その両方と波長を合わせた者が生まれてきたことは本当におかしいとも思えるべきだろう。

悠真は俺すげーっと心無い感動を内心で呟いて隣りで縮こまっているルフィアを見た。何故ここまで怯えているのか未だに悠真は理解できない。

「悠真さん、ルフィア」

「は、はい！」

レミは二人を落ち着かせるためか、一段と穏やかな笑みを向けて、神殿の方へ身体を向ける。刹那、周囲の天族と脇に控えていた銀髪の男の表情が一変し、息をひそめた。

「中へ入って下さい。ここでは落ち着いて話もできませんでしょう？」

周囲の反対の声やざわめきを一切無視して、レミは二人を神殿内へ招き入れた。

大きなテーブルが置かれた広間に通され、しばらく座って待っているようにと言われた悠真とルフィア。悠真は椅子に、リルフィアはテーブルに腰掛けて誰もいないその広い空間をしげしげと眺めた。同じ行動を取る彼女に悠真は不思議に思っ、瞬きを繰り返す。

「もしかしてここに入ったことないの？」

「当たり前だよ！ここはごく限られた天族しか入れない特別な建物なんだから！」

あ、魔界では城のようなものか。でも、あそこは入れないというより、入ったら出られないって言った方が正しいよな？

どうしても魔界と比較してしまう。急に黙り込んだ悠真を不思議に思っ、ルフィアは鼻をつついた。彼女の指が小さいのもあり、か

なりくすぐつたい。

悠真は思わず鼻を搔いて、視線だけ彼女の方に向けた。

「貴方変わってるよね。人間のくせに妙に心が綺麗だし」

「そうなの？俺いつもこんなだよ？」

「ふふ、でも貴方みたいな人間は好きよ。あの時はありがとう」

につこりと笑う彼女はやはり、天使のように可愛らしく、悠真は一瞬ドキリとした。こういった時、女に慣れていない自分を呪うのだ。

それに気づいてか、ルフィアはくすくすと小さく笑った。

「にしても、怖いもの知らずね。いくら天界だからってよく知らない土地にどんどん歩いて行けるよね」

「ああ、多分魔界での行動がそのまま癖になったんだと思う。あそこは逆に動かなきゃ、死ぬからなあ」

しみじみと思い出して呟く。どの場所に毒があり、どの場所に妖怪が潜むのかわからない魔界。そんな世界で唯一安心できるのは伯鳳達が住むあの城だけだ。

だから、あの世界に訪れたなら、真つ先にその城に向かって歩き出す。本来なら、その周囲にある森には毒の霧があるのだが、毒を避けようと思えば、次は妖怪に襲われる。それなら、少しばかり気持ち悪くなるうと、城を目指すのが賢明な判断である。

考えてみれば、本当に俺危ない世界を行き来してたんだな。

今更思う。

それに比べ、この世界は随分と平和な場所だ。住んでいる者の違いなのだろうが、ここまでイメージ通りだと悠真は魔界が憐れに思えてくる。

「魔界って、どういう所なの？やっぱり、毒の沼とか、泥の妖怪とか、あ、とても見にくい獣が何匹も合わさったような鶺鴒っていう妖怪がいるって本当??」

「あー、結構その想像は外れてもいないけど、お鶺鴒さんは醜くはないよ。普通の女性っていう、外見」

外見に力が込められていることから、内容は恐ろしいんだと一瞬の内に判断した。それから、待たされている間悠真はルフィアに魔界のことを聞かせる。伯鳳のこと、鶺鴒のこと、紫のこと、自分のこと、更には龍一のことまでも。

ルフィアはその全ての話を面白そうに聞き入る。

「じゃあ、悠真の世界って、こういった自然がそんなにないの?」

「こんななのどかな場所は俺の国にはあんまりないかな?スイス辺りに行けばあると思うけど...」

「すういす?ふううん、一度行ってみたいな。悠真がいるなら、絶対何処だって楽しいし!」

すっかり仲良くなった二人は今の状況を忘れて盛り上がった。そして、やっとレミがその広間に姿を現した。もちろん、脇には銀髪の男を連れている。ルフィアはその男の顔を見るなり、顔を青くして悠真の背中に隠れる。

「ルファイア？」

「あの人、私苦手なの。すごく、怖い」

言われて悠真はその男の顔を見る。確かに他の天族とは違い、金髪ではなく、銀色の髪をし、常に険しい表情を送っている。しかし、悠真にはどこにも怖さを感じなかった。

「お待たせ致しました。悠真さん。それではお話をしましょうか？」

「あ、はい」

レミは二人の向かい側に腰をかけて、男はその後ろに佇む。様子からして、男はレミの用心棒なのだろう。悠真はあえて気にせずじっとレミの方に意識を集中させた。

「改めて、私は天界の族長である、レミと申します。ここにおりますのは私の世話役であるシンバです」

「あ、俺は鷹崎悠真です。よろしくお願いします」

慌てて頭を下げる悠真にレミはにっこりと綺麗な笑みを向ける。それに何かの面影を感じて、悠真は目を細めた。頭の片隅にある画像はついには出ず、レミが口を開いたことで話が始まった。

「先ほどは他の者達が失礼なことを致しました。今までこの世界に人間が来た例など無くて、不安になってしまったのでしょうか」

「いえ、そのことについては平気です！気にしないで下さいー！」

「ありがとうございます」

ほっと安堵したような表情に、本当に気に病んでいたことが窺える。悠真はいつも苦労しているんだな、と余計な同情を彼女に投げかける。

しかし、脇に控えているシンバに睨まれて、同情の目をやめた。

「あの、俺はどうしたら戻れるんでしょうか？」

「それが、我々の知識では、その方法がわからないのです」

「えー！」

絶体絶命。方法がわからないのなら、悠真にはどうすることもできない。困って硬直していると、小さな声でレミは呟いた。

「そういった知識に富んでいた天族は以前にいたのですが…」

「今、何処に？」

「貴方ももしかしたら知っているかもしれませんが」

その言葉と、レミの顔で悠真は先ほど思案した面影の主が見えた。彼女の白い心と、彼女の髪と、彼女の声と、彼女の雰囲気、その全てが何処かあの子に似ているのだと。

「もしかして、レイズ？」

帰る鍵を握る者は、今魔界にいる。

第二章 鍵を握る者（後書き）

お久しぶりです。大学のパソコンにて送信しております（笑）
ルフィア、可愛いですね 私、こういったキャラだあい好きです！
いよいよ話は本題に入ってきます。次は天界にあの人が登場です
お楽しみに！

第三章 会話

魔界にある一番高いと言われる高山の頂上に四人は立っていた。常に薄暗くしている雲は今はその下の方に見えるが、それでもこの世界は薄暗い。それというのも太陽が存在していないからなのだが、この世界の全体に微かな光源があるために真っ暗にはならないのが特徴だ。

逆に言えば天界はその光源が強すぎて常に昼間のような明るさを持っている。

「本当に行くんですか？」

「何今頃言ってるんだよ、お前等」

「大丈夫ですよ、悠真さんなら多分あのお方のところにちゃっかりいそいな気がしますから」

「そうだねえ、何だかんだ悠真君が一番この中で運がよくてちゃっかりした性格だからねえ」

四人は悠真を思い浮かべて微笑んだ。この時だけ、伯鳳も鶴でさえも普通の人間のように。紫はそれを見て内心で苦笑した。

「それでは、行きます」

レイズは両手を掲げて強く祈った。刹那、彼女の身体が眩い光に包まれる。その光は地上の方にも降り注ぎ、何体かの妖怪を灰にした。

暫くするとその光は消え、また通常の魔界の姿へと戻っていった。

「そうか、レイズが…。確かに一回俺はレイズに呼ばれて魔界に行ったこともあったなあ」

「レイズが貴方を呼んだんですか？」

事実を知った悠真は意外とあっさりとな得して、頷いた。逆に彼の言葉にレミの方が驚きを示して、目を瞠った。悠真は後ろに隠れているルフィアを自分の膝に乗せてやり、はいと肯定した。

「何でも力が弱まったから助けを無意識に呼んだらしいです」

「！！そんな、じゃあもしかして彼女は…」

「そしたら俺が天力を放って魔界に溜まっていた魔力を相殺したから彼女は元気になりましたよ」

その言葉には表情を出さないあのシンバさえも驚きの表情をした。悠真は何故二人が驚いているのかわからず、思わず膝の上にいるルフィアに視線を向ける。

彼女も本当は驚愕していたのだが、悠真が視線を向けた時には既に元の表情に戻っていた。

「多分、悠真が天力を使えることを忘れてたんじゃないかな？魔力を使えることは常識でも、何故か天力を使えることは知らない人の方が多いのよ」

「そうなの？」

「天界の人達は人をあまりよく思っていないから、そういう偏った考えしか持っていないの」

悠真はそんなもんかな、と肩を竦める。天界の人達は皆が皆、レイズみたいな人だと思っていた彼は、この世界の人達がああいう態度を取るのがとても意外だった。

思わず妖怪と一緒にだと思っちゃったけど、考えてみればこの天界の人達って人に近い存在なのかな？

人を恐れるあまり拒否することしかできなくて、そうしているうちに人への考えが偏っていく。それは人の間でもある差別的な問題と一緒にだ。

「悠真さん、貴方はもしかしてそのお力をコントロールすることはできますか？」

「え、いえ。流石にそこまでは。でも、感情が高ぶった時とかによく出ちゃうみたいです。魔界に最初行った時もちよっと怒っちゃって妖怪を灰にしちゃいましたから」

へらへらと笑いながら言った。だが、その言葉はその場にいる者には軽い内容ではない。絶句しているルフィアに瞬きを繰り返すレミ、そして。

「レミ様、やはりこいつは危険です！今すぐ消すべきです！」

「おやめなさい！シンバ！」

軽く一括されて、シンバは身を引いた。しかし、彼の眼はやはり悠真を睨んで、敵意を剥き出しにしている。レミはそれに肩を竦めて、諦めたように悠真の方へ顔を戻す。

「すみません、悠真さん。では、貴方が天力を放ったというのは、レイズを思う気持ちから出たのですね？」

「多分、そうですね。ただ、あの時ちょっとむかつと来たこともあったから…、きっかけは多分そっちですね。何故ですか？」

「いえ、本当に貴方は、ルフィアが言った通り綺麗な方の方ですね」

何を試されたのか、何で確信をしたのかはわからないが、レミは既に悠真のことを信じ切っているようだ。それにほっとルフィアは胸を撫で下ろした。この世界で族長から信頼を受ければ、もう危ない目にあうことはないからだ。

「でも、困ったね、悠真。どうやって元の世界に戻るの？」

「だよなあ、原松置いてったきりだったし。あ、でもこれも門から来たから時間には差はないのか」

それが不幸中の幸いとも言えるだろう。こういった世界に行くことは悠真は抵抗はないが、いつ、どんな所で行くことになるのかが予測できないところは考えものだ。しかも、特別な日に限っては、その日と同じ力が宿る日にしか戻れないというのも困りもの。

いっそ、こう時間とか全部差がなくなってしまう方がいいのに。

切実な悩みだった。

こんなところで悩んでいたところでこのメンバーではいいアイデアが浮かぶはずもなく、レミは客室を空けるからそこで一晩休むことを提案した。内心かなりの気疲れがあったため、それを素直に受け入れた。

「ルフィアはいつもどんな所に住んでるの？」

「私は木にあいた穴とかを家にしてるの。ちよつと大きめの穴じゃないと入れないけど、結構いいんだ。まあ、悠真は招待できないけど」

「そうだね、ちよつと入れないなあ」

小さく作られたタオルのベッドにルフィアは潜る。それに習い、悠真も自分のベッドへ身を沈めた。ふかふかな感触は彼の眠気をすぐに引き起こして、数秒もたたないうちに、夢の世界へと旅立って行った。

目の前に紫がかかった青い縄がぶら下がっている。

本当に目と鼻の先にそれがぶら下がっている。

悠真はそれを邪魔臭そうに払いのけるが、またその縄は前に戻ってきた。思わずその縄を掴んで下に引っ張った。すると、上からずるり、と何かが落ちてきた。

「って、紫ちゃんじゃん」

縄だと思ったものは紫の髪の毛だったらしい。彼はいつもの仏頂

面で立ち上がり、悠真の前に立つ。

「お前、馬鹿だろう?」

「ちよ、確かに俺は馬鹿かもしれないけど、何の前触れもなく言われるほど紫ちゃんに馬鹿なところ、…見せてきたけど、でもでも、何の前触れもないのは失礼じゃないか?!」

何も否定できないところが悠真らしい。紫はそれでも表情を崩さずに彼の前に突っ立っている。そして、更に。

「お前、阿呆だろう」

「ちよ、ちよ、ちよ、さつきから何なのさ! 頭大丈夫? 紫ちゃん!」

「ちゃん付けするな! しゃん付けしろ!」

「紫しゃん??」

悠真は本当に意味がわからなくなって、混乱し始めた。一体、何が起きているのか。

そして、ふとあることに気づいてしまった。

「紫ちゃ、紫しゃん! か、か、髪が! さつきまであった三つ編みがなくなってる! 何で? もしかして失恋!? 誰に??」

「お前にだ!」

「マジで? いや、確かに俺はそっちの方向じゃないけど、紫ちゃんは嫌ってないよ? むしろ好きだよ! だけど、そっち方向じゃなくて、

「この場合は失恋なのか?!」

「お前が俺に失恋したのだ!」

「逆じゃね?しかも、のだってお前誰だあ!!」

気がついたら悠真はちゃんとベッドの中に入っていた。あれが夢だと気づいて深い安心と共に溜め息をついた。どうしてあんな夢を見たのか、彼にはわからない。

ふと、自分が何か握っていることに気づいて見てみると、そこにはルフィアが必死にもがいていた。

「うわっ!」

「もう、死ぬかと思った……………」

本当に顔色を悪くして、ルフィアは息を荒くする。悠真は苦笑して、ごめん、ごめん、と軽く謝った。

「大丈夫?すつつつつつごくうなされてたわよ」

「あはは、ちょーすげえ、夢見たから」

今思い出しても寒気がする。何故あんな夢を見てしまったのかと。夢はその人の心情や状態で変わるといっけれど、あれは一体どういう心情からきたのだろうか。と変なところまで気を回していく。

もしかして、俺、紫とそういう仲になりたかったのか?

いやいやいや、あり得ない。
何いきなりそっち系に入ってただよこの小説はっ！！

必死に頭を振る彼にルフィアは訝る。しかし、悠真がおかしいことは通常のことだと既に認識済みの彼女はそれほど気にすることもなく、自分のベッドへ腰を落ち着かせる。

「ここって、やっぱり夜がないんだ」

窓の外は依然として明るく、のどかな昼の一面を見せていた。魔界とは本当に正反対なこの場所。違和感ばかり覚えて、悠真はこれでもかなり混乱している。

もしかしたらそれなりに淋しかったのかもそれない、と心の中で失笑した。

「はあ、俺いつまでここにいるんだろう？」

「うーん、そうだね、いつまでもってわけにはいかないもんね」

少し淋しそうにルフィアは呟いた。彼女のその様子が可愛くて、思わず心を震わせた。

落ち着け、いくらなんでも色々ヤバいつて！

つてか、俺最近モテ期？

いや、この世でモテるよつてーの！

一人ボケ突っ込みで、先ほどの卑しい気持ちは捨てて、彼はまた頭を振る。いつにも増して変な想像や夢を見てしまうのは、環境の変化からなのかもしれないが、もしかしたら伯鳳や鶴の影響かもしれないと、顔を青ざめた。

「やっぱり魔界は恐ろしい」

「何今頃言ってるの？」

唐突な彼の悟りにまたルフィアは怪訝な表情を浮かべた。

暫くして、完全に目が覚めてしまった二人は部屋から出た。勝手に歩き回っていいのか迷うところだが、何も無いあの部屋でじっとしていることは怒られることよりも辛いと判断して、せめてあの大広間にも移動しようと考えたのだ。

大理石と似たような素材で作られた床、壁に囲まれた廊下を音も立てずに歩き、二人はふと外のざわめきを聞いて眉を寄せた。

「何だろう？」

「ここまで騒いだのは悠真の時が初めてだと思ったのに。皆静けさに飽きたのかな？」

「え？俺のせい？」

軽くショックを受けている彼を放っておき、ルフィアはふよふよと窓の方へ近寄る。神殿の入り口付近に天族は集まっていた。悠真の時と違うのは、そのざわめきに恐怖などが感じられないことだ。逆にその声には歓喜のものが混じっているようにも聞こえる。

悠真も同じく窓からその様子を覗いた。

「何だろう？あの人達の中心に誰がいるのかな？」

よく目を凝らして、人の隙間から覗くと、同じく金髪の小さな人物が皆に囲まれているようだった。更に揺れ動く人の中から必死に

見れば、見覚えのある顔が彼の目に飛び込んだ。

「あ!!！」

その声に彼女は微かながら反応する。視線はまっすぐに悠真を捕えて、釘付けにした。エメラルド色の彼女の瞳が揺れ動く。そして、周りの人達を一切無視して、彼に駆け寄った。

「悠真さん!!」

「レイズ!!」

鍵を握る、彼女がこの天界に訪れた。

第三章 会話（後書き）

何か、久しぶりに純粋なギャグを書いた気がします。どうでしょうか？皆さん、天界に来るのが紫だと思いましたが？騙されてくれませんでしたか？

それなら嬉しいです。夢の内容は適当に書きました（笑）楽しんで頂けたのなら嬉しいです。

第四章 明かされる事実

出会った時は確かに嬉しかった。しかし、悠真は気づく。自分と
いい、彼女といい、今回天界の人達に余計な不安を与えてしまつて
いることに。ざわざわと騒がしい外に心の中で軽く謝罪を繰り返し
ながらも、勝手にレイズを神殿に入れる。流石に彼女も神殿の中が
限られた者しか入ってはいけないことも知っているためか、少し居
心地が悪そうな表情を悠真に向けた。

悠真は言い訳を心の中で呟きながら二人を連れて大広間に移動す
る。すると、ちゃんと騒ぎを聞いていたのか、そこには既にレミと
シンバがいた。

「悠真さん、これは一体何の騒ぎで……」

「レミ様！」

悠真が説明を始める前にレイズが彼女に向かって駆け出してしま
った。これには誰も予想などでできず、止める間もなかった。シンバ
が大きく目を見開いたことに気づく。これには悠真も一瞬ヒヤリと
したが、レイズを見たレミも同じく走り出してしまったため、シン
バは鋭さを無くし、驚愕の表情へと変えた。

「レイズ！貴方、どうしてここに？」

「はい！悠真さんを元の世界に戻すために来ました。流石に紫さん
達をここに連れて来るわけにはいかなかったもので」

確かに天界に人が来ただけでも大騒ぎだったのに、さらに妖怪が
この世界に訪れた日には皆天界の破滅だと騒ぎ、仕舞いには祈り始

めるような気がする。その光景を容易に想像でき、悠真は苦笑を浮かべた。

「ごめんな、レイズ。こんな所まで迎えに来てもらって」

「いえ、私はここにもう二度と来れないと思ってましたから、悠真さんには逆に感謝してますよ」

につこりと可愛らしい笑顔を向ける。その曇りのない笑顔に一瞬心臓が止まりそうになった。

純粹な、綺麗な心を持つ人ってやっぱりこの表情だよな。

死にかけながらもそんなことを思う。顔を赤くしている悠真に気づいてルフィアは彼の頬を思い切りつねった。それにより悠真は死の危機から救われる。

「レミ様、本当にお久しぶりでございます。魔界に行っても、貴方様だけは忘れませんでした」

「敬語はよして。貴方は、私の妹みたいなものでしょう？」

かなり親しかつたらしく、二人は既に自分達だけで世界を作り、感動を噛み締めている。それを呆然と悠真は見つめる。

自分がここに来たせいでレイズが里帰りができたのなら、今回の騒動もそれほど悪いものじゃなかったかな。と、心の中で呟いて、悠真はその場から離れた。

天族では天族同士で話した方がいいこともある。そんな気の回しをして、与えられた部屋へと戻り、ベッドに腰を落ち着かせる。ふと、シーツが湿っていることに気づいて、首を傾げる。

「あ、そうだ。変な夢見たからだ」

先ほど見た夢を思い出し、悠真は苦い表情を作る。ここに本当に紫が来なくて良かった気がした。

「静かだなあ」

魔界はよくカラスが鳴きじゃくっていたが、天界は鳥のさえずりが微かに聞こえてくる。それだけだ。時々妖怪の叫び声が聞こえることなどないし、伯鳳達が騒ぐこともない。一人になると更にその心地良い静けさがわかる。

しかし、何か物足りなさを感じる。それはおそらく魔界に慣れ過ぎたからだろうが、人間だからかな、と悠真は思った。

「人は、欲が絶えない人だって誰かが言ってたなあ」

多分、先生。おそらく。

曖昧な記憶を頼りに呟いたせいで誰もいないにも関わらずかなり恥ずかしい。思わずベッドに寝転がり、息をついた。

「紫ちゃんに会いたいなあ」

「それは魔界の者のことか？」

「わあ！！」

人がいないはずなのに聞こえた男の人の声に悠真は飛び起きる。見れば、いつの間にか扉の脇に佇むシンバ。どくどくと早い音を刻

む心臓が彼の驚きを示している。

シンバは無表情のまま悠真のすぐ目の前まで歩み寄る。

「お前、本当は魔界からのスパイじゃないのか？」

「はっ？」

意味が理解できず、思い切り表情を歪ませる。その顔が苛ついたのか、シンバは力任せに悠真を押し倒した。ベッドの縁に頭をぶつけて、ぐわんぐわんと脳が振動した。涙目になりながらシンバを見れば、彼の顔は今までにないほど恐ろしいものだった。

一瞬、背筋を凍らせたが、彼に睨み返して、力任せに手を振りほどいた。

「何を勘違いしているか俺にはわからないけど、今回は本当に地球から来たんだから、スパイとかそんなんでできないから」

「有り得ない！この道は、繋がってなんかいないはずなんだ！」

きつぱりと彼は言った。その様子におそらく嘘ではないだろう。だからこそ、理解できなかつた。何故、あるはずの門がこの世界と繋がっていないと言い切れるのか、一体何処からそんな確信が出ているのか。

悠真は乱れた服を直して、シンバと向き合う。その瞳に恐怖が微塵も感じられないことに彼は驚いた。普通、こんなに乱暴をされればどんな者でも恐怖や怒りなどを映し出すものだが、彼にはそのどちらも瞳には見られない。いつものように、まっすぐな瞳をシンバを向けていた。

「……………」

「ねえ、教えてくれないか？どうしてそんなこと言いきれるんだ？この世界には人間なんて訪れたことなんてないんだろ？」

そう、天界に人が訪れたのは今回が初めて。トップにいるレミでさえそう言ったのならそれは間違いないはずだ。と、いうことは天界の者達はこれまで門というものに関与してこなかった可能性が高い。

シンバは少し戸惑いながら肩の力を少しづつ抜いていく。まっすぐと向けられる悠真の視線に少しづつ敵意を無くしていつているのだ。

「あれは、俺が閉じたはずなんだ」

静かに語られたその事實は、おそらく彼以外誰も知らない新事実だと、悠真は直感した。

「あいつは、着いたのかな？」

「おやおや紫君、まるで仕事に出かけた亭主を待つ奥さんのような顔をしているね。そんな顔もキュートだよ」

「黙れ！だあ！だからお前等といると嫌なんだ！馬鹿とテンションが移る！」

頭を掻きながら、紫はどすどすと他の部屋へと移っていった。その後ろ姿をにやにやと見つめて、伯鳳はもうそんな行動をしている時点でかなり自分達に感化されているよ、と小声で呟いた。

ふい、と窓から覗く空を見上げる。依然として薄暗闇としている厚い雲は晴れる様子などなく、ゆっくりと先ほどとは違う形状に変化していく。

「この先には、地球のように青い空があり、白い太陽があり、暖かさがあるのかねえ」

「伯鳳様、ここは宇宙の中にいるわけではないですから、太陽があるとは思えませんけど」

「おや、今回は珍しく現実主義じゃないか」

「いえ、あるとしたら妖怪達の入り混じった魔力かと思ひまして」

「それじゃあ、今よりも真っ暗になっちゃうじゃないか」

一体何が面白いのか分からないが、二人は相も変わらず愉快そうに笑っている。ふと、鶺鴒はいきなり真面目な表情をして、伯鳳にもう一步近づいた。

「伯鳳様、今回の一件で、やっぱり……」

「流石は鶺鴒。もう気付いているんだね。そう、今回の原因は簡単に言えば」

「この私だよ」

鳥のさえずりが絶え間なく聞こえてくる部屋で、男二人は何も言わずに見つめ合う。至って真剣に。

「閉じたって…」

「今から多分百年ほど前のことだ」

やっぱりこの人もそんな長寿だったのか。

悠真の心の眩きなど知らないシンバはそのまま真剣な表情で百年前の出来事をゆっくりと語り始めた。

今から百年ほど前、その時はレミも他の天族も同じ地位でしかいなかった頃だ。青い空、生い茂った緑、色とりどりの花、美しい姿を維持していた天界の姿が徐々にだが、失われていく事件が起きた。それは、一週間ほどで元通りに戻ったため、天族達はさほど気にも止めずにまた元の生活に戻った。しかし、その裏側では門が関係する恐ろしいことが起きていた。

波長が合った者を通してしまう天界への門。それは地球と天界に一つずつ存在し、その間を道で繋ぐ構造となっている。その地球側の門が長年人の心に触れてきたせい、故障を起こしていたのだ。

「ちょっと、待って！え？つまり、門へかかるダメージが天界に形となって現われてたことがあったってこと？」

「そういうことだ。それに天界の者達は気付かなかった。だけど、偶然俺だけがそれに気付いた」

「どつして？」

「門が、目の前に現れたんだ。だから、俺は咄嗟に触れてしまった」

その時のことを思い出したのか、シンバは顔を悪くした。若干気持ち悪そうな表情に悠真も暫く先を促すこともなく黙って彼を見ていた。

落ち着きを取り戻したのか、シンバは顔を元に戻して話を再開した。

「触れた門からは様々な感情が俺の中に流れ込んできた。欲望のこもった願い、罪の意識から流れ出る懺悔、人の死によって生まれた哀しみ、それらはこの世界で生きてきた俺にはとても耐えられないほどの強大なキモチだった」

「そつか、天界への門は教会だった。だから、そういった感情が特に集まりやすかったんだ」

「俺は必死にその感情から逃れようと全身に残る天力を放ったんだ。そして、気絶した」

そこまで一気に話すとシンバは大きく息をついた。よほどその時に流れたきた人の気持が彼のトラウマになっているのだろう。話をしてくれたこともおそらく奇跡に近い様子だ。

「気が付いた時にはもう門は見えなくなっていた」

「でも、俺門とか二回ほど通ったけどそういった形をした物は見たことないから、隠れてただけなんじゃ」

「いや、姿だけじゃなく、その門から発せられる力も無くなっていたんだ。それは間違いようがない。微かにでも絶対に感じるはずな

んだ！だから、俺はあの時門の力を自分で消してしまっただと思
った。だから……」

「だけど、俺が今回その門を通って初めて訪れた」

「そうだ！そして消えていたはずの門の力もお前が来たことで復活
している！」

「こんなこと、普通なら有り得ない。と、低く吐き捨ててシンバは
悠真から視線を逸らした。シンバが彼に向ける鋭い視線の理由はお
そらく自分のトラウマとなったキモチを持つ、人間という種類に入
るからだ、理解した。」

「……………門が消えて、復活した…か。でもさ、それって本当に有り
得ないこと？」

「何？」

「だから、それって本当に有り得ないって言えるの？だって、門が
人の気持ちだけで天界にも影響を及ぼすことだって普通に考えて有
り得ないと思われていたことなら、それが起きた今、門の復活だっ
て別に考えられることじゃない？」

シンバは黙る。天界の起きたことを受け入れて、そしてゆっくり
と結論を早めずに今の状況を考えている悠真に感心したからではな
い。彼にそう言われているこの状況に腹が立っているからだ。

「ま、でも普通じゃないことは確かだよな」

少しずつ、歪んでいる何か、ぐるぐると駆け巡り始めた。

第四章 明かされる事実（後書き）

四章突入！おそらく五章と終章でこのシリーズは終わりを迎えます。この週で夏休みを迎える私なので、夏休み中にこのシリーズを終わらせたいと思います！

第五章 彼の性格

以前一度閉ざされたはずの門。
けれどまた開かれた門。

知らないところで起こり始めている異常。一体何が原因で、何が解決方法なのか、悠真にはわからない。悠真はやっと戻って来たレイズとルフィアの三人でその話をし、ある相談を持ちかけた。

「なあ、レイズ。レミ様と二人で話すことはできないかな？」

「え？あ、シンバがいちゃ困る話？」

「ああ、うん。多分話そうとするとあいつ邪魔しそうだし、落ち着いて彼女と話せない。レイズならどうにかできないかと思って。この事実、レミ様にもちゃんと知ってもらわないといけないし」

歯切れ悪く言う悠真。少し珍しいとも思えるが、相手がシンバなら仕方ないことだろう。レイズはやってみる、と可愛い笑みを彼に向けた。悠真は急にとつもない眠気に襲われてベッドに腰かける。数時間前に眠ったばかりなのだが、おかしいなあと内心でぼやきながら、それでも我慢できず、深い眠りについた。

それから何時間たったのか、ゆっくりと目を開けると窓にはカーテンがひかれ、いつの間にか薄暗くなっている部屋。首を回せば椅子に腰かけたまま眠るレイズに寝床で安らかに眠るルフィアの二人が見えた。おそらく悠真につられたのだろう。

「大丈夫ですか？お疲れだったみたいですが」

「！？」

声が出た方へ顔を向けるとそこにはレミが椅子に腰かけて悠真の様子を窺っていた。レイズが大人になったような落ち着いた笑みはやはり大人の魅力を感じさせる。一瞬ドキリとしたのは内緒で悠真は思わず周りを見渡す。しかし、何処にもシンバの姿は見えない。

「シンバは？」

「何か、疲れていそうなので私が休ませました。シンバに御用でしたか？」

「あ、いえ。実はレミ様にお話ししたいことがあって」

こんなチャンスを使わないわけにはいかない。悠真は少し慌て気味にこれまでのことをレミに順を追って話した。天界にそんなことが起きていたなど全く知らなかった彼女は酷く驚いたように目を瞠り、ただ黙って悠真の話を聞いていた。

「そんな、信じられません。まさか天界にそんなことが起きていたなんて。では、何故悠真さんはこの世界に来れたのでしょうか？」

「それは、俺にもわかりません。でも、今まで起きたことを考えれば、不思議ではない気もしますし、逆に可笑しいとも思える。魔界も、天界も、結局どちらも俺には未だに理解できない変な空間だ」

そう語る悠真の顔は何故か穏やかで、レミは目を丸くした。普通なら未知なる空間は恐怖にしかならない。しかし、悠真の中では恐怖ではない。

レイズの話から大体の悠真の性格を知るレミは、知ったからこそ彼のことが理解できなくなった。自分の生命を狙った妖怪も、危険

だと知れば庇う。自分にとってデメリットしかないような魔界にも、不便さを感じないならちよくちよく来たいとも思う。自分とは違う力を持ち、違う考え方を持つ種族に素直に反応し、素直に怒り、素直に喜ぶ。それは魔族でも、天族であってもできることのない屈託のない素直さと純粹さ。

「本当、皆貴方のことを好きになるはずですね」

「え？」

そして、自分の良さに気付かないこの鈍感さ。おかしくてレミは吹き出してしまった。

話が脱線してしまったが、レミは改めて今回のことについて考える。門が暴走、シンバが封じて、また出現。その間にかかなりの年月がかかっているため、門自身が自ら力を蓄えたことも考えられる。しかし、あまりにもタイミングが良すぎる。

「もしかしたら、誰かが何かの目的で……」

「誰が？つてか、そんなこと誰かができるの？天界の人には門の存在だって信じている人が少かつたし、シンバは門自体を恐れていた。何かが目的だつて言っても、その目的自体が想像つかないよ」

謎は深まるばかりだ。けれど、レミは少し思案して、慎重に考えられる人物の名前を上げた。

「魔界の、魔王というのは？」

「伯鳳さん?!いや、いくら何でも本当に理由がわからないし、あの人はそんな混乱を招くようなこと絶対に………しないとは言い切

れないけど、いや、かなり言えないけど、でも、ねえ？」

「私も、その方のことを知っているわけではないので、こんなこと言いたくありませんが、魔界と天界は意外にも繋がりは深いのです。魔界から天界に来ることも、天界から魔界に訪れることも、どちらも可能ですし、レイズのように一人は必ず天族を魔界に送っています。天界で門が異常を起こしたのなら、繋がりの深い魔界にも何か異常が起きているかもしれません。その異常を戻すため、こちらの門を戻した、と言う考えもできなくはないでしょう？」

すらすらと語られた新たな情報に悠真ははあっと相槌を打つ。確かに魔界と天界は性質が正反対なだけで、原理は同じ。そのため繋がりは深い。天界に地球の何かが影響してきたのなら、魔界にも何らかの影響が来てもおかしくない。それを直すため、止むを得ず天界にも何か細工をした、と考えるのも不思議ではないだろう。

「うーん、そうだなあ。どっちにしても、ここでそれを悩んでても意味ないか。とりあえずレミさんは一応こちらの方でも何か手がかりになるものはないか調べといてもらえませんか？」

「はい。喜んで。天界についてここまで心配して下さって本当にありがとうございます。レイズが来たことですし、おそらく明日には悠真さんも元の世界に戻れますよ」

レミは静かに部屋を後にして、悠真はルフィアとレイズ、二人の寝顔を見ながら、悩み始めた。このまま地球に戻ってもいいのか。

自分がいたところで問題が解決するとは思えないが、このまま無責任に戻ってもこの人達に失礼じゃないのかと不安になっているのだ。しかし、悠真が残ることは他の天族に不安を与える。ここはひとまず地球に帰るのが正解か、と思い直し、もう一眠りすることに

した。

そして、すっかり寝すぎた悠真とレイズ、ルフィアの三人はがんがんと鈍く痛い頭を押さえながら森の中へと進んでいく。その後ろにレミとシンバもついて。

「本当にこつちに門があるのか？」

「門は地球側、天界側どちらかは固定なの。だから、地球の方で天界の門が聖域を転々としているなら、天界の方はずっと同じ場所にあるんだよ。逆に言えば魔界の方は地球は樹海でしたっけ？そこで固定なら、魔界の方の門は色々な場所に移動するんです」

次第が増えていく異世界情報。比例して、高校で習った何かを忘れていたような気がする、と悠真は苦笑した。進んでいく先は確かに最初悠真がいたあの場所だ。シンバもそこに近づく度に険しい表情になっていく。ふと、悠真はちよつとした疑問を小声でルフィアに問い掛けた。

「あのさ、ここの人達っているもあなの？」

「何が？」

「人間とかそういうのああいう風に嫌悪するのかなって」

その言葉にああ、と呟いて彼女は押し黙る。あの時のことを思い出してしまったのか、少し淋しそうな目をしていた。暫くすると、やっと頷いて肯定した。

「私が来た時にはもう皆あんな状態だったよ」

「でも、私が魔界に行ってしまう前はそんなんじゃないありませんでしたよ。レミ様もそう仰ってましたし」

話を聞いていたレイズがやんわりと否定した。ルフィアが来るずっと前にはまだ皆が彼女達のように澄んだ心を持っていた。そう考えるなら、性格が変わってしまったのも、門の影響かも知れない。そう思い、悠真は溜め息をついた。

そして、五人は問題のその場所に辿り着いた。

「ここです」

言われて悠真は初めて気付いた。門という存在を主張する異様な力を。レイズやレミ、鵜や伯鳳を見た時に感じるあの力と同じように、門の力もはっきりと感知することができる。それは、確かに何か不思議なもので、鵜よりも入り混じり、レイズよりも澄んだように感じる。

「これさ、また封印しちゃえばいいんじゃないやねえ？」

「え!？」

思い切った彼の提案に四人とも目を丸くした。悠真はずっと疑問に思っていたことを思い切って口にする。

「だってさ、どうして天界や魔界には門が必要なんだ？人間がこの世界に来て何になるのさ。大体、何で門があるのかも不思議なんだよねえ。地球に魔力が充満して、事故で魔界に行くっていうのは別

に納得できるけど、わざわざいつでも行ける門があるっていうのは、理由がわからないんだよ。ないと駄目とか、そういう理由がないなら、また封印しちゃえばいいじゃん」

容易な考えだと悠真自身も思う。けれど、彼等の不安を取り除くため、懸命に出した答えがこれだったのだ。ここに紫がいたらまた呆れられるのだろうなあと、想像しながら悠真は四人の顔を見る。誰もが驚いた顔をしていたが、レイズがすぐに元のあの笑顔を悠真に向ける。

「そうですね、私は賛成です。本当、悠真さんはよくそんなことを考えますね」

レイズに否定されなかったことに少しだけ安堵して、悠真はレミと向き合った。視線が合ったことで、やっと彼女は表情を戻した。

「悠真さん、確かにそれもいいかもしれませんが、ですが、門を封じれる人なんて貴方以外にはいません」

「え？俺できんの？」

意外な言葉に悠真は目を丸くした。そのことを知らなかったことに更に四人は驚く。今までの流れでそうだった特別なことは悠真にしかできないと、彼自身も気付いていると思ったからだ。ルフィアは悠真の前に飛んでいき、視線を合わせて説明をした。

「門は天界と限りなく近い存在。だから、門自身に何か手を加えるということは天界に何かを加えるということ。それは天界の波長に限りなく近い力でなければ駄目だということなのよ」

「なるほど、だから俺か。でもさ、俺じゃなくても天界の門に何かを加えられる人はいるよ。しかもすごく身近にさ」

悠真はルフィアを自分の肩に乗せてにつこりと無邪気な笑顔で言った。問うような視線を送る皆に、彼は視線でそれが誰なのか示した。悠真の視線の先には、銀色の髪をした、固い表情をする彼。そう、シンバだ。これには流石に彼も動揺を隠せない。

「な、俺にそんなことできるわけがないだろう！」

「できるさ。俺よりも澄んだ心を持つてるんだから。それに、シンバは一度門を救ってる」

この世界の人達で門の異常に気付いたのは彼だけだ。その門を一時的でも封じたのも彼だ。悠真が言っていることは一応事実を見て、見つけ出した答えだ。

「門は多分苦しんでいた。人の気持ちに左右され、自分の力が弱まり、制御できないそれに苦しんでいた。そこで、助けを呼んだ。自分の波長に限りなく近い、自分の力に限りなく近い、シンバをな。俺、難しいことはわからないけど、これだけは言える。お前の力と、門の力は色が限りなく似ている。もちろん一緒じゃないけど、シンバなら大丈夫だろ」

一体何の根拠があるのか、何処からそんな自信が湧くのか、彼には理解できなかった。悠真はいつもそうだった。自分については自信がなくても、人についてなら何故か底抜けな自信を持っている。しかも、それを他人にもそう思い込ませてしまう、何らかの説得力を持って。

「お前、何でそこまでこの世界や、他人のためにできるんだ？」

誰もが最初は疑問に思う。

天界も魔界も人とは関わりがない世界。生きていても死んだ後でも本来なら来ることのない、知ることのない世界。特に天界は門を封じてしまったら悠真が来ることはおそらくない。そんな世界を何故ここまで気にするのか。

「何でだろうなあ、まあ…俺だからかなあ？こういう性格になったから、気になるんだよ。それよりも、何よりレイズもルフィアもレミ様もシンバも、天界も…皆好きだしさ。幸せでいてもらいたいじゃん」

にっこりといつもの無邪気な顔をシンバに向ける。清々しいほどきっぱりと彼は好きだと言った。自分までその枠に入ってると思わなかったのか、シンバは暫く目を瞞っていたが、ふと口元を和ませた微笑した。

彼のその様子にルフィアはもちろん、レミでさえも驚いたように視線が釘付けになる。

悠真は門の力を感じる場所に手を延ばした。瞬間、悠真の天力を微かに感じとり、門が姿を現す。それはシンデレラ城にあるようなファンシーな門で、天界にはびつたりだが、門だけというのが少し場違いだった。

「じゃあ、俺…行くね。最後までいられなくてごめんな」

「御元気で、悠真さん」

「また会えることを祈っていますわ」

「門ならお前の望み通り俺が封じてやるから、一生来るな」

レイズ、レミ、シンバの順で悠真に挨拶をする。最後にルフィアが悠真の前に飛んで行き、目線を合わせた。小さいが、本当に綺麗な顔が悠真に向けられている。

「また、会えるよね？」

「会えるさ！天界と魔界の繋がりには深いなら、いつか必ず会いに行くよ」

門を封じるということは悠真がこの世界に訪れるのは無に等しい。しかし、天界と魔界の繋がりには深い。それなら魔界から天界に行くことは今回のレイズのように可能はず。

ルフィアは涙を流しながら笑う。そして、そつと近付いて悠真の唇に自分の小さな唇を重ねた。

「なっ！」

「好きだよ、悠真。貴方のお陰で人間を誤解しないで済んだ。私、たとえ魔界であっても、悠真がいるなら必ず会いに行くよ」

真つ赤に頬を染めながらルフィアは言う。悠真は生まれて初めての告白にドキドキと胸を高鳴らせて、後退りした。

「……あ……」

「あ？あ、あああああ！」

そして彼は後ろにあった門に気付かず、そのまま下がり、上手い

具合に扉を開けて、いつものあの感覚を味わいながら妙な別れをしたのだった。

第五章 彼の性格（後書き）

ちよつと、サブタイトル適当ですが、許して下さい。

少し詰め込み過ぎましたが、五章終わりました！次は終章に入り、

第四シリーズ終了になります！そして、次のシリーズがいよいよ最後になります！

最後までお付き合いして頂けると嬉しいです。

終章

悠真は今疲れていた。それはルフィアによって動揺し、慌てた瞬間、未だに熱心にお祈りしていた芳季を直で見ってしまったからだ。その変わりように思わず溜め息をつき、どっと天界でのできごとでたまったストレスが現われた。

「何でそこで溜め息つくんですか！何か祈りが届かなく思えてすごく嫌なんですけど」

「ご、ごめんごめん。いきなりこの日本の未来について不安に感じちゃったから。タイミングが悪かったんだよ！」

落ち込む芳季に無理な内容で誤魔化して謝りながら、二人は教会を後にし、別荘に戻る。外に出たことで底冷えしたため、二人は先に風呂に入ることにした。結構雰囲気の良い別荘で、浴槽も桧風呂といった風情ある造りだ。管理が大変なんだろうなあつとまたよくわからない観点で見ながら、悠真は身体をあつためる。

髪の毛を拭きながら与えられた部屋に入り、窓の外を見る。火照った身体には少し冷た過ぎる風を身体に受けながら、さわさわと綺麗な自然な風景を見つめる。この自然だけを見ていると天界にまだいるのではないかと思ってしまうが、時に聞こえる車の音や人の声にはつと我に返る。

やばいな、最近あつちに行き過ぎて混乱してきてる。

苦笑してベッドにダイブする。温まった身体とふかふかなそれは悠真に積もった疲れを上手く引き出して、眠りに誘う。ゆっくりと目を閉じようとしたその時、何かを感じて目を大きく開いた。そし

て突然安心したように微笑んだ。

よかった、門を封印できたんだ。

胸を撫で下ろしながら、悠真は少しだけ今回の事件のことを思い返す。地球と繋がっているせいで影響が出た天界。一回封じたはずの門が出現。いつの間にか心が汚れている天族の人々。

思い返すだけでやはり原因がわかるわけではない。今度魔界を訪れた時に伯鳳さんに聞いてみよう、と、緩く決心をして、悠真はそのまま眠りについた。

「先輩、ご飯ができたみたい……って寝てるし」

芳季は寝てしまっている彼に苦笑して部屋に入る。身体が冷えないよう開けっ放しの窓をゆっくりと閉めた。そして、うつ伏せのまま寝ている悠真に近付き、布団を掛けようと手を伸ばした時、彼はあることに気付いた。

「変なところにイレズミつけてるんだなあ、先輩。あれ、でも消えかけてる？なら、イレズミじゃないのか？」

疑問に思いながらも彼は布団をかけた。首元についたイレズミを最後まで不思議そうに見つめながら、起こさないように静かに部屋を出ていった。

そして、事態は深刻になっていく。

天界の門。

天族の人々の変化。

魔界との契約の印。

そして、異界での力の変化を感じ取る悠真。

彼自身も気付かない微かな変化は、そのうちに増え、そして……。

彼が気付くのは、もう少し先。

終章（後書き）

天界シリーズ完結です！

ふう、ちよつと一安心です。そしてそして、地道に進めてきたこのお話も次のシリーズで完結となります！中学から考えてきたこの話にも終わりが見えて来るなんて、とても感動です！

最後の話は悠真の家族も出しますよ！つまりは、ギャグ満載です（多分）

では、最後までお付き合いして頂けると嬉しい限りです

序章

季節は冬と春の境。厳しい寒さは次第に暖かみを帯びて、首元の防寒も皆外し掛けた。学生の服装もただの制服を着るだけのものとなり、陽が昇る時間もかなり早くなった。同時に、陽が落ちるのも遅くなり、そんな赤い夕陽を見やる学生がここにもいた。

一人は茶色がかった黒髪をした少年。大きな瞳に、少し丸い輪郭は男なのか女なのか一瞬戸惑ってしまうくらい中世的な容姿の彼は、紺色のブレザー姿はある意味で似合っている。

もう一人は黒い短髪をした、いかにもスポーツマンな顔をしている少年。少し細い輪郭に、切れ長の目をしたイケメンの部類にも入る彼は、同じく紺色のブレザーを着、シャツを着崩している。

「はあ、にしても何とか勝ったなあ」

「本当、先輩がいてくれてよかったです」

二人は今日、バスケの練習試合へと駆り出された。かなりの強敵だったのか、語る顔はいささか青い。先輩、と呼ばれたのは鷹崎悠真、十八歳。知っての通りこの話の主人公だ。そして、一緒に帰っているのは原松芳季、十七歳。二人は違う年齢で違う学年だったはずなのだが、様々な事情で今は同学年となっている。

「もう、三月か。この休み明けたら受験生なんだよな」

「嫌なこと思い出させないで下さいよ。はあ」

そう、今は春休み。後二週間足らずで二人は三年生となる。先のことを考えると気が重くなるのか、長い溜め息を同時に吐いた。ふ

と、芳季はじつと悠真を覗き込む。その視線が顔ではなく、首元に向けられていることに気付いて、悠真は首を傾げた。

「何だ？」

「先輩ってどうして首の所にそんなイレズミみたいのがあるんですか？」

問われて一瞬ドキリとした。この首元のイレズミは彼と魔界が契約している証拠。それをどの様に芳季に説明すればいいのか、これは悩むところだ。魔界、の言葉を出さないよう、どうやって……。とただ純粹に興味で入れたんだあつという陽気な考えが咄嗟に浮かばないところが彼の弱点だろう。悠真は悠真なりに悩んでいる時のことだ。

ぞくりと、冷たい何かが背筋に這い上がった。何処かで感じたことのある感覚に、まさかとは思いつつ、悠真は辺りを見渡した。しかし、周囲には何も無い。思わず安堵して、芳季をみると、彼は何かをジツと見つめていた。

「すっげー。何処かのモデルかな？」

思わず彼の視線を追ってみると、視界に入ったのは見覚えのある顔。紫がかかった青い髪を三つ編みにし、肩から垂らしている長身の美男子と白い髪を腰まで延ばした同じく美形の男、更に緑の女性にしては少し短めの髪をした女性。悠真はこの者達と会うのは初めてではなかった。だが、この世界で出会うのはまさに初めてだ。

「いや、でも、何で？」

「先輩？さっきから様子おかしいですよ？」

慌てる悠真を怪訝そうに芳季は顔を覗いた。しかし、今彼は三人にしか焦点を合わせていない上、耳に音が入っても気にする余裕など一切なかった。じつとただあの三人を見つめていると、やがて向こうもその視線に気付いた。その内の二人は何故かものすごい笑顔で悠真に走り寄る。

「悠真くううん!!」

「悠真さああん!!」

何か来る、関ってはいけない人達が、来る。しかし、悠真にはわかっていて。これらからには逃れられないことを。瞬時に悠真の傍に来た二人は挟み撃ちで彼を羽交い絞めにする。

息が止まるかと思い、手をばたつかせる。芳季は遠目で見てはいるしかない。次第に顔を青くする彼を見兼ねて、ゆっくりと近付いてきた三人目の男がその二人の襟を掴み、悠真から引き離す。

「お前等は悠真を殺しに来たのか」

「あらら、すみません、悠真さん。ついつい」

「君を見て興奮してしまったのだよ。はっはっは!!」

異界に来てても変わらない三人に悠真は内心感心しながら、大きく息を吸った。そして、久しぶりに見る彼等の名前を順に述べた。

「紫ちゃん、お鷗さん、伯鳳さん…久しぶり」

彼等はこの世界に入られないはずの、既に死んだ妖怪。魔力を持

つ、魔界の住人だった。

序章（後書き）

ついに最終シリーズスタートです！

ギャグを入れてできる限り自分が満足できる作品を仕上げていきたいと思えます！

皆様にも満足いただけるよう、頑張りたいです！

第一章 歪んだ世界

何故、三人がこの地球にいるのか。悠真にはもちろんわかるわけもなく、更にそんなことを呑気に考えている暇はなかった。何故なら、ここにはこの三人と悠真の他にもう一人存在しているからだ。

芳季はもちろん今の状況を理解できておらず、三人と悠真の関係を本当に不思議そうに眺めていた。見るからに悠真よりお年上の三人。普通に知り合えるわけでもない。悠真はどう説明して逃げようかと必死に悩んだ。

「原松、あのな、こいつらはあ……」

「先輩、ついにそういった道に歩んだんですね。わかってます。何も言わないで下さい。俺は何も見てせん。このことを誰かに言うこともしません。ちゃんと約束しますから」

「おい、原松？お前、何言ってるんだ？」

何を勘違いしているのかわからないが、芳季は更に熱を込めた目で悠真を見つめて、首を縦に振った。ものすごく嫌な予感がして、思わず否定しなくなったが、紫が後ろから悠真の口を押さえてきたので何も言えない。

「まさか、本当にそうだったコスプレの世界に入るなんて、俺は嬉しいですううううう！！」

そう叫びながら芳季は走り出した。すぐにその姿は消えて、彼の声小さく木霊している。コスプレという言葉に流石にショックを受けて悠真は引きつった笑みを漏らした。確かにそうだったもので

ないと、この三人は説明しにくい。とがった耳や、見慣れない服、染めたにしても綺麗過ぎる白や緑の髪など、この世界では少し奇抜すぎる恰好だ。

しかし、だからといって自分の立場をかなり悪くした気がする。しかも、芳季は好きらしい。本来の姿ではなく、勘違いされた姿を好まれても、複雑な心境だ。

「コスプレとは何だ？」

「紫ちゃんは知らなくてもいいような言葉だよ」

力なく呟いて悠真は改めて三人を見やる。突然地球に来たにしては皆妙に落ち着いている。しかし、普段の三人ならこのくらいで動じはしないのだろう、と悠真はわざわざ問いもしなかった。

「とりあえず、ここでは目立つから、俺の家でも」

「おお！まさしく初めての訪問どつきどきだね！」

「はい、伯鳳様、これは更に悠真さんをいじるチャンスです」

「いや、いじらないで下さい」

疲れた口調で言い、悠真は自分の家へと急いだ。この三人を共に連れていくだけでも、かなり目立つ。更に警察などに補導された場合、何をし出すかがわからない。三人が。あくまでも、三人がである。

運よく家に帰るまでの道ではあまり人に会わずに済んだ。しかし、問題はここからだ。家族にどう説明するかである。

「はわあ、ここが悠真さんの家ですね！」

「ここまで家があるなら全てくつつけて大きなものにしてしまえばよいのに」

「家がないと生きられないなんて人って不便だな」

生きていた時の記憶がないとはいえ、理不尽なことを言う。その言葉のせいで悠真の頭には何もいい案が浮かんでこない。いや、静かであっても彼の頭にはいい案など浮かんではこないだろう。何故なら、要領が悪いから。

入らずに悶々と考えていると、ついに悠真は案が浮かばないうちに。

「あれ？何してんだ悠真」

家族に見つかった。丁度大学から帰ってきたのだろう、悠真の兄、透真だ。彼は見慣れない三人に目をぱちくりさせながら、悠真に視線を向ける。

「あ、いや、遠い友達がわざわざ来てくれたからさあ」

ものすごく苦しい言い訳だ。この場にいた五人全てがそう思った。しかし、この家族の中で一番常識があり、一番お人好しの透真は一つ苦笑して優しく言った。

「それなら早く家に上げてやんなよ、友達待ちくたびれてるじゃないか」

何も聞かずに家のドアを開けた。最初に会ったのが透真でよかつ

たと心から思い、やっと家の中に入った。だが、まだ問題は解決してはいない。透真だから何も言わなかった。ならば、他の家族ではそうはいかない。また、悩み始めた悠真。

「こんにちわ、僕静真です。ユーマ兄ちゃんのお友達？」

「あらあら、悠真さんそっくりですう」

「おお！こんにちわ、私は伯鳳というのだよ。今度その顔を生かして何かしてみないか？」

「そうだね！僕、将来は逆玉の輿を狙ってるんだ。少し大人のお姉さんとか…、結構要領いいから僕ならいけると思う」

「おい、この子供、お前とオーラが似てるんだが…」

「やだなあ、紫さん。 を使ったくらいで同じにしちゃいけませんよ。下手したら塗りつぶされている分この子の方が腹黒ですよ」

「あらあらあ、なあに？こんなにお客様が。悠ちゃん、ほら、早く客間に通しなさい」

「あ、はあい。つて、馴染みすぎでしょ！そして、疑わなすぎ！心配して損したしい！」

気付けば伯鳳が母の真澄の手の甲に口付けようとしていたので、すかさず引き離して、客間ではなく自分の部屋に三人を押し込んだ。こんなにもスムーズに受け入れてくれるとは思わなかったため、安堵というよりも少し複雑な心境だ。

すっと息をついてベッドに腰掛ける。そしてやっと本題に入ろう

と口を開いた。

「で、どうして皆は」

「お茶入れたわよ、悠ちゃん。はい、どうぞ」

突然入ってきた真澄によって中断。出鼻を挫かれたとはこのことなのだろうか、と問いたくなる。差し出された紅茶を遠慮なく鶴は一口飲んだ。すると、目を大きく見開いて立ち上がる。

「これは!?!」

「どうしたの?お鶴さん」

「お口に合いませんでした?」

「な、なんて上等な抜殻茶!ほんのりとくる香りと、ちょっと口に残る苦み、そして綺麗なこの色。百年に一度取れるかわからない弱つちい妖怪をじわじわと鞭で痛めつけて、殺し、そのあと丁寧に血に染めなが」

「わあああああ!お鶴さん、落ち着いて下さい。欲しいなら後で少しわけますから!」

突然出てきた言葉に顔を真っ青にして悠真は口を挟んだ。心配そうにちらりと真澄を見ると何故か少し嬉しそうだ。単純に褒められたのだと思ったのだろう。ほっと胸を撫で下ろして彼女が部屋から出ていくのを見送る。足音が消えるまで待ち、改めて口を開いた。

「で、さっき言おうとしたことなんだけど」

「なあ、これって何だ？」

本日二回目の中断。それは紫の声だった。まだ伯鳳や鶴じゃないだけマシだったが、問われたことに意識を失いそうになった。彼が持っていたのは綺麗な青い衣装。少し飾りは質素だが、腰の部分で柔らかく広がった布はとても可愛い。更には白いエプロンまで付いている。組み合わせ着れば本当に可愛い衣装となるだろう。

つまり、ワンピースだ。女物の服。そんなものが悠真の部屋にあるはずない。しかし、紫は隅に置かれたそれを見つけてしまった。

「そ、それは…」

「まあ 悠真さん、本当にそんな道に足を踏み入れて下さったんですね！私、感激ですわぁ」

「ち、違います！」

「まさにこれは女性の衣装。言い逃れはできないよ、悠真君」

「だからぁ、違うんです！この世界でもお鶴さんみたいな人がいてですわえ…」

思い出したくないことを思い出して、言葉に詰まる。女装趣味と思われても困る。が、これを説明するのも恐ろしかった。しかし、先ほどの言葉で事情を大体は理解した紫はまた袋に服を戻した。

「なるほど、やはり皆悠真君を放って置くことできないのだな」

「いいことじゃないですかぁ 皆様に可愛がられて。では、今度私

も悠真さんを可愛がって差し上げますわ」

「うう…」

もう、彼は泣くしかなかった。流石に申し訳なく思ったのか、話を変えてしまった紫が彼に助け船を出した。

「で、何を聞きたいんだ？」

「だから、どうして三人がここにいるのかを、聞きたいんだよ」

そしてやっと、三人から事情を聞き出すことができたのだ。

今の状況を理解した悠真は顔を凍らせて、三人の顔を凝視していた。

その内容とは、前回天界へ行った時に浮上した問題とも関係する。それは、門の異常。三人がこの世界に来てしまった原因は他にもない、門が暴走し、三人をこの世界に送り込んでしまったからだ。普通ならそんなこと絶対にあり得ない。そう、出会った時に伯鳳が言っていた。

「あの、伯鳳さん。実はこの前俺が天界に行った時も」

「それはレイズから聞いてるよ。大変だったね悠真君。確かに天界の異常といい、魔界の異常といい、同じような症状だね。無関係とは言えないだろう」

「じゃあ、一体」

一瞬、四人の中に重い空気が流れた。悠真は何も言えずにただ続けるような目で彼等を見ているしかなかった。そして、やっと口を開いたのはこれまで黙っていた紫だった。

「とりあえず、言えることは」

「悠ちゃん！ご飯、できたけどどうする？」

又突然ノックもなしに入ってきた真澄により中断。紫は「は」の口のまま止まり、悲しい瞳を悠真に向けている。内心で謝りながら、悠真は真澄を押しして廊下に出た。

「もちろん、あちらの方達も食べていくでしょう？もっと早く言うてくれたらマシなものを作ったのにい」

「いや、あのね」

「あ、そうだ何ならどこか食べに行く？作ってから言うのもなんだけど。どうせ明日の朝にでも食べるでしょう？」

「だからね」

「お母さん、それならやっぱりファミレスだよね！色んな種類あるし」

「そうね、流石は静ちゃん。わかってるわあ」

「真澄、父さんは焼き肉が食べたいな」

「父さん、変なこと主張しないでいいよ」

次々にわいて出る家族に突っ込むタイミングを逃して、悠真はどうしようかと悩み始めた。いや、食事は別にとってもいいのだろう。いいのだろう、が。っというか自分は一体何を言いたかったのだろう。次第によく理解できなくなっていた。

「とりあえず、家でいいです」

「そうだよ、一応人数分用意したんだろ？」

紫と透真によって話は終わり、次々と家族は下に降りていく。それを見計らって紫は一つ息をついて、静かな口調で告げた。

「とりあえず言えることは、天界も、魔界も、そしてこの地球も何かが狂い始めてることだ」

それは、これから起こる何かを決定づける、静かな言葉だった。

第一章 歪んだ世界（後書き）

ちゃんと見直ししないで投稿したので多少誤字などがあるかもしれない
ません…。

久しぶりに家族登場です。ギャグになっていたでしょうか？

第二章 混乱する世の中

少し窮屈にテーブルについて八人は食事をとる。悠真はいつ伯鳳と鶴が迂闊なことを話さないかで冷や冷やししながら横目で何度も見ている。時刻は既に七時半。三人と話をしている間にかかりの時間が経過していたようだ。普通ならお笑い番組の一つでもやっている時間だが、静真はリモコンを持ちながら首を傾げた。

「何か、今日ニュースばつかなんだけど」

「七時過ぎなのに？」

仕方なくあるチャンネルのニュースを見る。箱のようなものが映像を映す機械に三人も興味津々でそこに釘付けだ。ご飯を口に運ぶ作業を止めることなく、全員そのニュースを見る。ほとんどが生放送らしく、上にLIVEという字が映されていた。

「ただいまの情報によればアメリカ、中国、オーストラリア、更にはヨーロッパと何の繋がりも見えない場所の国に異常な現象が起きていることがわかりました。アメリカでは街にいたカラスが全羽突然死に、中国では春、夏、秋、冬関係なく、全ての植物が生え始め、オーストラリアでは原因不明の霧により、たくさんの人が病院に運ばれています」

「すごいなあ、一体どうしたんだ？」

「こんなに一気に…本当に異常だね」

悠真は思わず三人の方に顔を向けた。案の定彼等は深刻そうな顔

でテレビを見つめている。やはりこの異常現象は伯鳳達がこの世界に来たことと関係があるのだろう、と確信しようとした。

「悠真さん、これってどういう原理で動いてるんでしょうか？」

「これは魔界でも使えるかね？」

この言葉でその考えは一気に消し飛んでしまった。

食事も終わり、そろそろ三人を自分の部屋に戻そうと悠真は立ち上がる。食器を重ねて水道の所へ持って行くと、同じようにして紫が自分のお皿を持って後ろに立っていた。

「なあ、さっきのここではおかしなことなのか？」

「え？あ、うん。今までそんなことありえなかったよ」

それを聞くと紫は神妙な表情で考え始めた。

そうか、紫ちゃんちはここの常識を知らないから考えようがないんだ。

彼等が地球にいた時の記憶は一切残ってはいない。どうして死んだのか、誰が親なのか、全く。今の彼等にある記憶は死んで魔界に来てからのものしかないため、地球のことがわかるわけではないのだ。悩んでいても仕方ないと思ったのか、考えるのをやめて紫は口を開いた。

「やっぱり世界は」

刹那、大きく床が揺れる。かちやかちやと柵にしまわれた食器が

音を立て、軽い物は少しずつ床を滑る。突然のことでどう反応していいかわからず、悠真は思わず紫の腕を掴んだ。彼は意外にもしっかりと悠真の身体を支えて、柱に捕まった。数分間その揺れは続き、また何もなかったように動きを止める。

「長かったね今の地震」

「震度四くらいか？」

少しだけ大きかったが、そこまで被害のある揺れではなかった。家族はとりあえずテレビを凝視して、情報が入るのを待った。

『ただいま起こりました地震ですが、………何と震源地がありません。火山のない国も含めて全国で震度四相当の揺れが起こった模様です』

「何だそれ」

「まあ、地球が震えたってこと？」

本格的に起こり始めた異常。それは、考えられないほど急激で、次は何が起こるのか予想もできない。悠真は紫に視線を送ると、彼も何かを悟り頷く。静かに伯鳳と鶴を引っ張り、自分の部屋へと連れて行った。

「やっぱり地球にも異変が起き始めてるよ、伯鳳さん！」

「うむ、やはりさっきの箱は普通なら使えないものなのだな」

「いや、テレビじゃなくて、テレビが放送していた内容が異常だっ

たんです！ぬあ！何でこんな時も突っ込み入れなきゃならないんですか！とりあえずどうすればいいか一緒に考えて下さいよお！」

半泣きになりながら悠真は慌てる。そこらをぐるぐると回り始めたため、紫がその頭を掴み、止めさせた。けれど、彼は無意味に足を進める。

「そうですねえ、普通に考えれば私達がこの世界から消えればいいでしょうけど」

「そうだな。確かに俺達がこの世界に訪れたことによってこの地球に歪みを発生させているからな。普通に考えれば歪みそのものである俺達が元の世界に戻ればいいんだが」

今回の原因ははつきり言って門、つまり世界を繋ぐ道の暴走だが、地球が歪んでいる最大の原因は地球ではないはずの妖怪がいることだろう。

「っと、いうことは……………」

『門を使って三人を魔界に帰せれば、いいということですね』

突然頭に響いた声に悠真と紫は驚きを示す。普通に声をかけられたものではなかった。例えるならマイクか何かで直接ではなく、間接的に話しかけられたようだ。しかも、その声には覚えがあった。

「レイズ？」

『はい、どうやら世界の繋がりが不安定になったためにこちらの声が悠真さんに届くようになってしまったみたいです』

この場にはいないのに聞こえる違和感に思わず顔を歪ませた。本来ならあり得ないことが続く。それは地球が次第に歪み始めていることを表している。

「ってーことは、魔界に戻るために」

「地球側の門の所まで行かないといけないな」

さらりと言われた内容はかなり無理に近い。地球側の門は樹海にある。しかも、遊歩道で木々の中に入った所だ。そんな所へ既に夜となった今から行くのはかなり危ない。しかも時間がかかる。ついでに言えば家族に気付かれないようにするのは更に難しい。

震源地がないという異常な地震も起き、世界で様々な現象も起き始めている。このまま朝を待っていてもそれはそれで危ない。既に三人は地球に来ている。それならいつ他の妖怪達もこちら側に来てしまうかわかったものではない。

「どっしょっしょ」

『悩んでいる暇はありません』

『そっだ、魔界や地球だけじゃない、天界にも影響が出てるんだ、早く何とかしろ』

レイズの声に交じって新たな人物の声が悠真の頭に響く。聞き覚えのあるそれは、魔界の住人ではない。

「嘘、シンバの声も聞こえるようになってしまった!」

『私もいるよー、悠真！久しぶりい』

「ルフィア！元気にしてたか？つて、そんな場合じゃない。天界ではどんなことが起こってるの？」

『今のところ植物がしおれているくらいかなあ？でも、そのせいで天族の人達が元気をなくしてるの。お願い、悠真だけが頼りなんだよ』

植物、毒の霧、カラス……もしかして今こつちで起きていることは、全て天界、魔界に関連していることなんだ。

アメリカではカラス。中国では植物。オーストラリアでは霧。これらは全て魔界と天界で普通だと思われる現象。つまり、魔界、天界、地球の世界の枠が本当に崩れつつある。

悠真はダウンジャケットを羽織り、家族に気付かれないよう靴を自分の部屋まで持ってきた。

「どつする気だ？」

「紫ちゃん、俺を担いで走れる？屋根の上とかつたつて」

「やってみる。案内はお前がしろよ」

そして、しばし硬直して、今度はまた違う部屋から何かを探り出して戻ってきた。手に持っているのは何回か折りたたまれた紙。それを広げてじつと見つめる。何度か視線を往復させて、それをポケットに突っ込んだ。

「よし、多分大丈夫」

「……………」

紫は不安になりながらも、彼を信じるしかなかった。

冷たい風が頬を叩きつける。大きく上下するその衝撃にそろそろ慣れ始めた悠真は、紫の足の速さに感嘆を漏らした。器用に音もたえず、屋根を伝っていく彼は、元は黒ヒョウらしい。だが、妖力の強さからそれを証拠づけるものは黒い耳しかない。その彼の後ろを白い羽ですいすい飛んでいるのは白ガラスの化身、伯鳳。彼が空を飛ぶところを見るのは、もしかしたら初めてかもしれないというほど、その姿は珍しい。そして、暗殺者のように闇にまぎれながら後をついてくるのは鶴。彼女に関しては何の化身なのかもわからない。こんな姿を誰かに目撃でもされたらそれだけでまた騒ぎになりかねない。が、今はそんなことを気にする余裕もなく、悠真はポケットに入れた地図を引っ張り出す。あれから一時間は走り続けている。もうそろそろ樹海の木々が見えてもいい頃だろう。

「紫ちゃん、もう少し左側に寄って走って」

「左の方なのか？」

「何言ってるの！この世界は左側通行が基本なんだよ」

どこか間の抜けた突っ込みを入れて、悠真は地図に視線を戻した。道路標識などで確認したところもうすぐ樹海には到達するだろう。しかし、問題はその後だ。樹海といっても範囲はかなり広い。この前行ったところは決まっているから大体の場所はわかるが、細かい

所までは覚えていない。そんな門をどうやって探し出すか。

『悠真さん、急いで下さい』

「どうしたのレイズ？」

『このままでは、妖怪達が　　してしまい……』

突然彼女の声が切れてしまった。今の様子から魔界に何かあったのは明白。悩んでいる暇は彼にはない。とりあえずめぼしい所に向かうしかなかった。

やっと樹海に辿り着き、ひとまず遊歩道の所で悠真は自らの足で歩く。夜で、更にはまだこちらの方は寒い季節。薄気味悪さがこの間よりも増幅している。

「あらあ、何だか魔界の森に似ていますね、伯鳳様」

「そうだねえ、これでカラスの鳴き声と毒の霧さえあれば」

「変なものを地球に残してもらっちゃ困ります。多分、この雰囲気は魔界に似ているからここに門があるんじゃないですか？」

足を進めながら悠真は必死にあの時のことを思い出す。しかし、樹海など中に入ってしまえば大体が同じように見え、更には今は昼ではなく夜だ。それだけでイメージは一変してしまう。

困った、わからない。

肩を落として、視線を下に向ける。すると、そこには見覚えのある小さな穴があった。悠真は暫くそれを見つめて、顔を上げた。ゆ

つくりと手を伸ばしていくと、確かに何も無いはずなのにそこには何かが存在していた。

「ここだ」

「ここが？ だけど、門の姿が見えないぞ」

門というものは常に透明なのではない。ここにある、と確信した時自ら姿を出すもの。しかし、今は姿を出すどころか、門の力さえも悠真は感じられなかった。

「もしかして、門が閉まってる？」

やっと見つけたそれは、彼の道を塞ぐ。

第二章 混乱する世の中（後書き）

ふう。人が多いつて大変です。
次は久々に魔界へGO！

第三章 進行する歪み

やっとの思いで辿り着いた樹海。そこですぐに門を見つけた四人だったが、門が扉を開いてくれない為そこで立ち往生していた。普通、門の存在を認めた瞬間にそれは目の前に現れるものなのだが、一切反応を断っている。

「どうして?」

「これもおそらくは私達がここに来てしまった影響でしょうか?」

どうも緊張感に欠ける彼女の喋り方に悠真は気が抜けそうになるが、場合が場合だけに何とか堪える。このままでは魔界に行けない助けを求めるように紫を見やるが、彼にもいい案は浮かばないらしい。口を開こうともしない。

万事休す、そう思った矢先に伯鳳が見えない門に触れる。地面に着地したと同時にしまった翼を広げ、珍しく真剣な面持ちを作っていた。一瞬、彼の身体が白く光る。眩い、というよりもゆらゆらと纏うような光。それは門の輪郭を沿って移動し、いつしか門の姿を炙り出した。

「おお! すごい、伯鳳さん」

「こういった時は力づくに限るよ悠真君」

「だけど、どう扉を開けるんだ?」

「流石にそれは私の力では何ともできないなあ。門を開けるには門

に勝る力が必要になるし」

「それは、私でも無理ですねえ。あ、悠真さんならどうですか？」

じつと三人に視線を向けられて悠真は戸惑う。門の力とはおそらく魔界そのものの魔力と同等のものなのだろう。しかし、そんなものに勝る力を自分が持っているとは思わない。苦い表情で三人の顔を見返していると紫が大きく溜め息をついた。

「そうだな、悠真だけじゃあおそらく無理だろう。なら、俺も一緒に力を使う。それならいくんじゃないのか？」

「そうだね、それなら名案だ！」

「でも、俺どう力使うかまだわからないけど…」

「そうですねえ、魔力は負の感情からきますから、怒りの感情を露わにすればいいんですよ」

そんな無茶な…。

今まで自らの意思で力を使ったことのない悠真にとってはかなり難題だ。しかし、今はそれに縋るしかない。自分の力を信じるわけではないが、仕方なく門に手を寄せる。

いつも無意識に使っていた力。最初は魔力。次は天力。その時の気持ちや頭に浮かべて悠真は目を閉じる。隣りで紫も同じように門に手を寄せる。

「悠真、落ち着けよ」

「大丈夫」

紫は先程までの様子と異なる悠真に驚き、思わず視線を向ける。悠真は目をゆっくりと開けて門だけを見つめていた。その目には静かな怒りさえも窺えるほど強い光を宿している。彼の周りにまとってイオーラが広がる。それは次第に門に移り、扉が開かれた。

こいつ、いつの間にそんな芸当できるようになったんだ？

あまりにも自然と行っている彼に目を見開き、彼は唾を飲み込んだ。いつの間にかこちらの世界に馴染んでいる悠真。それは彼の素直な性格と純粋な心が一番の原因だが、力の操作に関しては彼の才能としか考えられない。

「紫君、君がやらないと流石に開かないよ？」

伯鳳の最もな言葉に正気に戻り、紫は慌てて魔力を放つ。もう八分くらい開いていた扉はそれによりゆっくりとまた開き始めた。ついに完全に扉が開き、それと同時に消え、門の枠だけが残った。扉の向こうには真つ暗な闇が広がっている。

悠真はそれに臆することなく最初に足を踏み出した。紫もその後が続く。

「驚きましたねえ、本当にやってしまうとは」

「そうだね、だけど想像通りだよ」

伯鳳は楽しそうに笑って鶴の頭を撫でる。珍しい行為に彼女は瞬きを繰り返した。そのまま門の中に入っていく彼の背中を見つめながら鶴は妖しく笑った。

常に雲に覆われた空、深い霧が立ち込める森、鳴き止むことのないカラス、それが普通の魔界の姿だった。しかし、四人の目の前に広がるその世界は見たことのないものだった。

薄暗いだけだった空が黒く、霧は森の範囲を超えてどの場所にも存在し、うるさいくらい鳴いていたカラスさえも姿が見えない。これは魔界の住人達が危機に晒されている証拠だ。驚愕で声を失っていた悠真は唾を飲み込む。

「紫ちゃん、急ごう。レイズの元に」

何が起きているのか、今は細かい現状が知りたかった。何かをするにも、まずはそれだ。悠真は紫の背中に乗って、四人は城を目指す。何処にいても城付近と同じくらいの霧が浮流している。長居をしていたら悠真の命が危ないくらいだ。そのためか、紫の速度は他の二人に対していささか速い。

彼の気遣いに直感で気づいている悠真は苦笑するだけで何も言わない。この行為は彼自身もありがたいことには変わらない。

「間違いありません、また魔力が充満しています」

「うむ、レイズが不調というのは考えにくいのだが。やはり異常がこちらにもきているということだね」

「つべこべ言っていないで飛ばせ！魔界を、滅ぼすわけにはいかないだろ」

あっという間に城に辿り着き、中に入る。彼等が入ってもレイズ

が迎えに来る様子は一切ない。悠真は少しだけ胸騒ぎを覚えて、走り出した。いつも予測不可能な彼に振り回されるはめになる紫は溜め息を一つついて後を追った。

「おい、悠真！」

「感じる天力が弱いんだ！レイズがあぶなっ

」

がこん

こんな時にも罨は作動する。突然悠真の右側の壁が回転して、中に放られる。一瞬の出来事に紫も対応できず、それを見送るしかなかった。そして、もう一つ溜め息をついて引き戻した。罨に詳しいはずの鵜の元に行くために。

一方、壁の中に放られた悠真は真っ暗なその場所に動けずにいた。

「どうしてこの城はこんな罨がいっぱいあるんだ」

いや、わかってる。わかってるさ。どうせお鵜さんの趣味なんだってことは。

もう、何もかも諦めかけている。しかし、彼は今落ち着いてここで助けを待っている場合じゃなかった。そもそもこの罨にはまってしまったのは、急いでいたのだから。

「何とかしてレイズの所に行かなきゃ」

真っ暗なその場所に不安を抱きながらも悠真は歩き出した。壁伝いに歩いていれば壁にぶち当たることはないらしく、スタスタと進むことができる。次第に強くなる天力にレイズの所に遠ざかってい

ないことはわかるが、詳しい位置は理解できない。

そろそろ元の道に戻りたいと壁に仕掛けがないか探す。しかし、何の変哲もない壁、なのかはいまいち理解はできないが、何の反応もない。

「うーん、困った。やっぱり紫ちゃんを待つてればよかったかな？」

今更後悔しても遅い。こうしている間にも天力が弱まりつつある。急がなければならぬ。そう自分に言い聞かせて何とか方法を考える。

そうだ、あの時できたんだから。

壁に手を押し付けて悠真は目を閉じる。思い出すのはあの時の気持ち。そうすればまた身体が熱くなる。これは自分の中にあるあるものが騒ぎ出している証拠。

いつしかそれらは身体の外に飛び出し、手を伝って壁にぶち当たる。ぴき、と鈍い音が辺りに響いた。音がした所から更に大きな音が響き、パラパラとそこから破片が落ちる。

「壊れる！」

一気に放出された魔力により壁は見事に吹っ飛んだ。あまりの威力に悠真も思わず啞然として、その様子を暫く見つめる。これが、魔力。自分の中に眠る力なんだと、とても信じられない気分になる。だが、今は呆けている場合ではない。そのことを思い出して、悠真はその場所から離れた。力を感じる場所は近い。おそらく悠真が寝泊まりしていた部屋だろう。一直線にその場所に向かって走る。

「レイズ！」

部屋に入ればベッドの上でうずくまる彼女が目に入った。慌てて駆けつけて、触れる。天力が弱まっているのなら、彼女に天力を分け与えればいいのだと、前回の経験で理解していた。魔力同様気持ちは落ち着かせて天力を使った時のことを思い出す。ゆっくりと、静かに沸き起こる洗練された何かが身体の奥から沸き起こる。それはまた手を伝い、彼女の身体にゆっくりと移った。

しばらくすればレイズは青かった顔を上げて悠真を見やる。不安そうな瞳に少しでも落ち着かせようと優しい笑みを向けた。

「ありがとう、悠真さん。また、助けてもらっちゃったね」

「いいんだ、そんなの。大丈夫か？」

「うん、だいぶ楽になった」

確かに先程の顔とは打って変わって彼女の頬には赤みがさしている。悠真も一安心して、息をついた。

「まったく、いくらなんでも壁を壊すことないだろ？」

「本当、豪快だなあ、悠真君は」

タイミングよく追いついた三人に二人は顔を見合せて笑ったのだ。った。

場所は広間に移り、鶴の出す紅茶を飲みながらやっと本題に入った。まずはこの世界の現状。伯鳳が言うには既に半分の妖怪が消滅しているようだ。他の妖怪は生きてはいるものの、自我をなくしていてもおかしくない状態らしい。事態は柳龍一が訪れたあの時よりも深刻だ。

「でも、どうして。地球との繋がりが不安定になったことでどこまでなるの?」

「まあ、確かにこちらの世界にも地球からの魂の香りが微かにですが届いていますわ。そこが問題なのでは?」

「まあ、少なからずは関係していると思うが、実際ここまでの被害にはならないだろうね」

「……………なあ、ずっと気になってたんだが。何を隠してる?」

紫は紅茶を一口も飲むことなく、二人を睨みつけていた。その鋭い視線を軽々と伯鳳はかわして笑ってみせる。それが逆に紫の癢に障る。

「どうということですか?」

「こいつらは何か隠してるんだよ、そうだな……………天界に悠真が行ってしまった時くらいから」

「ああ、それって門についてじゃない?」

何気ない悠真の一言に珍しく鵜と伯鳳も目を丸くした。悠真は落ち着いた様子で紅茶を口に運びながら気持ちを落ち着かせる。連続で力を使ったためか、心なしか身体は重い。紫でもそんなに頻繁に魔力を使うことはない、とこの部屋に来る前に怒られたくらいだから、疲労は相当なものだろう。

「どういう意味だ?」

「さあ？俺にはわからないけど、天界の門のこと、今回の門の異常、それらは何となく伯鳳さんに関係してるんじゃないかと思って」

ただの当てずっぽうだが何故か確信を抱いた様子に紫は苦い表情を作る。しかし、その言葉に伯鳳は堰を切ったように笑い始めた。

「伯鳳様？」

「はっはっはっは！本当悠真君には敵わない。そうだよ、天界での門の出現はこの私が仕組んだこと。それがきつかけとなって今回の門の異常が発生した」

「な、どういう意味だ！何でそんなこと」

「これが、魔王の仕事だからさ」

いつもとは違い、冷たい目線に紫は口を閉ざした。口出しを許さない、とそれが語っているのだ。それぞれの世界を滅亡させるためなら、こんな回りくどいことは彼ならしない。それなら、別の理由があるのだろう。

「とりあえずどうしますか？このままこの状況が続けば私だけでなく悠真さんはもちろん、紫さん達にも何らかの異常がくるかもしれません」

既にほとんどの妖怪に異常が起こっている。この世界をこのまま放っておくわけにはいかない。

「ならば、門を閉ざせばいいんじゃないの？この世界と地球を一番

深い所で繋がっているのは門だろ？こちら側の門を探して閉ざせば、少しは回避できない？」

そして、次の目的は。
また、門。

第三章 進行する歪み（後書き）

遅くなりました。そして、またギャグない。し、話の進みが早い？
のお、すみません。次は少しでもギャグを入れたいと思います！

第四章 始まりの場所

ここで一度おさらいをしておこう。

悠真が関わっている世界は三つ存在する。

一つは命、魂が共に存在する生の世界。

一つは人以外の死んでしまった存在が集う、正の世界、つまり天界。
一つは人以外の死んでしまった存在が集う、負の世界、つまり魔界。
そこにはそれぞれ門が存在し、彼の行き来する道を作っている。

地球には天界に繋がる門、魔界に繋がる門が。

天界には地球に繋がる門、魔界に繋がる門が。

魔界には地球に繋がる門、天界に繋がる門が。

それぞれに二つずつ門があり、それぞれの世界を繋げている。

門の特徴としては、地球と繋がっているものはどちらか一方が固定した場所に存在しないことだ。

地球にある門が固定されていない門であるのなら、それと一対にある天界の門はある特定の場所に固定されて存在する。

逆に地球にある門が固定されたものであるなら、それと一対にある魔界の門はそのつど場所を移動し、存在が掴めない。

今回の事件は、そんな世界を繋ぐ大事な門に異常が来たしていることだ。

世界を繋ぐ道と入り口が不安定となれば、本当なら来ることのない存在が他方の世界に自由に行き来してしまう。そうなればその世界の住人は大混乱になるだけでなく、世界の安定すら危うくなる。

そうなる前に、門の繋がりを断ち切ってしまうおうと、前回に悠真が提案したのだ。

「そうですねえ、確かにそれが一番ですけど」

「伯鳳さんが何を思っでこんな異常を起こしたのか俺は知らないけど、このままこの状態にしておくことはできないよ。天界も、魔界も、地球もこのままにしておけば危ないんだ」

「だけど、どうやって探す？わかっていないとは思っけどこの世界の門は特定の場所に落ち着いて存在しないんだ。こんな魔力が充満した状態で探すのは至難の業だぞ」

これには悠真も黙ってしまい、視線を落とす。解決方法を提案しても、それを行う術がなければ何にもならない。こうしている間にも世界にはどんどん歪みが発生している。焦りと緊張が彼らの思考を鈍らせていた。

「そっいえば俺、ここの門見たことないんだよな」

「そうだね、この間は門で来たけど、自分の意思で帰ってしまったしね」

「うーん」

一度も見たことがないものを探すのは難しい。門から発生している僅かな魔力を感じ取ることも、それは門の魔力の波長を知らなければこの世界では無理なことだ。ただでさえ、今は妖怪達の魔力が充満しているというのに。

悩みすぎて頭痛を起こし始めている悠真にレイズは近づいた。

「あの、できるかはわかりませんが、やってみましようか？」

「え？」

にっこりとレイズは微笑んで悠真の手を握る。何をするのか理解できないまま彼女は目を閉じた。次第に高まる天力、それを目を大きくして見つめる。

暫くして、ゆっくりとその大きな瞳を悠真に向けた。すると城の窓からある一点を見つめる。同時に四人もその視線を追った。そこには見覚えがあった。森の向こうにある大きな崖。

「あそこって、俺と紫ちゃんが出会った所？」

「あそこの洞窟の中に今は門が存在しています。微かですけど、同じ波動を感じました。悠真さんと」

「なるほど、悠真君の魔力の波動は門と同じ。だから、この世界に呼ばれたのだから、それと同じ波動を探せば見つかるってわけだね」

はい、と嬉しそうにほほ笑むレイズに悠真は言葉を失う。魔力、天力というものがとても力の強いすごいものだということは知っていた。今回彼も何度か使い、その効力も知っている、つもりだった。しかし、レイズのようなそんな使い方があるということははっきり言っ心外だ。

「あそこに、門が…」

「どうするんだ？行くのか？」

「……………ついてきてくれますか？伯鳳さん、お鶴さん、紫ちゃん」

「ふう、まあ最初からそのつもりだったからね。行かせてもらおうよ」

「伯鳳様が行くのならば私も同行させてもらいますわ。あの中にもそろそろ興味が湧いていたころでしたし」

「……当たり前だ」

すんなりとした様子に思わず笑んで、悠真はもう一度洞窟の方へ視線を向ける。あそこからもかなりの濃度の魔力が立ち込めている。中は一体どうなっているのか、予想もつかない。

「行こう、今はもうそれしか方法はないから」

彼の言葉に全員ゆっくりと頷いた。

「う、ぎゃあああああああ!!」

「うるさい、黙れ!」

薄暗い洞窟の中、紫が灯す青色の炎だけを頼りに四人は歩を進めている。しかし、案の定そこには死にかかった妖怪の大群が存在し、悠真を狙って近付いてくる。

ぬめぬめつとした者やにゆるにゆるつとした者、ねばねばつとした者もいれば、とろとろつとした者もいる。

「って、全て気持ち悪い系じゃん!」

まあ、それはこの小説だから仕方がない。悠真の叫び声は洞窟内に響き、逆に妖怪に自分の居場所を教えている。ねばねばつとした

者はその声を合図に飛び掛かる。しかし、ぬめぬめつとした者が前にいて、失敗。

「だあ、ややこしい！」

「悠真さん、ここは全て食べてしましましょう」

「出来ません！」

「じゃあ、やっぱり消滅するべきだね！」

にっこりと笑った伯鳳は何処からか白い羽を三枚抜き取り、息を吹きかけた。それは瞬く間に白い炎と化し、彼は妖怪に向かって投げつけた。刹那、ぬめぬめつとした者、にゆるにゆるつとした者、ねばねばつとした者、とろとろつとした者は白い炎に包まれ、灰となる。

「最初からやれ！」

「面倒で」

「ですよねえ」

「いえ、どうせやるんですからやってくださいいいいい！」

既に半ベそ状態の悠真は二人が本気になることを祈るばかりだ。そろそろ息も切れそうになる頃、悠真の足に何かが纏わりついた。必然的にバランスを崩して、尻餅をついた彼はすぐにその正体を見る。それは、てかてかした者だった。

「またかよっ！」

必死に足を動かすが、なかなか放してくれない。それどころか次第に身体をよじ登っていく。てかてかした者は炎の光を反射してまっすぐ見れない。結果、よじ登る感覚だけが悠真を襲い、非常に気持ち悪い。

「ぎゃー！紫ちゃん助けてえ」

「何遊んでんだ！この忙しい時にっ！」

てかてかした者は紫に思い切り蹴られて、床に転がる。鶴の足元に来たそれは、天使のように微笑む彼女に…、何をされたのかは伏せておこう。

既に精神的に余力がない悠真はその場に座り込んで肩を落とした。次第に濃くなる魔力に知らぬ間に気力が削がれているのだ。

「まだ、道は遠い？」

「こっ魔法が充満していると、わからないな」

「そう考えるとレイズは流星と思うべきだね。この中で悠真君と同じ波動を見つけて出すんだから」

「そうですねえ、天族は魔力には敏感と聞きますが、これはやっぱりレイズにしか出来ない技ですね」

一つ一つの魔力の波動は妖怪同士でも感じ取るのは至難の技。それをかなり離れた場所から、わずかにしか発していない門の波動を探し出すのは、まさに神業とも呼べること。

それを弱っている身体で難なくこなした彼女はそれだけ特別な存在なのだ。

「レイズの為にも、早く行かないと」

がくがくな足に力を込めて、悠真は立ち上がる。まだ先は見えない。真つ暗なその道を見据えて、走り出した。その後を紫、伯鳳、鶴が続く。

どのくらいの時間がたったことか。肩を上下させる悠真は肩にかかった変な皮を剥ぎ取る。顔は泥だらけ、服は煤だらけ、足はぼろぼろの状態でじつと友の三人を睨んだ。

「あのさ、助けしてくれるのは嬉しいんだけど、俺を巻き込むのはやめてくれないかな？」

先程から彼等は悠真を襲った者を倒す度に襲われている彼までも炎等に巻き込んでいた。その度に悠真はダメージを蓄積していく。

「いやあ、つい悠真君の反応が面白くて」

「かあわいいんですもの。罪ですわあ」

「変なこと思わないで下さい。俺、辿り着く前に死んじゃいますよ」

大きく息をつくと悠真は突然進んでいた方向に振り返った。その異常な反応に三人は訝り、同じように道の先を見つめた。しかし、妖怪がいるわけでもなく、何かがあるわけでもない。

悠真はそれでもそこから視線をはずさず、身体も同じ方向に向ける。

「着いた」

「え？」

悠真の言葉を理解する前に彼は勝手に歩き出す。まだ道は続いて、先は見えない。しかし、まるでそこに部屋の扉があるかのように彼は手を伸ばした。

ふっと、手が消える。暗闇に飲み込まれるように悠真はその中に入った。何の恐怖感もなく、違和感も覚えず、そこにある何かを知っているかのように。

道なのかもわからない、暗闇の中、悠真は恐れず進む。わずかに感じる力を頼りに足を進めて、そして。

眩い光を発する門が、視界に飛び込んだ。

第四章 始まりの場所（後書き）

大変お待たせしました（汗）やっと第四章です！

まさかこんなに長い間更新できないとは…未熟者ですみません。

今回は、一応ギャグ入りましたかね？一応頑張ったつもりですが、次は遅れないよう努力します！

第五章 偽りの記憶

いつもの、香りがする。

穏やかな鳥の声、緩やかな陽の光が部屋の中まで漏れる。安心できるその場所が何処なのか彼は直感していた。ゆっくりと身を起こせば、やはり見慣れた部屋にほっと息をついた。彼、悠真はそのままパジャマを脱ぎ、着慣れたシャツに身を包む。

部屋から出れば味噌汁の匂いが鼻をくすぐる。とたんに空腹を訴える自分の身体に苦笑した。階段を下りているとリビングから賑やかな声が響く。日常茶飯事なので気にすることはない。

「母さん、俺にもご飯」

「あら、悠ちゃん。先におはようでしょう？」

「ああ、おはよう。今日は何？」

「焦げた鮭だよ、ユーマ兄ちゃん」

「まだマシな方だろ、これは」

「そうだな、結婚した時はもっと、色が」

「もう、文句あるなら食べなくていいわよ！」

想像通りの賑やかさに微笑んで、椅子に座る。確かに所々焦げがある鮭を摘みながら時間を確認すればいつもより二十分は余裕だ。ゆっくりと食事を味わいながら、何か忘れているような感覚に陥る。

「どうしたの、そんなに鮭が不味かった？」

「まさか、久しぶりに外はカリカリで中は生焼けとか？」

「いや、何か今日、長い夢を見ていた気がするんだけどさ、内容忘れちゃってさ」

思い出さなきゃいけないくらい、大事な内容だったような、と心の中で付け足して悠真は箸を加えたまま唸る。けれど、一度忘れてしまった夢はなかなか思い出すことは出来ない。夢は夢か、といっしか諦めて、口直しに味噌汁を一気飲みして家を後にした。

綺麗な白い雲が程よく散らばる爽快な天気だった。弁当しか入っていない軽い鞆を肩にかけた状態で、悠真は普通の人よりも早めに歩く。久しぶりに身体が軽かった。このまま走り出してもいいくらいだ。

「おはようございます！」

ふと、聞き慣れた声に振り向いた。同じ制服を着た同じくらいの身長の子に、悠真は彼と同じ位無邪気に笑んで、挨拶を交わす。

「はよ、原松」

学校で誰よりも気が合う後輩だった。ふと、考えてみれば同じクラスの男子よりも仲良くしているかもしれない。バスケット部の助っ人等でよく顔を合わせるのもそうだが、会話のノリがおそらく悠真と恐ろしく似ているからだろう。

「はあ、そろそろ学校がだるくなってきました」

「それ結構遅くないか？普通一年の後半くらいから思っただろ」

「俺結構優等生ですから！」

「はは、自分で言っちなよ！」

他愛無い会話を繰り返して、あっという間に学校に到着する。上履きに履き替え、教室に向かっていると、ふと芳季は不思議そうに悠真を見やる。

「先輩、どうして二年の教室の方に行くんですか？」

「は？何言ってるんだよ。俺二年だろ」

「な、何寝ぼけてるんですか！先輩は俺のいつこ上つすから、三年じゃないっすか！」

瞬間、彼の思考は停止する。確かに芳季はもう二年で、悠真はその一つ上の学年にいるはずだった。だけど、確かに彼と同じクラスだったはず。悠真にはその記憶がちゃんと残っていた。

だけど、何故もう一度二年をやらなければならなくなったのか、肝心のその部分の記憶がない。しかも、芳季自身はその事を覚えていない。

どうしてだ？

何で、俺……二年だと思っただらろう？

何かが彼の頭の中で引っかかっている。だけど、それは解けるこ

とはなく、気持ち悪さは増すばかりだ。違和感を覚えながら、言われたクラスへ赴き、慣れない教室で、慣れない授業を受けて、ただ一日が終わるのをじっと待つ。

何で、見知った顔が教室にいたことが変に思えるんだろう。

ずっと続く違和感。何かを忘れてる。何かが足りない。一体それが何なのか、彼にはわからなかった。ただ、ただこの日常が自分が知るものではないことを、いつしか確信していた。

茜色の空が悠真の顔も朱に染める。目を細めその空を見つめて、ゆっくりと帰路を歩く。慣れた道、同じ制服を着た生徒が同じ方向に歩いていく。そこには今日同じクラスだった男子生徒もいた。彼は悠真の姿を見つけ思わず話しかけた。

「あ、悠真！そろそろあの時期だな！」

「へ？何？」

「何言ってるんだよ！十月といたらハロウィンだろ！お前今年は何やるんだろうなあ」

一瞬、何かが頭の中をかすめる。しかし、それははっきりとしたものを映さずに消えた。何も言わない悠真を気にすることなく、友人は勝手に話を進める。

「三年が受験を忘れて楽しめる最後のパーティだしな！本当、柳会長様様だよな！」

「柳……………龍一？」

「あ、ああそつだぜ。大丈夫か？今日ずっとぼーっとしてんけど」

「あ、ああ。わりい、ちよつと調子悪くてさ！先帰るな！」

逃げるように友人から離れて、そして止まる。確かにおかしい。

朝から何かがおかしい。それは悠真自身がおかしいのか、それとも…。

彼は暗くなりかけた空から視線を外して、冷たいコンクリートを見つめた。

「……………？あれ、ここに街灯なかったっけ？」

一つだけ、間隔を無視した一つの外国製の街灯。はっきりとした記憶。だけど、それはすぐに違つと気づいた。そんな街灯は元からそこにはなかった。だけど、一回だけ、本当にその時だけ、彼には見えたのだ。そんなありえない街灯が。

そう、彼にはあつたはず。普通なら起こりえない現象が、出来事が、それらの記憶を持つていたはず。

「そつだ、そつだよ！」

ずっと引つかかっていたもの。おかしくて当たり前なのだ。この平凡で、普通の生活が、普通の記憶が、彼にとつたらおかしいことなのだ。

「こんな、まるで世界がここだけのような記憶……。こんな日常。全部が　　おかしかったんだ！」

ピシ

何かが、ひび割れる。悠真は強く目をつぶって記憶とは違うこの世界を否定するように、視界を暗くした。

「違う！ここは…これは俺が知る世界じゃないんだ！全部、全部なかったことなんて出来ない！」

ピシ

ビキ

世界が途端に弾けた。見知った風景はガラガラと崩れて、いつしかその場所は黄土色の土で作られた洞窟へと姿を変えた。暗いはずのその空間は、黒く、けれど白い光に明るく照らされている。

映像の変わりようによつてか、貧血と同じような眩暈に襲われて膝をついた。じつとりと額には汗が滲み、あの日常を送ることに体力を消耗していたことにやっと気付く。

「　　つ、皆！」

辺りを見回せば紫、伯鳳、鶴が全員横たわっていた。顔色を見る限り悠真ほどの疲労は見えない。力の入らない足を懸命に動かして彼は立ち上がる。先ほどから挑発するかのよう明暗を繰り返す魔界側の門に、一步、二歩と近寄った。

ありえない日常。本当ならあの日常を送っていたはずの記憶。それを彼に見せていたのはおそらくあの門。そして、四人がここに入

った目的もその門。

「どういつつもりか、知らないけど。もう、やめるよな」

もう、体力はなく。何をすればいいのか、わからない。だけど、彼は距離を少しずつ縮めていく。ぐらぐらと揺れる視界の中、その門だけを見つめて。

「もう、嫌なんだよ。誰かが苦しむの見るの」

いつしか彼は手を伸ばせば触れるほど近くに寄って、だらんと肩を落とした状態で静止した。すると、門は一定の明るさに光を調節し、悠真を受け入れる。苦笑して、深く息を吐いた。

「お前も、苦しかったんだろ？なら、もう……休んでいいから」

そっだ、苦しかったんだ。

だから、俺をこの世界に呼んだ。柳龍一と同じように。

何よりも純粹で、何よりも欲望が深い人に、助けを求めたんだ。

「最初から、おかしかったんだ。俺がここにいるのも、俺が…皆に会えたのも」

震える声。震える肩。全てが狂っていた。人が死した者達の世界の訪れること。人が何度も来ること。全てが世界の歪みの始まりで、警告だった。悠真がこの世界に来たことは、これから始まる崩落の証。

「伯鳳さんはわかっていたんだ。全部…」

強く瞼を閉じる。暗闇の中で浮かぶのは、魔界に来てからの日々。記憶となってしまう、もの。全てをしまいこみ、目を開ける。覚悟を決めたその瞳は少しだけ涙で濡れる。

ゆっくりと門に触れる。共鳴するかのように光を強くした門に微笑んで、優しく呟いた。

「大丈夫、君は役目を終えるんじゃないよ。一回、休むだけ。君と同じ魔力の波動を持った人はちゃんとこの世界にいるから。ちゃんと君の事理解して、君のためにここに俺を連れてきた。そして、この世界をまとめる、最強の魔王。だから、一回、繋がりを閉じて、休もう?」

涙が零れる。その雫が地面に落ちた瞬間、門は大きく開いた。眩いほどの光を放ち、彼を招き入れる。ゆっくりと頷いて歩を進めた。呑み込まれる瞬間振り返れば未だに起き上がらない三人が視界に入る。

「……………俺さ、ここに呼んでもらえて嬉しかったよ。ありがとう。俺に、想い出をくれて、ありがとう」

さようなら

空が白く照らされる。暗闇だった世界は光を得て、朝を迎えた。まるで何事もなかったかのように一日が始まる。

けれど、彼は確かにそこにいた。その事が起きなければいけないはずの、樹海に。朝が来てもその場所から動くことはなく、胸に残った痛みはいつまでも消えることはなく、ただその場所に立ち続けた。静かに流れる涙を拭くことも忘れて、あの場所では見れなかった青空から目を逸らして、ずっと…。

世界に起きていた異常現象は確かに消えて、いつも通りの日常に戻った。

世界を救ったはずの、彼の心に傷を残して。

第五章 偽りの記憶（後書き）

一話ほど設定とは長さが変わりました。

次で最終回となります。更新は、いつになることやら（汗）
最後までお付き合いして頂けると嬉しいです！

最終章 Night - mare

まだ肌寒い日。しんみりとした空気が最近では多く流れている。黒い筒を片手に悠真は三年間世話になった校舎を見つめる。見渡せば同じ学年の人達が顔を真っ赤にして涙を流していた。

今日は卒業式で、高校生最後の日だ。無事に悠真は進学も決まり、先の期待と不安を持った状態で高校を後にした。

「先輩！」

後ろから聞こえた声にとっさに振り替える。顔を見る前に呼びかけられた相手はもう理解していた。思った以上に深い付き合いになった後輩、原松芳季だ。同じ筒をもった状態で駆け寄る彼に悠真は微笑む。

「もう、先に帰らないで下さいよ！」

「だって、もうやることないし。それにちょっと俺浮いてるだろ？」

「あれ、そんなこと気にするタイプでしたっけ？」

「お前、最近いい性格してるよ」

他愛無いこの会話がいつの間にか心地よい時間になっていることを彼は知らない。けれど、こういった普通の出来事が、本当に大切なことなんだと、最近気付き始めた。高校生、青春の時代とはよく言うものだが、悠真にとっては違う意味で特別なものだった。

「うっわ、先輩ボタン一個もないじゃないっすか！」

「あ？こんなん半分くらいふざけで男子が取ってただけだぞ？」

ああ、地味に先輩狙いの人が頑張って取ったんすね…。

忘れてはいたが、彼は女にも男にも地味にモテる。鈍感な悠真に想いを密かに寄せる男子達を憐れみ、芳季は苦笑した。それでも半分は女子から取られているわけで、それはもう本当にモテているのでは、と地味に今更考える。

一方悠真は長くなってきた髪をそろそろ切ろうかと全くもって関係のないことを考えていた。邪魔くさそうに髪を払えば、芳季は一瞬見えたものに目を見開いた。

「先輩刺青なんかしてたんすね」

「へ？」

首の付け根。自分では鏡を使わないと見えないその場所に黒く、独特な刺青が彫られている。今までその存在に全く気付かなかった芳季はは興味津々で見つめていた。

しかし、悠真の記憶の中には入れ墨を彫ったことなんてない。首を傾げていると、一つだけ思い当たるものがあった。

それは、一昨年十月。この世界ではない場所で行った儀式。彼を、この世界と他の世界を繋ぐ証拠。

そっか、魔界との契約だ！

ありえない、と思った。門は閉じられ、この世界と魔界と天界はそれぞれに繋がりを切ったはずなのに、それでも彼はまだ魔界との繋がりを断ち切れていない。それは、普通なら考えられない出来事

だった。

だけど、悠真は気づいた。門は完全に機能を停止したわけじゃない、一時的に休止しているだけなのだ。それは、彼自身が門に咳いた事実。

じゃあ、もしかしたら。

一つだけ、彼の頭の中に希望が生まれる。そう考えたらいてもたってもいられなくなった。

「ごめん、原松。また今度ゆっくり話そうぜ」

「え？あ、先輩！」

走り出した彼に呆然とする芳季に心の中でもう一度謝り、彼は駅に向かう。まだ時間は昼前で、今から急げばそう暗くならないうちに着けるだろう。

思い立った瞬間に電車に乗り込み、一息つく。一応家には友達の家泊まるかも、と連絡だけして悠真は座ることもしないで窓から外を眺めた。

薄暗い道をひたすらに歩く。平坦ではない道はバランスを崩しやすく、早く行きたくてもあまりスピードは出せない。それでも心なしか早足に道を進んでいく。もう、随分と来ていなかったこの場所。あの時から一度も…。それでも昨日のことのように道が理解出来た。訪れたのはたった二回のはずなのに。

それほど彼にとって特別な場所だった。意味深な場所だった。忘れたくても忘れられないほどの大切な場所。

「ここだ」

やっと辿り着いた時には既に四時を回っていた。確信と共に彼はある場所に手を伸ばした。見るからに何も無いその場所に、何かあると信じて。しかし、その手はやはり空を掴んだだけで、何かを触れることはなかった。

暫く、悠真は止まった。泣き出しそうな表情を何も無い所に投げかけて、辛そうに目を細める。

そうだ、例えいつか力が戻るとしても。

俺が生きている間にそうなるとは限らない。

この世界と魔界。それは今までの経験で時間の流れが極端に違うことが理解できる。悠真が魔界に行く時、門を使わなければ同じ波動の魔力が流れる日まで彼は帰ることは出来ない。魔界にいる時間が一週間、一ヶ月、一年であっても、帰れる日は変わらないのだ。そんな常識外れない場所にある門がいつ直るのか、そんなもの彼には見当がつかない。

「はは、馬鹿だな。俺」

早とちりしたことが恥ずかしかったのか、自嘲して座り込む。ちやんと考えればわかることだった。そんな簡単なことが考え付かないほど彼は魔界に恋焦がれていた。魔界だけじゃない、天界にも。世界という区切りではなく、その世界にいる者達と会いたくて仕方がなかった。

「はは、あんな世界…最初は悪夢だと思ったのにな」

行った瞬間に訳のわからない生物に襲われ、魂をくれとねだられる。知っているものは誰もいない。それどころか、知っている生物がない世界。

正直、もう死んでしまっただと、何度も逃げることを諦めた。完全に諦めた瞬間、彼に訪れたのは死ではなく、紫がかつた青い炎の救い。彼等と同じ妖怪でありながらも悠真を助けた紫との出会い。

「そつだ、考えてみれば俺が魔界に行つて、紫ちゃんに会えたのは… 全て柳龍一がきっかけだったんだ」

その出会いがなければ紫が悠真を助けることはなかった。彼はもしかしたら魔界で死んでいたかもしれない。あの時はまだ魔力の使い方も知らなくて、一人では彼は魔力を出せも出来ない。あの世界が魔界だと知らずに人生を終えていたかもしれない。

「はは、本当俺だせー」

一人だと何も出来ない。今も魔界のこと、天界のことが何も分からない。そんなこと当たり前なのだが、それが無性に無能な気がしてならない。

「会いたい」

相変わらず魂を求めてくる形状もわからない妖怪がうじゃうじゃいるあの世界に。

面白いことが好きで、陽気に笑いながらも何よりも魔界のことを考えている魔王がいる世界に。

抜殻茶が好きで、にこにここと清楚な雰囲気だが、おそらく誰よりも強く残酷な魔王のお付がいる世界に。

無愛想だが、誰よりも世話好きで、その優しさ故に負わなくても

いい闇を背負う、心優しき妖怪がいるあの世界に。

「今すぐ、行きたいのにつ！」

強い欲望。純粹に望むそれは、人が持つ最大の能力。そして、彼のそれは何よりも強い　魔力。

暗くなったはずのその場所に淡い光が灯る。驚愕を隠せない表情で顔を上げればそこには見覚えのある扉が姿を現した。その光は次第に強くなり、ゆっくりと扉を開いていく。まるで時が止まったかのように静かに彼は扉の中に入って行った。

目の前に広がるのは雲で覆われた空。昼間とは思えない暗さだが、夜とも思えない明るさを保つそれに悠真は心を震わせた。そして確信する、確かに来たのだと。

身を起こせばそこは霧が立ち込める森の中。悠真の体には毒にしかならないが、今はそれでも感動を覚えてしまう。立ち上がり身体についた土を払うと周囲を見渡した。しかし、辺りにある木が大き過ぎて目標の物が見つからない。仕方なく歩きやすい方へ適当に足を進めた。

木々の隙間から覗いた光を頼りに歩けば、見慣れぬ場所に辿り着く。魔界には似合わない澄み切った湖。家一軒程の大きさのそれはあの城からでも見た覚えはない。

「湖？」

彼の頭に過るのは、大切な人の哀しい記憶。無くなったはずの存在。だけど、確かに目の前にある。もしかしたらここは魔界じゃないのか、と不安を抱いた瞬間だった。

「お前がいなくなった後、溢れ出したんだ。龍一の贈り物かもな」
響いた言葉に身体を震わせた。振り返ればずっと会いたかったその人物が、木の枝の上に座っていた。

「何て顔してるんだ？お前」

「紫…ちゃん？」

「だから、ちゃん付けするな」

変わらない態度に感動を覚えた。姿も、声も、言葉遣いも、態度も、確かに一年ずつと思いつけていた人物。歓喜が込み上げ、思わず涙する。

走り出した時には紫は木の下に降りていて、何も考えずに彼に飛びついた。これには予想もしてなかったのか、紫はそのまま倒れて地面に沈む。

「お前、変わってないな」

「ごめん、でも、俺…もうここに来れないと思ってたから」

涙声の彼に苦笑して、紫は身を起こす。悠真も涙を強引に袖で拭いて、顔を上げて、下手くそに笑った。

「俺は、いつか来ると思ってた。お前なら、な」

「俺、そんなすぐくないけど」

「いや」

充分すごいだろ。苦笑で呟いた紫の言葉に首を傾げて、また笑う。透き通った湖に視線を向ければ、いつの間にかそこには見慣れた三人が佇んでいた。

先ほどと同じように走り出した悠真を見つめながら紫は空を眺める。毎日変わることの曇り空。どんよりとした魔界に一つ現われたのは、綺麗な湖。

まるで、あいつのことを世界に知らせているような…。

そこまで考えて、彼は失笑する。今ではすっかり慣れてしまったあの騒がしい四人の元に、ゆっくりと歩み寄る。

いつまでも、変わらないこの風景に幸せというものを感じながら。

純粹な力。

純粹な心。

何よりも世界に影響を与え、何よりも世界に幸福をもたらせる存在。

いつからか、その定義が変わる。

それが、“Niggitt・Mare”

最終章 Night - mare (後書き)

えっと、何気に謎残したまま終わってしまいました。力不足ですね。悠真が魔界に来てまた歪みが起きないのかとか、どうして門が反応したのかとか、あはは。

一応設定的には、門が反応したのは、彼が門の魔力と同じ波動の魔力を自ら発動させて、無意識に力を与えたからです。それにより、門は「人を魔界に送った」という判断ではなく、魔界の魔力と同じ魔力を持っていたため「魔界のものを魔界に戻した」という考えで魔界に送られたわけです。

それでも少しばかり歪みが起こる可能性はありますが、門の力を封じるほどの影響は出ない。

という感じですよ。私もちゃんと細かい場所まで設定を考えていなかったのもあり、矛盾が生じている気がします。わからないことがありましたらお気軽に申してください。

では、約2年の連載でしたが、ここまでお付き合いして頂きありがとうございます。とっさでございます。

できれば一言下さると嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6315b/>

Night-mare

2010年12月1日07時27分発行